
G O D E A T E R

陸茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R

【Nコード】

N 7 4 1 2 U

【作者名】

陸茶

【あらすじ】

人類は突如現れた不思議な生物達に出会った。
その生物達は世界各地へ次々と姿を現し、地球全ての生物に対しその牙を向けた。

人類はそれに対抗すべく軍隊を派遣した。
初めは人類の方が優勢だったのだが……………

この作品は初めてかいた小説です。よかったら見てください（・ω・）
*これはまだ原作メンバーと出会ってません。これから先会わせま
す。

荒神が弱いとか感じるかもしれませんがそこは気にしないでくださ
い。
後でしっかりと説明します。

GE

主要登場人物

八雲 レイジ

（男 大学生2年 19歳）

使用神機 身体直結型

尾崎 訃音

（女 大学生1年 18歳）

（以下フイー）

使用神機 特殊形状神機

ハル教授

（男 大学教授兼生物学者 36歳）

ダム （男 元特殊部隊員 26歳）

使用神機 新型神機

バスター・スナイパー・タワーシールド

美鈴 （女 元兵士 24歳）

使用神機 新型神機

ロング・アサルト・シールド

用語

・荒神（アラガミ）

何でも補喰し補喰したものの性質を取り込む生物。

複数の細胞「オラクル」（細胞自体が1つの生命体）が集まった生物であり、神機以外の武器で殺すには、司令塔の役割を果たす「コア」と呼ばれる司令細胞群を取り出すか、破壊するか、二つの方法しかない。

銃弾に耐性をもったりするため討伐するには、荒神のコアをベースに造った武器「神機」が最も有効とされる。

・神機（ジンキ）

アラガミの「コア」をベースに造った武器。ベースとなるコアによつて性能に差がある

身体に直接接合するタイプ、剣又は銃形態だけの旧型、剣、銃形態の両方使える新型、分析不能で他の神機よりも高性能の特殊形状神機の4タイプが存在する。

神機は基本、特殊形状型以外、三つのパーツからなる。

剣……三種

・バスター 攻撃範囲、威力は三種類中最高クラス

しかし重量ゆえ移動スピード等は最も遅い

「チャージクラッシュ」という高威力の斬撃が

可能

・ロング ショートとバスターの間

移動スピード攻撃スピードのバランスが良い
「インパルスエッジ」という射程の短い強力な砲撃が可能

・ショート 攻撃スピード、手数は

三種類中最高クラス

重量は軽いが威力は三種類中最も低い

特殊な攻撃手段はないが、移動・攻撃スピードは最も

速い

銃……三種

・スナイパー 正確な狙撃が可能。

連射スピードは遅い

射程距離は三種類中最も長い

射撃時の反動が最も低い

・アサルト 連射スピードは三種類中最高クラス。

反動がそこそ強く正確な射撃は困難

射程距離はスナイパーの3/2

・ブラスト 砲撃の威力は三種類中最高クラス

バレットによっては一撃で高層ビルを砕く程の威力が

ある

高威力の反面、射程距離は最も短く反動は最も強力

連射と正確な射撃は不可能

装甲……三種

・タワーシールド

三種類中最も重くガード範囲が広い
展開速度は遅いが、バスターとセットで使用する
とシールドの展開速度が上昇する

ミサイルすら軽く受け止める程非常に強固な装甲

・シールド

タワーとバックラーの間
展開速度もガード範囲も半端

戦車の主砲は軽く受け止める

・バックラー

三種類中最も軽くガード範囲が狭い
展開速度は最も速いが最もガード範囲が狭い
乗用車との正面衝突にギリギリ耐えられるぐらい

神機を使うには、荒神の細胞を自らの体に取り込むしかない。細胞に適応することに成功すれば、神機を使うことが出来る。その上、身体能力、治癒力が飛躍的に上昇する。適応出来ない場合、又は細胞を過剰投与した場合、荒神細胞に体を乗っ取られ、アラガミ化するか、死亡する。

蝕之零・プロローグ

～ Prologue ～

人類は突如現れた不思議な生物達に出会った。
その生物達は世界各地へ次々と姿を現し、地球全ての生物に対しその牙を向けた。

人類はそれに対抗すべく軍隊を派遣した。
初めは人類の方が優勢だったのだが………
奴等は恐るべき速さで進化した。

銃弾に耐性があるものが出現すると人類は徐々に対応出来無くなっ

ていった

…そして兵士達はなす術も無く奴等に食い荒らされていった……

そんな闘いを繰り返すある日、アメリカにある『対未確認生命体対策司令部』に1人の兵士から無線が入る。

「・・・ザー・・・・・・・・・・ザ、ザー・・・・・・・・・・ザ・・・・・・・・・・ブツ・・・・・・・・・・
・私達人類は・・・・・・・・地球を汚・・・・・・・・た代償を・・・・・・・・今払って・・・
るのだう・・・・・・・・か？・・・・・・・・ザ、ザザー・・・・・・・・ヤツ・・・・は地球・・・
の生物を・・・・・・・・べて・・・・・・・・喰らい・・・・・・・・くす・・・・・・・・・・・・るで・・・
・荒・・・・・・・・る・・・神の・・・うだ・・・・・・・・私達は・・・・・・・・かな・・・ず・・・
ヤツ・・・・を・・・・滅・・・・する！！・・・・・・・・ザー・・・・・・・・ザザツ・・・・・・・・..
ザー・・・・・・・・ブツ・・・・・・・・・・」

この無線で名前の決まっていなかった奴等は、

「荒神くアラガミく」

と呼ばれるようになった……………

奴等がアラガミと呼ばれるようになってから3ヶ月、人類はなす術も無く手をこまねいていた。

だが、1人の生物学者の存在により全てが変わる……………

ある日、兵士達が命懸けで持ち帰ったアラガミの死骸を解剖し続け、荒神細胞を取り出し、その細胞を生物学者が信用する兵士に荒神細胞を極秘で移植した。

実験は成功し、大々的に公表された。

すると人道に反する、と反対派の学者達が出てきた。

しかし、荒神細胞を投与された兵士の能力を実際に見ると反対派も黙認せざるを得なかった。

荒神細胞を投与された兵士は、筋力、スピード、打たれ強さなどが人間を超越していたのだ。

初の荒神討伐戦では巨大な剣を振るい荒神討伐に成功した。

だがその兵士は殺した荒神の前に立つと……………

腕が小刻みに震え、形状を造り変えて、荒神を貪り喰うのであった……………

そんな中、とうとう日本にもアラガミ達が姿を現しはじめる……………

蝕之一・大学寮（前書き）

日本、首都東京

世界各国で人類を脅かす敵、荒神が日本に現れた事により日本国内に衝撃が走る。

日本政府は、荒神出現の報告があつた地区に自衛隊を派遣した。

しかし、そのアラガミは銃弾への耐性のある種であつたため、自衛隊は荒神により一方的に虐殺されるだけであつた・・・

そんな中、とある田舎にも荒神が現れた所からこの物語りは始まる・・・

蝕之一・大学寮

日本、首都東京

世界各国で人類を脅かす敵、荒神が日本に現れた事により日本国内に衝撃が走る。

日本政府は、荒神出現の報告があつた地区に自衛隊を派遣した。

しかし、そのアラガミは銃弾への耐性のある種であつたため、自衛隊は荒神により一方的に虐殺されるだけであつた……………

そんな中、とある田舎にも荒神が現れた所からこの物語は始まる……

ダッダッダッダッダ、

ボタン！！

「レイジさん！！」

豪快に寝室の扉が開くと女性が大声を発しながら駆け寄って来る。

「んー・・・何だあ？・・・どしたあ？・・・ふぁーあ・・・
・・・眠い・・・」

私がベッドでゆっくりとおきあがり欠伸をしながら目を擦ると、女性
性は私の手を掴みながらこう言った。

「のんびりしている場合じゃありません！！・・・
・・・荒神が現れたって街のみんなが大騒ぎしています
よー！！」

「・・・アラ・・・ガ・・・ミ？」

私は荒神と聞くと女性の手を振りほどいてベッドから飛び降り、ク
ローゼットに近寄る。

「着替えるからそこで待っていてくれ!!」

「あ、ハイッ!!」

女性が寝室から出て行くと急いで着替える。

着替えを済ませ、外に出ると、ここが学生寮の最上階だったため、多くの同居者達がアラガミがいるであろう方を向いて話していた。その中で、さっきいた女性「尾崎 訃音>オザキ フイク(ニツク ネームはフィー)」は一際小柄な為、何処にいるのかは、すぐにわかった。

「・・・・・・・・・・フィー、どんな・・・・・・・・アラガミが現れたんだ？」

私が彼女の肩をポンツ、と叩くと彼女は小刻みに震えながら50m離れた私達の通う大学のグラウンドを指差していた・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・な・・・・・・・・・・」

私は彼女の指差す場所を見て絶句した・・・・・・・・・・彼女が震え、膝をつき手で顔を覆って声を殺し、泣いていた。

大学のグラウンド内では、インターネットでみた「オウガテイル」というアラガミが逃げ惑う人々に飛び掛かり貪り喰っていた・・・・・・・・・・

しばらくすると学生寮内でパニックが起き、みんな我先に逃げようと階段を目指して走り出す。

「先輩！？どこ行くんですか！？」

私は彼女の腕を掴むと自分の部屋に入り、鍵をかけた。

「もしも今、みんなと一緒に逃げれば転んだりした奴等は逃げようとする奴等に踏み殺されるかもしれない……大勢で逃げればアラガミ達の的になる可能性がある！！……だから、しばらくここで窓から様子を見よう……」

隣を見るとフィーが今にも泣きそうな顔をしているので、彼女を慰める為に私は笑顔で（嘘）を言う。

「大丈夫。すぐに自衛隊が助けに来てくれるはずだ……」

「

フィーは黙って頷いた……

（……………これで少しは安心するだろう……）

私はパソコンにむかいこれからどうしようか考えていた。

私は世界にアラガミが現れたその日からずっとインターネットでアラガミについて調べていたからアラガミのことは大体知っている……

現在軍が所持している武器では、アラガミを倒すのはほぼ不可能。

オウガテイルを一匹殺すのですら大変なのである
拳銃が効かないので自衛隊ではどうにもならない．．．．．

先程、私が彼女に言ったことは嘘である．．．

先程述べた通り、オウガテイルらに銃弾は効かない．．．．．

．
もしも、万が一にも、自衛隊が来たとしても喰らい殺されるだけで
あろう．．．．．

自衛隊だってこんな場所には来ない。

事実、彼らだってかなりの犠牲者がでている．．．．．
武器が通用しない今、彼らはただの民間人と同じだ．．．．．

後ろを見るとフイーが声を殺して泣いていた。

窓からアラガミに殺される知人を見たのだろう．．．．．
．
そう思うと胸が痛んだ．．．．．

自衛隊もあてにできない今．．．．．
．．．．．これから、どうしようか？．．．．．

武器になりそうなものは、祖父から貰った刀以外一切ない．．．．．
．．．．．

罔になりそうなものもない．．．．．
一体、何処へどう逃げれば助かるだろう．．．．．

下では、オウガテイルに追われる人達の悲鳴や、オウガテイルの発

する雄叫びが響く……………

・ フィーの方へ目を向けると、彼女は震え、泣いていた……………

……………現状を確認しようとして、ふと下を見ると友人と目があつた。私は彼に、早くこちらに来るよう
に大声で叫んだ。

すると彼は頷き、こちらに向かって走つてきた。

彼の近くに、オウガテイルの影は確認できない。
助かるだろう、と思つたその時

グオオオオオオオオオオ！！

彼の斜め後方からオウガテイルが現れた。

(……………まずい！)

彼はそれに気付き、さらに走る速度をあげた。

彼とオウガテイルは400m程離れている、逃げ切れるだろうと思
つて私は見ていた。

学生寮まで残り20m程。

胸のなかでホツとした瞬間、

それは聞こえ、

……………見えた。

彼の断末魔の悲鳴・・・・・・・・・・
後方からきたオウガテイルが彼を喰らった。

私は目をつむった・・・・・・・・・・
もうこれ以上こんなものは見たくない・・・・・・・・・・
私は窓を閉め、もう一度戸の鍵を確認し部屋に戻った・・・・・・・・・・

ふと私は思った。

（大学の中なら・・・・・・・・・・教授もいるし、アラガミも侵入出来ないはず・・・・・・・・！！）

私達の通う大学にはアラガミのことを研究していて自分の事を「ハル」と呼ぶ少し（？）変わっている教授がいる。
あの教授なら、もしかしたらこの世界を生き抜く為の方法を知っているかも知れない・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・フィー、大学へ向かうぞ！！」

「えっ！？」

今だ泣いているフィーに、以前祖父から成人祝に貰った刀を渡し窓を見る。

「・・・・・・・・先輩？ここにいれば自衛隊が助けに来るって・・・・・・・・

-
-
- L

フィーが不安げにそう話す。

「……以前インターネットでアラガミのことを調べたら、銃程度では奴等を殺せないと書いてあった。……だから、……自衛隊は来ない……絶対に……」

「……嘘……でしょう？」

「…………いや、本当だ……………」

「そんな！！そしたら、私達奴等に……喰い殺され？……」

[illegible]

突如フィーは膝から崩れ落ち、泣き叫んだ。

私は泣き喚くフィーの両手を握りしめ、彼女を見据えて話す。

「……っつ！っ！フィー！！落ちてけ！……俺達は、まだ死ぬ

と決まったわけじゃない。助かる可能性はまだある!!」

この言葉で彼女は我に返った。

「・・・・・・・・え？」

「ハル教授のいる所まで行けばどうにかなる!!」

「・・・・・・・・ふえええ!!?あの変な教授がなんで!？」

「いいから行くぞ!!」

私は窓から学生寮付近にアラガミ達がない事を確認し、フィーの手を握りながら全速力で外に飛び出した。

蝕之一・大学寮（後書き）

感想・注意点等お気づきの点がありましたら教えてください

蝕之二・閃き

バタン！！

と乱暴に扉を開けてフィーの手を引き、外に飛び出すと、脇目も振らずに寮の出口まで走る。

「!？」

寮から出ようとした時、不安がよぎり壁に張り付く様に隠れた。

「・・・・・・・・な、何かいるんですか・・・・・・・・・・？」

息を殺して入り口を見ているとフィーが刀を両手で握りしめながら小声で話しかけてきた。

「いや、多分いないと思うけど・・・人の声が聞こえない。・・・

・・・静か過ぎる

・・・荒神が近くにいるのか、みんな何処かに避難したのかどっちかだろっが・・・」

(・・・この嫌な感じは何だ？)

フィーがレイジの言葉で刀を鞘から抜き出し、出口を警戒し食い入るように覗き込む。

「・・・・・・・・・・ここで待ってる」

レイジは緊張と恐怖で、こわばった顔のフィーの顔を見て、

(・・・自分がどうにかしなければ……)

と思い、作り笑顔を話した。

「先輩！？危ないですよ!？」

声を殺しながらも声を荒げて話すフィーに後ろ手を振りながら忍び
足でゆっくり出口へ向かう……………

玄関の扉が開いていたので、慎重に頭を出して恐る恐る外を覗くと
……………

ベチャツ！！

“何”かが落ちた音がした……………

そして、私の頬に、何か液体の様なものがついた……………

「……………何だ？」

頬に着いた液体を拭くと生温かく紅かった……………

「これは……………血？」

そう思った瞬間、

ドチャッ！！

つと先程よりも、重い何かが落ちる音がした…………

「っ！？」

急な出来事と、恐怖心で自分の心臓の音が今までにない位、鮮明に聞こえた…………

私は“ソレ”が何なのか確認するため息を殺し、落ちてきた

“ソレ”

に目を凝らした…………

私は“ソレ”を見て、見なければよかったと思った。

上から落ちてきた“ソレ”は無惨にも手足が有り得ない方向に曲がり、

鮮血を撒き散らしている

元“人間”。

「ウッ！？」

一瞬の出来事で声にならなかったが、するとすぐに今までに感じた事のない程の強烈な吐き気に襲われた…………

急いで下を向き両手で口を塞ぎ、吐くのを防いだ……………

（どうしてあんなものが……………？）

そう思ったその瞬間

ドスンッ！！！！

巨大な“何か”が死体の上に降ってきたのが視界を掠めた。
ゆっくりと視線を上へあげると上から落ちてきた

“ソイツ”は

死体の上にいた……………

白く巨大な体を持ち

二本脚の狼のようなアラガミ、

「オウガテイル」

元“人間”の死骸の上にのしかかり、こちらを睨んだ。

1 mも離れていない所で睨まれると、まるで金縛りに罹った様になり、
動けない。

(…殺れる……………!!)

「うわあああああああああ!!」

その瞬間、フィーが後方から叫びながら刀を振り回し、私に駆け寄り、私の腕を掴むとオウガテイルにかすめる程に近付き直角に曲がって逃げる。

ギヤアアアアアアアアアアアア!!

オウガテイルが悲鳴をあげた。

……………フィーが刀を振り回しながらこちらに走ってきたた為、逃げぎわにオウガテイルの目を刀がかすめていた様だ。

オウガテイルの目からは、血が流れていた。

一瞬の出来事に何が起こったのか、わからずパニックに陥る私は、フィーが強く握りしめた手が汗ばみ滑ると、私はふと我に返り手を離し大学を目指して走る。

走りながらオウガテイルの方を見ると、オウガテイルは片目が潰れているため

まだふらついてた……………

(このまま逃げ切れれば…)

そう思った瞬間、

ゴアアアアアアアアアアア!!

オウガテイルが怒号の叫び声をあげた。

奴は叫び声をあげながら、凄まじいスピードでこちらに向かってきた。

（くそっ！もう走れるのか！？）

大学まで約15m……………

大学の校門から校舎までは180m程ある……………

（このまま逃げても助からない……）

そして校門に入ると、私は賭けに出た。

私は走る事を止め、オウガテイルの方をむく。
その瞬間オウガテイルは私目掛けて飛び掛かって来た。

（……………計算通り！！）

私は迷う事も無くオウガテイルに向かって滑り込み、オウガテイルの飛び掛かりをかわす。

「先輩！！」

校舎に入ったフィーが叫ぶ。

すぐにオウガテイルを周り込む様に走った私だったが、オウガテイルがフィーに向かって走り出した為、私とオウガテイルは並走する形になった。

一刻も早く校舎に入ろうとオウガテイルから、注意が逸れた瞬間、

「駄目ええええええええええ！！」

フィーの叫び声が聞こえた瞬間左腕に激痛が走った。

バグン！！

「つが あ あ あ あ あ あ
あ！あ！あ！」

ブチッ！！

何か引き千切れる音がした。

私は左腕を噛まれ、振り回され空高く飛ばされた。

そして、地面に落下した衝撃で気が遠くなるのを感じた。

蝕之二・閃き（後書き）

連続投稿しませんにゅ（´・ω・｀）
こんな調子で投稿していくつもりです。

時間軸としてはフェンリルが出来てから1年ってところですよ・・

(……………熱い。……………左腕が燃える様に熱い……………)

カチャ、ガシャン!!

(!?!……………な、何だ?)

ガチャガチャ、と金属と金属があたる様な音がしている。

……………いや、それより一体何が!?

バツ！！

私は飛び起き目を開く。

まだばやけている私の目の前に大学教授のハル教授がいた。

ハル教授の少し後ろにはフィーと、見馴れぬ白髪の青年がいた。

私があつたか思い出そうとすると、ハル教授が無いはずの私の左腕を掴んだ！

「あゝ、その説明を今からしようと……………」

「これ……………は？」

ハル教授が触った私の左腕は見馴れた“ソレ”とは違っていた事に混乱する。

“ソレ”は左腕の替わりの様に左肩からのびていた。

薄黒く忌ま忌ましく、指先はより一層黒く邪悪な形をしていた。

荒神の腕の様にも見える“ソレ”は、言葉にしがたい気持ち悪さを放っていた。

私は悪い夢を見ているのでないかと思った。

「……………えと、ユーはハルの科目を選択をしている、八雲 レイジ

君だよな？」

「……ハイ」

混乱している私はハル教授の言葉にただ頷き返事をするしかなかった。

「レイジ君、ユーはオウガテイルに噛み付かれ凄まじい力で振り回された。」

（ああ…そうだ…大学の校舎に入る前に私は、噛み付かれ凄まじい痛みに気を失っていたんだ……………私は確か大学校舎の入り口付近で気を失ったはず…

だがここは、ハル教授の研究室……………一体何故ここに…？）

右手で頭を摩りながら悩む私にハル教授が続けて話す。

「ユーは肩の関節が外れてもなお、オウガテイルに凄まじい力で振り回された為、ユーの腕は、肩の関節から先全てをオウガテイルに喰い千切られた。」

（そ、そんな……………それじゃあこの腕は？……………まさか……………？）

私が苦痛で歪んだ顔を隠す様に下へ向けるとハル教授が左肩を掴んだ。

すると左腕に掴まれた感触があった。それに驚く私を見た、ハル教授は笑顔で話しを続ける。

「ユーの左腕が無くなったのは、とっても気の毒だったけどさ、そのお陰でアラガミ達に対抗出来るであろう強力な生体武器“神機”を手に入れる事が出来た！！

その腕は彼に盗ってきてもらった“モノ”なんだ♪」

ハル教授がフィーの後ろにいる青年を指差すと、男が口を開いた。

「……………ダム、だ。」

青年は無愛想に己の名を言い、教授を鬱陶しそう睨んだ後、そっぽを向いてしまった。

「……………アリ……………嫌われちゃったかな……………」

立寝するフィーを余所に、教授は少し気まずそうに話を再開する。

「……………え、っと……………ユーは、神話のスサノオの話、知ってる？」

……………何時だったか教授の講義で聞いた覚えがある。

「スサノオは高天原で嵐の神や暴風の神と例えられる程に凶暴であつただが出雲に降り立った際にヤマタノオロチと闘い勝利し人々に英雄とされている多面的な神」

だつたはず……………

私はその話を思い出し、頷いた。

教授は私が頷いたのを確認すると、立寝するフィーを平手で数回叩いて起こす。

パチン！！

と何度も良い音になった。

「フィー君……君、講義中に寝たから内申点ー10ね」

「エッ……………」

がっかりするフィーを余所に話しを続ける。

「さて、君達はスサノオが本当に存在したって知ってるかな？」

私は教授の話しが聞きたいことと逸れている気がしたが、無言で首を横に振る。

「そうだろうね。スサノオは出雲のある滝の裏の洞窟にいたんだ。

……亡骸となつてね。」

私は教授が何を言いたいのかわからずに、苛立った瞬間、

バキ、バキキキキキ……

ガリユ、ゴリゴリ、バキン！！

私の左腕は奇怪な音を発し形状を変えた。

まるで蟹の鋏の様な形状になり、ベッドの一部を噛み砕いた。

その光景を見て教授以外の者は声にならない程驚いた。

だが、教授は違った。

教授はその光景に少しも怖じけづかずに叫んだ。

「ヤー！！やはり適合した様だね！！」

私が教授の大きな声と自分の腕に起きた事に驚くと、鋏の様になっていた腕は、普通の人間の腕と見た目の少し違う五本指の腕へと変わっていた。

「スサノオはね、ハル達が神話の時代と呼ぶ大昔に今回の様に荒神だったはずなんだよ！」

「！？」

私達は教授の話を聞き驚愕した。

蝕之四 荒神くスサノオ

教授は上機嫌で話しを続けた。

「高天原では人類に牙を向けたスサノオ。だが、ヤマタノオロチの時は人類に味方した。

それは何故だ!?

ハルはそれをずっと考えた……………

すると、一つの仮説が思い浮かんだ。

ハルの仮説はこうだ。

スサノオは、嵐の神と例えられる程強大な力を持っていた。故に、膨大なエネルギーを消費したはず。

エネルギーを補給するには、それ相応の量の糧を喰らわなければならない。

スサノオは初め人間や動物を喰らっていたはず。

しかし、人間や動物を喰らうとなると沢山の数を喰らわなければならない。

だけど、それじゃあ効率が悪い。

それなら話しはかんたんだ」

人間や動物よりもずっと強力な力を持つ存在を喰らえばいい。

僕らも、喰っても腹がなかなか膨らまないモノを食べるのは嫌だろ？だから、スサノオは人間や動物よりもずっと強力な存在、

つまり他のアラガミを補喰し始めた。

そして、人類最大の敵のアラガミである奴が何故人々に崇められか。理由は簡単だ。

その時人々を苦しめていたのは、スサノオ以外の強大な力をもった
“ヤマタノオロチ”
と言われるアラガミ。

それを喰らおうとしたスサノオはヤマタノオロチと相打ちになった。
それを、人々は自分達を助けてくれたと勘違いしてスサノオを崇めた。

……………とまあ、こんなところかな？」

「さあ、ここまで話せばわかるよねえ？レイジ君の腕が一体何のか。
………… ユーのその腕はスサノオの亡骸から盗んだ剣の様な尾と鍔の
様な腕を移植したものだ！」

私とフィーは嬉々としてまくし立てる教授に恐怖した。

「フフフフ……………さあ、神話にすら登場する神の力を試してみようー！」

（………… ハル教授は私を助けたのではなく、私をモルモットにした？）

そう思うと心の底から、ドス黒い殺意が湧いた。

ヒュッ！！

ガキーン！！

気がつく私の左腕は巨大な剣に形状を変え、ハル教授の喉元に向け一閃していた。

だが寸前でダムが背中から神機を抜き、盾を展開させ私の剣を防いだ。

「……なかなか速いな。だが直進してくるとわかっていれば止めるのはたやすい！！」

ダムはそう言う私の剣を受け止めた盾で弾き飛ばした。
この攻防を見たハル教授が叫ぶ。

「フフフフ、素晴らしい！！

初めて神機を使ったのにこれか！！

はははははははははは！素晴らしい！！実に素晴らしいぞ！」

何を呑気に……………

たった今殺されそうになったのにこいつは……………！！

私の心がドス黒い殺意と怒りで塗り潰されていく……………

「先輩駄目です！！」

私が負の感情に飲み込まれそうになった瞬間、フィーが叫んだ事により我に返る。

「フィー……………」

私が左腕を元に戻した瞬間

「ダムツ、やれ!!」

ハル教授が叫ぶとダムは私をねじ伏せ、左腕を捻りあげてがら空きの喉元にナイフを突き付ける。

「ぐあっ！」

「動くな。動いたら殺す……………」

ハル教授が動けない私を見ると、フィーを捕まえて喉元にナイフを突き付けた。

「ダム、もう放していいよ。」

ダムは私を放すと、ハル教授の元へ歩いていく。

「何故こんな事を!!」

私が叫ぶと、ミー教授は子供の様な笑顔で話す。

「ゴメンゴメン♪」

手荒な事は、ハルもしたくなかったんだけどねえ。

だって、いきなり喉元を狙われるぐらいユーには嫌われちゃったんだからしょうがないだろ？

あとさあ、ユーがハルの言うことを黙って聞いてくれればフィー君を殺したりしないよ♪

………言う事聞いてくれるよねえ？
………レイジ君。」

怒りに震える私は、左腕が変化するのを気にも止めずハル教授を睨む。

「おや？そんな目で見るなんて酷いなあ？」

笑いながらそう言い放つと、なんの躊躇もなくハル教授はナイフでフィーの頬を少し斬った。

「………っつ！！」

斬られた頬から血が流れ、フィーが顔を歪め涙を流す。
教授が他の場所を斬り付けようとナイフを持つ手をうごかした。

「止めるー！！！」

「ん？ユーがハルの言う事聞くなら止めるよ？」

「言う事聞くからフィーには手を出すな………！！！」

「フフツ、それじゃあユーにはこの大学校舎付近にいる荒神を全て殺してその死骸を全て持って来て貰おう。簡単だろう？」

あ、わかってると思うけど、もしユーが逃げ出したりしたら……
………わかるな？」

「クソツ………時間制限はあるのか？」

「ん？特にないよ……………思う存分ヤツて来てね♪」

「わかった……………」

私は怒りで爪が食い込む程拳を強く握りしめ、血を滴らせながら研究室を出て行った。

ギイイ……………ボタンー！！

ハル教授は私を拘束したままこう言った。

「フフフ……………さあ、彼の居ない今のうちにユーにもハルの実験に付き合って貰うよ。」

「いつ、いやっ……………」

ボグッ！！

私が悲鳴をあげようとした瞬間、ダムに腹部を殴られ気が遠くなるのを感じた。

「か…はっ、……………」

どさっ……………

「さあて、急がないとねえ…フフフフ……………」
ハル教授が邪悪に微笑む。

カチャ、カチャ

と、しばらく金属と金属のぶつかる音がした後、静かになった研究室に

プスッ……………

という音がした。

私が目を覚まし立ち上がった瞬間、教授は私の腹部にナイフを数本刺した。

ドスッ、ドスドスドスッ！！

「あっ……………？」

痛みに腹部を押さえ、

（私、死ぬのかなあ……………）

などと思い、私は膝から崩れ落ち、気を失う……………
腹から流れる血は止まらず、流れ出す血は血沼を作る。

ギィィィ、ボタン……………

「フフッ、……………拒絶されないといいねえ、フィー君♪」

教授とダムは、血沼に横たわり苦痛の表情で浅い呼吸をするフィー
を残し研究室をあとにした……………

蝕之五 憤怒と目覚め

タッタッタッタッタ、

（私が教授を頼った結果、私は教授の糞野郎にモルモットにされ、ファイも巻き込んでしまった……………）

情けない自分とミー教授に対する怒りで私の左腕は巨大な剣に変わっていた。

巨大な剣に変わった腕を振るい、大学校舎の正面玄関の扉を切り捨てた。

シュッ！

バリーン！！

扉が崩れ落ちると同時に硝子が砕け、大きな音がした。

グォルルルルルル……………

私はグラウンドに居座るオウガテイルを睨み、左腕に力を込める。

（元はといえば奴等のせいで……………！！）

先程よりもずっと黒く濃い怒りの感情が私の心を支配する……………
レイジのこのやり場の無い、怒りの矛先はオウガテイルに向けられた。

(……………コノイカリ、ヤツラノチトニクデハラシテヤル……………!!)

そう思った私だが、ふと我に返るといつもの自分ではない気がした。

(今、私はなにを……………?)

いや、そんな事より今は奴等を!!

威嚇してこちらを睨むオウガテイルを数えた。

1・2・3・4・5・6・7……………1番始めに飛び掛かって来たオウガテイルに合わせ剣を斜め上に突き出す。

ズツ……………

飛び掛かって来たオウガテイルは剣に自ら突き刺さり鮮血を撒き散らす。

突き刺さったオウガテイルは自重で刺さった喉から上に向かい、スウツと落ちながら顔を半分にし、断末魔の悲鳴すらあげられず絶命した。

この一見切れ味の悪そうな剣は、銃弾も効かない程強固なオウガテイルが紙の様に斬れる程の凄まじい切れ味を見せた。

ジュー……………

(!?)

凄まじい剣の切れ味に驚いていたが、間髪入れずに剣から発せられた何か液体が蒸発するような音がした事に気付き、オウガテイルを警戒しながら剣を見る。

オウガテイルの血が蒸発している！？……だが、煙は出ていない……

……… 一体何なんだ！？

そう思った瞬間

ドクンッ！！

と脈打ち始める左腕の感触が私に何が起こったのかを無言で知らせる。

剣に付着したオウガテイルの血は見る間に消えていく………

………

（コイツはオウガテイルの血を吸っている………）

この剣は私の左腕だが以前のモノとは違う……

コイツは私とは別に食料を必要とする………

（間違いない………コイツは生きて
いる………！！）

突然の出来事に驚き戸惑う私だが、一斉に駆け寄るオウガテイルに気付き、我に返ると、剣の根元に右手を沿えて剣道で言う中段の構えをとり、迎え撃つ。

ゴアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

怒号の叫びを発しながら走って来る。

冷静に判断し走って来るオウガテイルの首に剣を刺し、首を飛ばす。そして、オウガテイルの群れに飛び込み、首を飛ばして行く。

生き物を斬る感触、命を奪う感触が直に伝わる……………

嫌な感触……………

出来れば感じたくない感触だ……………

そんな事を思いながら、突っ込んで来るオウガテイルを頭から水平に斬り、上下に切り捨てた。

オウガテイルは斬られると、臓物を辺りに撒き散らし、血の雨を降らせた。

すると私の左腕は激しく脈打ち始め鉄の様な形に変わり、淡い緋色の光を放つ。

「何！？」

駆け寄る二匹のオウガテイルに身の危険を感じ焦る私は、腕を剣に戻そうと腕を振り回すが、戻らない。

「……………くっそおおおおおお！！戻れええええええ！！」

淡い緋色の光を纏っていた左腕は、突如ガトリング砲の様な形状となり、フルオートでオウガテイルに標準を合わせた瞬間に、高速で緋色の巨大な塊を打ち出し始めた。

グオオオオオオオオオオ！！

気を抜いた瞬間、左舷後方からオウガテイルが飛び掛かる。

（しまった……………）

すると左腕は尋常では無いスピードで龍の頭の様な形に形状を変え、オウガテイルを頭から喰らい潰した。

ギギ……………ガパアア、

バグンツ！！

その時オウガテイルの返り血が私を紅く染めた……………

左腕はオウガテイルを喰らい潰した後、笑った様な顔をして口を閉じ、元の左腕に戻らず、またしても淡い緋色の光を纏い始める。

（……………なんなんだよ…一体なんなんだよ！クソツタレ！！）

訳がわからず、足元のオウガテイルの首を蹴り飛ばす。

―大学内地下研究室―

う、うううう……

大学内の地下にあるハル教授の研究室でフィーは自らの血沼の中で目を覚ます。
立ち上がろうとした時、腹部に強烈な激痛が走りその場に倒れる。

「イタッ………!!」

腹部に手を当てた時何か硬いものが当たり、液体が付着し私は手を見る。

温かく紅い……それは血であった。

（エッ………何で？）

そう思った直後、私は喀血し、倒れた。
腹部からも出血し、さらに血沼は広がる。

朦朧とする意識のなかで、ゆっくりと腹部を見るとナイフが数本刺さっていた。

（ああ、…そうだ……私、教授に刺されたんだ………）

私は涙を流し、腹部を見る。

私の腹に刺さるナイフは紅く染まっている。

（血、止めなきゃ……………）

私はふらふらと立ち上がり包帯を探した。

ポタッ…ポタッ

「……………はあ、……………はあ、あうっ！……………」

どさっ……………

私は痛みに何度も膝をつき、腹部に手をあてて苦しそくに息をしながら包帯を探し、ふらふらと立ち上がり歩き始める。

歩く度に腹からは血が滴り点々と血の跡を残す。

ポタッ、ポタッ……………

「はあ、……はうっ！……ううう……ああ、……あつた……」

私はどうにか包帯を見つけて、その場に座り込み痛みには耐えながらナイフを抜く。

ズッ！……カンッ、……カラッ……
ポタッ、

「つくう……！」

ナイフを抜く度に血が流れ出す……

全てのナイフを抜き終わる頃には、私の周りに新しい血沼が出来ていた。

「……はあ、はあ……」

ドクンッ！

「……あうっ！？……っは、……う、……うぐっ！……
うあああああ……！！！！！」

妙な心音が聞こえた直後、腹部を襲う強烈な痛みが更に強くなり、横に倒れる。

「っ……はっっ！………あうううう…っくあ
………ああああ…うっ、うあああ…あああ
っく…！！…うあああああああ……！！」

腹部の出血量が増え、更に薄れる意識の中、腹部に包帯を巻こうと
手を伸ばすも力が入らず、血まみれの手は虚空を掴むばかりである。

（…誰か…助け…て………）

—貴方を死なせはしない—

優しい何者の声が頭に響く………

（誰………？）

そう思った直後腹部の痛みは消えた。
傷口は見る間に塞がっていく。

（え…！？）

そう思っているうちに傷は塞がった。

触っても痛みは無い。

（治ったの……………？）

よろよると力無く立った瞬間、目の前が暗くなる……………

（あ……………れ……………？）

ベチャッ……………

血を流し過ぎたのか何なのかわからないが、意識が遠くなるのを感じ再び私は気を失い自らの血沼に倒れる。

蝕之五 憤怒と目覚め（後書き）

もつそろそろ新しいキャラ出そうかなー（・ω・）

蝕之六、復活

同刻、出雲の地にある祠の地下深く、一人の背の低い眼帯をした銀髪、非常に堅牢な鎖で縛られ、胸に刀を刺された蒼い瞳の少女が、凍りつき鎖で何重にも縛られたの巨大な何かの横で目を覚ます。

「……………」

ガシャン！！

起き上がろうとする彼女を、堅牢な鎖が邪魔をする。

「ん？なにこれ……………？邪魔くさいなあ……………」

少女はやりわりと呟くと、鎖を引き千切り始めた。

ギギ……………ブチッ…ブチンッ！！……………ガシャ！！

「少しは楽になったあ……………」

ドクンッ！

「いつ！？」

胸に刺さる刀が脈打ち、彼女を苦しめる。
胸部を襲う強烈な痛みに叫び始めた。

「かはっ！？……………この刀、……………早く……………抜か……………ないとっ
……………また……………私……………そんなの、……………嫌……………だよ……………うあああ……………」

………！」

…ズズツ、…ズバツ……ガシャン…

ドバツ！………

「ぐあつ、…ううう………！！」

ブシュツ、………ボタツ、………ボタタツ………

刀を抜いた胸から大量の血が噴き出し、胸を押さえ苦痛に涙を流す。
血の溢れる胸を押さえながらよろよろと力無く立ち上がり、壁に手
をつきながら歩いて行くと、上から足音が聞こえる………

「今の声は何だ？」

「………まさか、奴の封印が解けたのか！？」

（………奴って…誰？）

「総員地下へ！！」

「奴が復活した可能性がある！もし復活していた場合、全力で討伐せよ！！ここからは一歩たりとも出すな！！」

(…何かやばい奴がいるのかな？)

そんな事を思いながら出口に向かってよろよろと壁づたいに歩みを進める……………

出口の一手手前で誰かに見つかり、姿を照らされる。

(…！？)

光が眩しく、顔を被う…………

直後、私を照らしたソイツは叫んだ。

「いたぞ！」

(えっ……………？)

そう思った直後、

ザシュ！

何かが突き刺さる音と感触がした。

ボタッ、ボタタタッ……………

腹部から血が流れ出す。

どうやら眼前の青年に、槍が何かで刺された様だ。

「いった……………」

腹部を襲う痛みに、泣きながら呟いた…………

「子供……………」

眼前の青年はそう呟き私に近寄って来た。

しかし、私の額を見た瞬間に彼は怯え、私の腹から槍を乱暴に引き抜き始める。

ズ…ズズ、

「くう、…………ま、まって…………お、…………お願いだから…………抜かないで…………私の話を、聞いて…………私は、…………貴方の敵じゃ、ないの…………お願い…………だから…………や、…………やめ…………て…………っ！…………それ…………を…………抜いたら、…………私…………死ん…………じゃう…………お願い…………だから…………話し…………を…………聞いて……………」

涙ながらに訴える彼女の願いは、怯える青年の耳に届かない。

ズズ…………ズツ、…………ズバツ！！

「ああっ！！！」

ブバァア……………

乱暴に引き抜かれた腹部から更に大量の血が溢れ出し、気が遠くなりはじめ……………

「し、死ねえええ！バケモノオオオオオオ！」

と叫びながら槍を構え、壁を支えに立っているのがやっとの私に向かい突っ込んで来る。避けようとするも、体が動かず……………

（しまっ……………！）

ズブッ……………

「あ、ああああ……………酷い……………よ……………私が……………何を……………したって……………言うの……………？」

彼の槍は私の心臓を貫き、壁と私を縫い合わせる。

「はあ、はあ……………や、やったぞ……………」

心臓を貫かれて動かなくなつた私を見て、青年は安堵のため息をつ

き、仲間を呼ぶ。

しばらくすると大勢の仲間が集まった。彼らも青年と同じ様に槍を持ち、白い羽織りを纏っている。

その集団のリーダーの様な一人の男が銀髪の少女の前に立った。

直後、心臓を貫かれ死んだはずの少女が顔をあげ、紅に染まった瞳を輝かせて目の前の男の首をもぐと笑い始めた……………

「アハハハハハハハ……………！！

相変わらず脆いなあ…………… ちょっと捻っただけで死んじゃうなんてさあ。…………… ところで君達さあ、この程度私が死ぬとも思った？ほんっと、バツツカじゃないの？…

こんなで死ぬわけないじゃんよ、
バ……………カ！！

…………… ああ… そうだ、これ返すよ…………… 青年」

そう言いながら胸の槍を自ら引き抜き、少女を刺した青年に向かって槍を投げる。

少女の放った槍は、凄まじい速さで放たれ寸分変わらず青年の心臓を貫いた。

ヒュッ……………

ドスッ！

「やったあ、命中♪」

少女はまるでダーツで真ん中を当て、喜ぶ子供の様に笑った。

人を殺して子供の様にはしゃぐ少女を見ると、彼女の腹と胸の傷口は綺麗に塞がっていた。

しばらくすると一人の男が叫んだ。

「…こ、このバケモノめえええ!!」

彼は少女に向かい、槍を構え走り出した。

「ん？遊んでくれんの？」

少女は笑いながらこう言い放ち、突っ込んで来る男の槍をへし折り、

「遊んでくれるのは嬉しいんだけど、汗くさいし気色悪いからバイバイ♪」

と呟き頭をもちだ……

「さあ、次は誰が遊んでくれるの？」

しばしの沈黙の後、

400人程の仲間が一斉に少女に飛び掛かる。

「おお！みんな遊んでくれるのか？やったあ」

彼女は満面の笑みを浮かべていた………

それから二刻半程の間、祠の地下深くでは虐殺が続いた………

銀髪の少女は笑いながら、内臓を引きずり出して殺したり、首をもちだり、頭を砕いたり、首筋を噛み千切ったり、骨を砕いたり………とにかく殺しを楽しんだ。

彼女は最後の一人の内臓を素手で引きずり出して、苦痛に顔を歪め悲鳴をあげ続ける彼を見て、

「あははは、いい声で泣くねえ………なあ、………もっと聞かせてよ………その悲鳴をさあ………！」

グチヨ、グジヨ………

「ぎゃああああああああ………！」

ブチャッ！！！！

彼女が更に内臓を引きずり出してしまった為、彼は元“人間”にな
った……

「ありや……死んだか？まあ、いいやあ……いただきます！」

そう呟き、彼女は死体を食べはじめた。

ゴリユ、……ゴリツ、バキン……グチュ、ピチャ……ゴクンツ……
……やっぱし……まっずいなあ……ムシャ、ムシャ……ゴク
ンツ……昔より弱いし、まずいし……ブチ、ブチツ……まあ、
腹ごしらえつ、……ゴクンツ……程度にやなるかなあ……
……？……べっ！！……スジ肉まっず……

彼女は向かってきた全ての人を殺し、その肉を喰らい終えた……
そして、彼女は遊び疲れた子供の様な声で

「お腹いっぱいになったら眠くなっちゃったなあ……」

と、呟き眠り始めた……

眠り始めて十六刻（16時間程）たった後に彼女は

「そうだ……私……」

と、呟き起き上がる。

ボロボロの血に染まった羽織りと袴を身に纏うその少女は、自身の周囲に広がる血沼と大量の人間の死骸をみて、涙を流す……

「また……なの？……私は、またやったの？……また私は殺されかけて、沢山の人を……私は、殺したくなかったのに……」

血に染まった彼女はよろよろと立ち上がり、祠の最深部へと向かい歩きはじめる。

最深部に着くと、真っ白な箱があった。

中には古びた布と小さめの黒い木箱と純白の短刀、漆黒の異形の刀が置いてある……

血で染まった銀髪の蒼い瞳の少女は、古びた布をヘアバンドナのように巻いて額を隠した後、黒い木箱を袋に入れ自身に刺さっていた刀と二振の刀を携えて祠の外へ歩き出す……………

（私は何年ここに封じられてたんだろう……………それにさっき感じた気配は間違はなくアイツだ。

……………考えていても仕様がな。さっさとここを出てアイツのところへ行ってみよう）

少女が祠を出た瞬間、

ゴアアアアアアアア！！

突如彼女の目の前に体長4 m程のゴリラの様なアラガミが現れる

金色の外皮…紅色の風神の様なマント…割れた面…
豪雷を纏いしアラガミ

ハガンコンゴウ。

（何で荒神が……………？）

少女が疑問に感じた直後、
ハガンコンゴウは雷を纏った腕で力一杯殴り飛ばした。

バチ、バチヂ……………

ズドオオン！！

「…………グッ！」

殴られた彼女は受け身すらとれず、数百メートル先の岩壁に叩きつけられ、殴られた腹部からは血が流れる。
殴り飛ばされた彼女はすぐに立ち上がり……………

「人をいきなり殴るのはどうかと思うんだけどなあ。」

笑いながらそう言い放ち、自身を殴り飛ばしたアラガミにとてつもない速さで接近し、

「……………御免」

と、一瞬哀しそうな表情を見せて呟き、とてつもない速さで漆黒の異形の刀を抜きさり、ハガンコンゴウを一閃した。

……………チン、

と鏢なりがした瞬間、ハガンコンゴウは真っ赤な華を咲かせ、動かなくなった……………

「……………貴方は何も悪くないんだ……………
ただ、運悪く私に出会って……………

……………運悪く怒りを買って……………
……………運悪く殺された……………

ただそれだけなんだ……………貴方に……………罪はない……………」

少女は小声で呟き、黙祷した。

暫しの黙祷の後、彼女は死んで間もないアラガミの近くに駆け寄り、
「じゃあ……いただきます！」

彼女はまるで子供の様にそう言い、ハガンコンゴウの死体を素手で
引き裂き、腹腸を喰らい始める……

…ブチッ…グチャ、グチャ…ゴクッ…グチャ、ペチャ…
…美味い…なあ…うん、美味い…グチュ、グチャ
…ゴクンッ…

「ごちそうさま……」

数分後、返り血で更に紅く染まった彼女はアラガミを喰い終え、真
新しい血の臭いを纏い再び走り出す……
腹の傷は塞がり……眼帯をつけて無い右目は綺麗な蒼色のまま……

「…あはは、すごく美味しかったあ………」

笑いながらそう呟き、樹海をさつさと抜け出す為、走る速度を更に
上昇させる……………

蝕之六、復活（後書き）

テストとかの用事で更新が遅れたああOTL
∴ 前書き何かいていいかわかんない（´・`・、`）

蝕之七 油断と助け

グラウンドではレイジが立ち尽くしていた……………

オウガテイル等を打ち砕いた淡い緋色の強大な塊は、ガトリング砲に変化した私の左腕から放たれた……………

改めて左腕を見ると淡い緋色の光を纏う人の腕の形状になっていた。

自分の身に起きた事が理解出来ず、しばらく呆然と立ち尽くすが、助かった事だけは確かなのだと自分に言い聞かせ、人生で初めての命のやり取りに勝利した事に安堵のため息をつく。

私はすぐに辺りを警戒しながらオウガテイルの死骸を破壊した大学校舎の玄関の前まで運んだ。オウガテイルの死骸は重く、血で滑る為運びづらい……………

（くそっ……………！）

全ての死骸を運び終え、私は大学の外へ出る。

大学前の信号付近まで辺りを見回しながら進むが、辺りは静寂に包まれている。

付近にある建物はあちこちにヒビが入り崩れそうなモノもあった。辺りの異様なほどの静寂による不気味さで、私は隠れる様に背中をくっつけ、辺りに気を配る。

「く、くるな——！！」

突如男の叫び声が聞こえた。

声の大きさ、距離からしてこのマンションの四階辺りからだろう。

私は今なら悲鳴の主を助けられると信じ、拾ったピンク色の大きめのダンボール（大人二人まで余裕で入れる位のサイズ）を被り、取手の隙間から辺りを警戒し、マンションの入り口まで走る。

途中何匹かオウガテイルに遭遇したが、全くばれなかった。

なんか、MGSのスークみたい…

マンションの中に入るとすぐに階段があった。ダンボールを被ったまま行こうとするが、引っ掛かる。

（くそっ…通れないか……）

仕方なくオウガテイルの目を欺いたダンボールを取って階段を上る。

この狭い階段で奴等に出会った場合、闘いづらと考え、どんな些細な物音も聞き逃さないように注意しながら進む。

三階まで来た時上の階から

ドスッ、ドスッ……

と、人間よりも重い何かが歩く音がした。

左腕を剣に変え一気に階段を駆け上がる。

(!?)

4階に上がりきった瞬間、こちらに向かって来るオウガテイルと目が合う。

私はオウガテイルに向かって走り、すれ違いざまにオウガテイルを一閃する。

ブシャアアアア………

返り血が彼を紅く染め、真新しい血の臭いが彼を包む。

グオオオオオオオオオオオオ！！

（しまった！）

突然の雄叫びに振り向く。

渡り廊下の死角にもう一匹いたのだ！

私が迎撃体勢に入ろうとした瞬間、オウガテイルは私の目の前にいた……

（間に合わない………！！）

そう思った瞬間、オウガテルの般若の面の様な尻尾が私の腹に直撃した。

バキッ！

「ぐあっ！！」

私は無防備なまま壁に激突したかと思われたが、左腕が鋏の様に姿を変え壁に噛み付き、私を助けた。

ガラガラ………

すぐに壁から強引に引き抜くと壁の一部ごと取れた……

………ヒュッ！

ドガッ！！

ギヤアアアアアアアア！

私が腕を鋏から剣に変えようと振るったときに、壁の一部がオウガテイルの側頭部にヒットし、オウガテイルは悲鳴をあげて転んだ。

（今だ！）

腕を振り上げダンクシュートをするようにオウガテイルへ飛び掛かる。

ヒュッ…

左腕が剣に変わるように願いながら飛び掛かる私は、鋏の様な左腕がオウガテイルに当たる瞬間驚愕した……

左腕は強大な龍の頭のようなものに姿を変えて、オウガテイルを喰らい潰す。

ギギギ……ガパアア、
バグンッ！！

グチャ、グチャ……ゴリユ、バキュ……
グシャ……ムシャ、…グチャッ！！

生きているオウガテイルを喰らい潰した。

返り血に染まる左腕は、またも淡い緋色の光を纏う……

蝕之八 破滅之凶巫女

— 北欧 —

雪降る寒空の下、一人の小柄な女性が歩いていた。

ボロボロのワンピースを身に纏い、銀の長髪をなびかせ一人歩みを進める…………

瞳は紅く、右目に眼帯を付けていた。

服は血に染まり、片手に何かの首をぶら下げる…………

ふと何かの気配を感じ、血に染まる女性は歩みを止める。

ジャキッ！

「動くな……………」

女性の首筋にナイフが突きつけられる。

女性と男性を取り囲む様に男の仲間がマシンガンを構える。
数はおよそ30。

女性にナイフを突き付けた男性は

「貴様、何者だ？」

と質問する。

それに対し女性は「ふっ」と笑いこつ答えた。

「アラガミよ」

そう女性が答えた瞬間、男は女性の首筋を斬り素早く後方に下がる。

しかし彼女の首筋には、傷一つ付かず女性を斬ったナイフは折れていた。

「いきなり斬るなんて酷いわぁ。」

女性は笑いながら男に近付く。

…………ガチャッ！

（！！）

ズダァァン！

男性は大口徑ハンドガン（マグナム）で女性の脳天を撃ち抜いた。

ドサッ……………

至近距離からの発砲には流石に耐え切れなかった様で、脳天を撃ち抜かれた女性は白銀の大地に崩れ落ちる。

彼女の額からは血が流れ、白銀の地を紅色に染めてゆく……………

ザッザッザッザッ……………

（…！！）

シュッ！

ズバッ……………

男性が女性の死亡を確認しようと近付いた瞬間、女性はとてつもない速さで男性の胸を貫く。

ぐああああああ……………！！

男の悲鳴が響き渡る……………

頭部を射抜かれてなお、彼女は死んでいなかった。
立ち上がった彼女の額の傷は綺麗に消えていた…

「いきなり撃つなんて酷いわあ…
一回死んじやったじゃないの……………」

ボソリと呟き終えた女性は胸を貫いた男の腕を引き千切り、五体全
てをバラし五臓六腑を引きずり出してばらまいた。

次の瞬間女性は肉片へと変わり果てた男から閃光弾を奪い、破裂さ
せる。

全員の視界を奪い、そこにいる人間全員の眼をえぐり出した。

この間わずか30秒

全員の視界を奪った後、彼女は一人一人に残酷な生き地獄を与えた。

あるものは五臓を引きずり出され

あるものは四肢をもがれ

あるものは骨を手当たり次第折られ

あるものは血を啜られ

あるものは骨を引きずり出され

あるものは皮膚を剥がれた

だが、すぐには死ななかった。
否、すぐに殺されなかったのだ……

悲鳴を聴くために
己の欲求を満たす為に

女性は死ぬか死なないかのギリギリの所で周囲の人間をいたぶっていた

雪降る月下の夜

悲鳴や呻き、助けを求める声が響き渡り…
白銀の地は紅く染まった

例えるならば

―阿鼻叫喚―

この光景を見た誰もがそう言うであろう

普通の人間ならば正気を保てない……

そんな状況下で、彼女は眠った
鳴り響く怨鎖の声をまるで子守唄のようにし……

一人、また一人と力尽きていき、怨鎖の声は止んだ――

女性は目を覚まし、歌いながら歩きはじめる……

……林檎と蜂蜜……紅茶のジャムにアプリコット……

……銀色のティースプーン……壁に放り投げた……

早く遊ぼうよ……人形は何にも喋らない……

……蜂蜜かけてあげる……その紅いドレス……

蝕之八 破滅之凶巫女（後書き）

なんだかどんどん原作から離れてく．．．
どうしよう（´・ω・｀）

蝕之九 畏怖

レイジはしばらくの間、己の左腕に恐怖して固まった。

だが、悲鳴を思い出し我に返ると4階の玄関のインターホンを順番に鳴らして回った。全てのインターホンを鳴らし終えて真ん中まで戻ると

「もう大丈夫ですよ!!」

と叫ぶ。

オウガテイルを倒せる事に対し慢心していた私はすぐに自分の起こした過ちに気付く。

（もしかしたら今の声で奴等をおびき寄せてしまったかもしれない……）

……………ガチャ、

その時だった

玄関の扉をチェーンロックしたまま少し開けて覗いてきた。

私は大急ぎで近寄ると、ドアの扉から覗いていた男は私の左腕を見てドアを閉めた。

「ま、待ってください!!」

私は閉められたドアを叩きながら叫んだ。

「止めてくれ！あんたも奴等の仲間だろ！？私を騙そうつたって無駄だぞ！！手が見えたんだ！！」

取り乱して怯えながら叫んでいるのがドア越しにわかった……………

…私は他の人から見ると荒神と同じだと言うことに改めて気付かされる……………

「…私は……………」

どうしても続きの声が出てこない……………

助けたい、しかし私の左腕はドアの中の人を怯えさせてしまう。

「…信じていただけないかもしれませんが私は人間です。

この左腕は、腕を失った私に大学の教授が取り付けたモノなんです。

…………… 今なら大学までの道のりに荒神達がいないので大学まで避難してください。

大学には普通の人もありますし、何より安全ですので……………」

私は喋り終わるとドアから離れて階段に向かいとぼとぼと歩いた。警戒しながらマンションの下まで降りると上から人が降りてくる音がした。

「疑ってすまない！！頼む、助けてくれ！！」

下で待っていると、中年の男性と女性がそれぞれ5、6歳の子供達を抱き抱えながら降りて来た。

「気にしないで下さい。早速大学まで避難しましょう。

あ、これ被って下さい。何故かわかりませんがアラガミに見つかりませんので」

私は先程被っていたピンク色のダンボールを渡す。

四人綺麗に入った。

私は四人を大学まで避難させる為、先にマンションを出て辺りを確認した。

……何処にもいないな………

周囲にオウガテイルがいない事を確認して、ついて来る様に手招きした。

距離が近かったので大学まで入り校舎の入り口まではすぐに着いた。

だが、私が殺したオウガテイル達の死体が失くなっているのに気づいて研究室まで警戒しながら進む。

「…大学は安全って言いましたよね？」

ダンボールから出た女性が心配そうな顔つきで話し掛けきたが、私は黙って進む事しか出来なかった……

ガチャ、ガチャ

研究室にたどり着いた私は研究室のドアを開けようとしたがドアには鍵が掛かっていた。

「教授！開けてください！！」

私が焦って叫ぶと子供達がビクツと驚いて今にも泣きそうな顔になる。

……ガチャリ

すぐにドアの鍵が外れた音が聞こえたのでドアを開けて中に入ったが………

「誰もいない……………」

くわえて研究室内は薄暗くよく見えない。

パチン

（！？）

私は電気をつけた。すると有り得ない光景が広がっていた……

至る所に血が着き、いろいろなものが散乱していた。

私は足下にあるナイフを拾った。

それはハル教授のナイフだった……

そのナイフは紅く血に染まっていた。

（まさか……？）

後ろでは女性が子供達の目を塞いでいた。

「本当にここなのか？」

男性が叫ぶ。

「ふえ、う、うえ〜ん！」

子供達達が不安で泣き出してしまふ。

教授達は何処消えたのかわからない……

…一体どうすれば……？

ギィィィ……………ボタン！！

急にドアが閉まり、ドアの後ろに隠れていた人物が姿を現した。

蝕之九 畏怖（後書き）

書きあげてから気づいたんだけど…フツのナイフで荒神なんて殺
せないよねww今後はこんなミスしないよう気を付けよう（、つ
ω・、）

蝕之十

激怒

私はその姿を見て驚愕する。
這いずりながらドアを開けたのは血にまみれ、衰弱したフィーだった。

「……はあ、……っはあ……先ば……い……」

どさっ……………

「フィー……!」

私は倒れたフィーに駆け寄り、衰弱しているフィーを抱き上げベッドまで運び、横たわらせた……………

「先……輩、…………ハル教授……は？」

弱々しく喋るフィーの姿をみて私がここに案内してしまった事に対する後悔の気持ちで泣けてきた。

「フィー……すまない……………」

フィーは涙を流して謝る私の手を弱々しく握り小声で話す……

「私……気絶させ……られて……何か……された……みたい、……です……起きた……ら……ナイフで……に刺されて……私……」

フィーは喋り終えることも出来ぬ程衰弱していて、気絶してしまっ
た……

「……………しばらくここに居てください」

私はフィーに毛布を掛けると、怒りでどうにかなりそうなのを我慢して夫妻に話し掛ける。

「あ、ああ……………」

私は研究室を出ると鍵を掛けさせて大学内を走り回る。

タッタッタッ……………

ガタッ！

（！？）

校舎内を走り回っていると教室の中で音がした。

バンッ！

私は何の躊躇もなくドアを蹴破った。

パチパチパチ……………

教壇から拍手が聞こえ、視線を向けるとハル教授がいたのだ。

「…この野郎！！よくもフィーを！」

すぐに飛び掛かるが……………

ドガン！

「ぐあっ！！！」

剣に変わっていた私の刃が届く前に側面からダムが飛び出し、私の

腹に強烈な蹴りを浴びせ、私は受け身を取れぬまま地面に激突した。

「危ないなあ、フィー君の事で怒っているのかい？あれはユーがこれからする旅にはあのままだと足手まといになるから仕方なかったんだよ。」

ま、ダム君適当に遊んで飽きたら“アレ”を渡してあの場所に来てください。」

「わかった。」

私は立ち上がり教室を出ようとする教授に向かって駆け寄ろうとするがダムが私の前に立ちはだかる。

「どけ!!」

ダムは激怒して叫ぶ私を「ふっ」と笑うと口を開いた。

「まるで猪だな……周りをよく見てみる。」

私はダムの言葉で周りを見渡すとミイラのような死骸がいくつも転がっていた。

「……」

私は普段なら何が起こったか聞くだらう。

だが、今はそれより教授に対しての怒りの感情が強く、それを邪魔をするダムに向かって飛び掛かった。

ガシャン、

（！！）

ズダン！！

「ぐあつ！！」

ダムの持っていた巨大な剣が瞬時に銃に形状を変え、黄色い光弾が撃ち出され私の左肩に当たり、吹っ飛ばされた。

「剣と銃は一セットだ。それは貴様の左腕も同じはず、まずはいつでも剣と銃に変えられる様にしておくんだな。でないとこれから先は危険だ……」

私はすぐに立ち上がろうとしたが体が痺れて膝を着いたまま立ち上がる事が出来ない。

（！？）

「今のは神機、この剣がオウガテイル達から吸ったオラクルを光弾

に変えて撃った。少々細工しておいたから暫くは動けんはずだ、ここに奴等と神機について纏めたレポートを置いておく。後で見えておけ……」

ダムは喋り終わると教室の扉へと向かって行く……

「ま、待て……」

私がどうにか喋るとダムが振り返った。

「まだ意識があるのか……………」

流石、接触を禁忌としているだけの事あるな……………荒神スサノオ」

蝕之十一 纏う者

ガタン！

ダムが教室を出て行こうと歩き出すと血に染まりボロボロのロープを身に纏う人間がドアを蹴破ってすぐ、ダムに向かって駆け寄り神機を振るう

ヒュン！！

「ほう……来たか」

ダムは後ろに跳び下がるとゆっくり立ち上がり自分を襲った人物に話しかける。

「私は仲間の敵を取るまで死ねないんだよ！！
あのクソ野郎は何処に居る！？」

ローブを身に纏った人は、凄まじい速さでまたもダムに駆け寄り神機で薙ぎ払う。

しかし、ダムは2m程もある巨大な神機を片手で振って、ローブを纏う人間の神機を弾くと両手に持ち直して逆袈裟に切り上げた。

ギヤイン!!

「くそっ!!」

ズサー、

ローブを纏う人間は剣の柄から盾を出現させるがダムの放った斬撃は想像以上に強烈で教室の端まで地面を滑る様に後退させられた。その時、フードが脱げて顔が露わになる。

私は驚愕した。

ローブを纏う人は長身で細身の綺麗な顔立ちの女性だったのだ。

「敵か………奴等はただ、貴様の様に適応せず、コイツらと同じ様に荒神の細胞に負けた敗者だ。」

ダムは転がっている無惨なミイラのほうを見て話す

「ふざけんなー!!」

女性はダムの言葉に激怒して神機を正面に構え、剣から銃へと形状を変え紅い巨大な弾丸を放った。

ダウッ！

キーン！！

ダムは弾丸を巨大な盾で弾き私を見た。

「女、まだ俺には勝てん。

その紙に次の場所を書いておいた。コイツと共に追いかけて来い……」

「ふっざけんなああ！！！」

女性が飛び掛かるとダムは武器を背中にしまい、女性の斬撃を真上に跳んで避けると天井を蹴り女性に肘鉄をくらわせる。

ヒュッ……

（しまっ……………！）

ドガッ！

「うぐあっ！！！」

ダムの肘鉄は避けようとした女性の背中に当たり、女性は地面に叩きつけられてピクリとも動かなくなった……

ダムは女性が気絶したのを確認して私を見る。

「ソイツと一緒に来い。
死ぬんじゃないぞ……………」

バタン…………

ダムはそう言い残し教室を出ていった……

――八分後――

痺れの取れた私は教卓からレポートを取り、気絶している女性を担ぎフィー達の所へ歩いて行った…………

コンコン、

「だ、誰だ!!」

「わ、私です。」

ガチャ、

私が研究室に着き、ノックすると男が怯えた声で喋る。
みんなが無事だった事に安堵して喋ると鍵が開いた。

――30分後――

気絶している女性を浅い呼吸を繰り返すフィーの隣に横たわらせて
夫婦とその子供達に事情を話してレポートに目を通す。

蝕之十二 レポートと

―一枚目―

「アメリカで秘密裏に成功した実験は100人に1人いるかいないかとゆう燦々たる結果であった。実験とは荒神から摘出した細胞（オラクル細胞・P53偏食因子）を人体に移植する事である。

いずれ近いうちに荒神達が日本にも現れるだろう。それまでに奴等と戦える人間をどうにかしなければならぬ。

私は“葛西^{カサイ} 春也^{ハルヤ}”。大学教授として生きてきたハルに選択の時が迫って来ている。」

―二枚目―

「荒神に対抗出来る唯一の武器（神機）は使用者のオラクル細胞（P53偏食因子）に反応して初めて武器となる。神機は使用するに荒神達と同じく多大なエネルギー（オラクル）する為、神機には荒神からオラクルを吸い取る機能（哺喰）を取り付けてある。

特殊形状神機・身体直結型神機以外は哺喰の際に大きな隙が発生する。

哺喰中は行動不能となる為哺喰のタイミングはよく考えるように。

また、喰に成功すると“荒神バレット”と呼ばれる一発限りの特殊形状弾を撃つことが出来る。

喰した荒神によって性能、威力、射程距離等が違うので試してみる価値はあるだろう。

また、銃形態時には吸い取ったオラクルを弾丸に変えて撃つ機能もある。
ガンフォーム

それらの機能を駆使して荒神達を全滅させるのだ。」

―三枚目―

く神機の使用方く

「・剣形態で荒神達を切り付けると付着した血液からオラクルを吸い取る。

・何度も斬り続けると神機は光を帯びた状態になり、オラクルが溜まった事を目視出来る様になっている。

・光を帯びた状態で柄にあるトリガーを引くと銃形態にする事が可能。
ガンフォーム

・銃形態は遠距離から一方的に攻撃可能だが盾を出せないなので注意が必要だ。盾は剣形態の時剣の根元につけてある物が開き盾が展開される。

盾を展開させるには鰐にある穴にあるトリガーを引けば展開される。

」

―四枚目―

「スサノオの細胞を使ったユーには何があるか正直ハルにも分からない。

観察して言うことは憶測なるがユーの感情によって武器になると思われる。

おそらく“ソノ”左腕はユーとは別に意識があり生きているようだ。もしそうならば、ソイツに意識をのまれない様に気をつけてくれ。

もしのまれたら……アラガミ化するだろう。

気をつけてくれ。

ハル達はこれから北海道に行く。この福岡からもしも辿り着くことが出来たなら……いや、必ず来るんだ。」

―五枚目―

「6月6日

また駄目だった。

自衛隊でも成功したのは一人で、残りはアラガミ細胞が宿主である人の細胞を破壊し、ミイラの様になって死んだ。

仕方がない……学生達にも協力して貰うとしよう。」

私は五枚目のレポートを読み終わると左腕は剣に変わっていた。

「わ、私達はどうすれば……」

一緒に見た夫婦が絶望的な眼差しでその場にへたり込んだ。

「……大丈夫です！！安全な場所を私達と一緒に旅して探しましょう。」

私は子供達がまた泣いてしまわぬ様に作り笑顔で答えた。

「……すまない。今更だが私は篠塚健太でこっちは嫁の真理、長男の弥彦、長女の燕だ。」

「あ、私はレイジ、八雲レイジです。」

「うつ……うーん……………」

私達が自己紹介をしているとフィーが目を覚ました。

「ひゃあ！」

「フィー……！」

目を覚ましたフィーは隣にいたローブを纏う女性に驚き飛び起きた。私は無事だったフィーに駆け寄り抱きしめた。

「ちよつ、先輩？」

「よかった……本当によかった……」

「…先輩、く苦しいです。」

「あ、すまない……」

私は焦って離れる。

「い、いえ、それよりこの女ひとは！？
大変です！血が……！」

フィーはローブを見て飛び退き叫んだ。

「それはその女の血じゃない。」

「ならいいんですけど……」

「それより、着替えたかどうか？そんなに血みどろの服着て嫌じゃないか？」

そこに部屋と服があるからさ。」

「確かに嫌ですし、第一印象も悪いし……着替えて着ますね。
あ、覗かないでくださいよ？」

「誰が覗くか……」

「あははっ、じゃ着替えきまーす！」

ボタン、

― 6 分後 ―

フィーは所々に穴が空いた袖の長いワンピースに着替えて出て来た。首にはスカーフ(?)のような布を巻いている。

下は膝下辺りで千切れていて少々恥ずかしそうにしていた。

「変……ですか？」

「い、いや別に大丈夫だが……他には無かったのか？」

「あるにはあるんですが………（放送禁止用語）や（放送禁止用語）なのしかなくて…見てみますか？」

「いや止めておく………」

話し終えたフィーは女性の顔を心配そうに覗き込んだ。

蝕之十三 美鈴

フィーが女性の顔を覗き込んだ瞬間、

「!？」

バツ!!

女性は気付くと後ろに跳び退き、神機を構えこちらを睨んだ。

「お前等……誰だ!!」

「ま、待ってください!」

神機を構えこちらを警戒する女性を止めようと両手を振りながら話す。

しかし彼女は私の左腕を見て叫んだ。

「その左腕……貴様も荒神か!!」

ヒュッ……

ギヤインー!!

叫んだ後、飛び掛かって来た女性の斬撃を左腕でどうにか防いだ。

「……？」

女性は私の顔を見て神機をおろした。

「あんた、教室でダムにやられてた奴だね？」

「…はい。あの、これを……」

私は事情を説明するよりもレポートを見せた方が早いと思い、レポートを渡した。

突然の出来事にフィーと夫婦、子供達が固まってしまっている。

「……貴方達、名前は？」

女性はレポートを読み終わると名前を尋ねてきたので、私達は安堵し順番に自己紹介をすませた。

「あの、お姉さんの名前…は？」

フィーが恐る恐る女性に名前を聞く。

「私の…名前は……………」

女性は下を向いて苦しそうにする。

「……………美鈴。」

……………
紅^{ホン}美鈴^{メイリン}だ。」

蝕之十三 美鈴（後書き）

んー…登場人物増やしすぎたかな？次回でサクッと2人ぐらい退場
しり

……つと危ない危ない。ネタバレになっちまう（．．．）（．
．＊）

蝕之十四、適性と過去

私達が今まで起きた出来事を美鈴に全て話すと美鈴は暫く黙ってしまった。

だが、暫くすると美鈴は口を開いた。

「私は鹿児島島の自衛隊員だった。」

美鈴の話しに全員驚いたが美鈴は気にもせず話しを続ける。

「ほんの二週間の事だ。」

あのクソ野郎（葛西教授）が私達の所にきた。
来るなりすぐに荒神達が来るから迎撃準備をするように命令してきたんだ。

あたしはすぐに用意を済ませて訓練場に向かった。
そしたら感染予防だと言って注射をされたんだ。

暫くは何もなかったけど……

30分くらいたってからか？

一人が叫び悶えながら干からびて死んだ。

そしたらすぐ私の全身に激痛が走ったんだ。

内側から内臓を斬られるような痛みさ……

その痛みに私は気を失った。

目が覚めたら私以外の全員はミイラのように干からびて死んでた……

そして私の前にはこの強大な剣とメモが置いてあった。……読むかい？」

そう言うところボロボロの手紙を差し出してきた。

私はそれを受け取り読みはじめた……

「ユーに打った液体はアラガミ細胞“通称P53偏食因子”

残念ながらほかの自衛隊員はアラガミ細胞に喰われ死んだようだね。

ユーは一人になってしまった様だが

“作戦之零・TELIAMATO”

を完遂しなければならない。完遂した暁には福岡県。大学まで来るといい。

ユーまで殉職しないように頑張ってください。」

私は美鈴宛の手紙を見てハル教授は自衛隊員達と大学生達を実験台にして大量虐殺を知ると、教授に対しての殺意と怒りで左腕は闇よりも更に黒々しくなり脈打ちはじめていた。

「後の手紙は貴方の持つてるレポートと殆ど一緒だよ。」

美鈴は私の左腕を警戒しながら話しを続ける。

美鈴はフィーと話していたが私の方を向き不思議そうに私の左腕を掴むと、まじまじと左腕を観察した。

腕を掴まれてわかったが美鈴は以外と力が強いようだ。

「美鈴さん？」

「私はここに来る途中に何度も他の生存者に出会った。

フィーさんの様にオラクル細胞を投与された人に何度も出会ったよ。

」

私は美鈴の話聞いて自分の事より、ここに来る途中に美鈴さんやフィーの様にされてまだ生きている人がいる事に驚き、口を開いた。

「美鈴さん！！フィーや美鈴さんの様にアラガミ細胞（P53偏食因子）を注射された人は何人くらいいたんですか！？」

美鈴は興奮して話す私に苦しそうな顔を見ると口を開いた。

「7人の人に出会ったよ。……………だけど……………2人は……………」

……………私が殺した……………殺したくなかったのに……………」

……………」

涙を流しながら話す美鈴の言葉に皆驚愕した。

蝕之十四、適性と過去（後書き）

いつ2人を退場させようかな（・ω・）
うーん…

蝕之十五 アラガミ化

「…………美鈴さん!!
何でそんなことをしたんですか!?!」

フィーが美鈴に向かって叫ぶと美鈴は泣きながら話した。

「…………私だつて…………私だつて殺したくなかった!!」

一人は寂しくて、不安で、怖くて…………そんな中同じ様になった人達に会って嬉しかった。

だけど……………だけど!

アラガミ細胞に合いすぎる人もいた!……………

ソイツらはここに来る前に変化したんだ……………

急に体が震えだし眼が紅色に染まって、皮膚を引き裂いて背中から強大な爪のようなモノが出て来て…………

…私達に襲い掛かって来た……………

そしたらもう一人も同じ様に震えだして龍人みたいになってソイツに襲い掛かったんだ。

………すぐに勝敗は決した。

龍人みたいになった奴がもう一人を引き裂いて殺した。ソイツは叫んだ後にすぐ走って行ったんだ………私は足がすくんで動けなくて………

暫くしたらまた一人がアラガミ化した………また襲い掛かって来る前に………私が……殺した………

仕方なかったんだ!!

………一度アラガミ化したら最期………人間にはもう………絶対に戻れないから!!
だから………だから!………

それ以上彼女の口から言葉は出てこなかった。

「………そんな!それじゃ貴方達も!?!」

話を聞いていた健太と真理は子供達を抱き上げると走り出した。

ボタン!

「待つて!」

私とフィーが急いで追いかかけ様とすると美鈴に腕を掴まれ止められ

た。

「放して！」

フィーが掴まれた腕を振りほどこうと暴れた瞬間、

ズン、ズン……

と小さな地震のような揺れを感じた…

「地震か！？」

私が叫ぶとび美鈴が私とフィーの口を塞ぎ小声で話す。

「早く逃げないと、銃器を体中に纏ったアラガミが来る！」

私とフィーは美鈴の話を聞かずに、手を振りほどき健太達を追った。

「待て！！あのアラガミは！」

バタンツ！！

レイジとフィーが研究室から飛び出すと美鈴はその場にへたりこんだ……

「クソッ……逃げきれたと思ったのに……また私は一人で……！！！」

彼女は神機を掴みレイジ達を追う……

蝕之十五 アラガミ化（後書き）

登場人物退場させるのって結構アレだね（´ω｀）
まあGEの世界って、人が死ぬの当たり前なんだけどさ……

蝕之十六，变化（前書き）

蝕之十六、変化

ダッダッダッダッダッ……

フィーと私は外に近づくに連れて酷くなる謎の揺れとプレッシャーを感じた。
そして大学校舎正面玄関に辿り着き、揺れとプレッシャーの主を見た。

「!？」

そのアラガミに私達は驚愕した。

巨大な体躯……

肩に二つのミサイルポッド……

チェーンローラーのような前脚……

最上部にある骸骨……

不気味な前面装甲……

全身を被う人が作り出した重火器……

私はこのアラガミが向いている方向にいる“モノ”に目を凝らした。
動いている“モノ”は自分達のマンションに逃げようとする健太達

だった。

もう大学の校門まで逃げている……健太達を追う為に走り出した
私達の後ろで

……ガキン！

と、何かが開く音がした。

私達が後ろに振り向くとアラガミの肩にあるミサイルポッドが開き

……

「止めるー！ー！！」

「駄目ええええ！！」

バシュー……………

ドガアアン！！

危険を感じた私達が叫んだ瞬間、アラガミのミサイルポッドからミ
サイルが健太達に向かって撃ち出され爆発した……

私達はアラガミを避けながら健太達の元へ走る。

爆発で舞う土埃が邪魔で見えなかった為、埃の中に入り健太達を捜す。

微かに動く塊に気付いた私達が動く塊に近寄る。

「健太さん！」

目視出来る距離に近寄りそれを見て動きを止めた。

「そんな……………」

私達が見たのは無惨にも背中がえぐれて黒焦げになった篠塚夫妻だった。

「!?!」

呆然と立ち尽くす私だったフィーは健太と真理が覆い被さる様に庇っていた弥彦と燕に気付き二人を抱き上げた。

「先輩、私はこの子達を！」

「行け!!俺が奴を食い止める!!」

私はフィーが話し終える前にマンションを指差し、フィーが二人を抱えて走り出すと巨大なアラガミの方に向きなおい神機を構える……

ドスン、ドスン……

地震のようなこの揺れは重火器を全身に纏った巨大なアラガミが歩いた時に出来る震動だった。

私はソイツが近づくにつれ、恐怖と緊張で心臓の鼓動が早くなる。

ドスン、ドスン……………

ゴアアアア……………！！

ソイツは私の目の前まで歩いて来ると動きを止めた。

胴体最上部にある骸骨がこちらを向き生物とは思えない声で吠えた。

私はアラガミの左側面に回り込もうと走り出すが、

…………ガシャン！

（！！）

アラガミのミサイルポッドが開く音がした。

その音にミサイルの直撃を受けて黒焦げになった篠塚夫妻の姿が頭をよぎる。

私は走る速度をあげ左舷後方に回り込む。

（避けきれた！！）

そう思った瞬間ポッドから放たれたミサイルは予想外の動きを見せ

た。

前方に向かって放たれたミサイルは方向を急激に変え左舷後方の私に向かって飛んで来たのだ。

死を覚悟した瞬間、左腕が龍の頭に姿を変えミサイルを喰らう。

ガヴァ……バグッ!!

(!?)

ミサイルを喰らった左腕は緋色の光を纏う大口徑カノン砲へ姿を変える。

アラガミはこちらに振り向きつつある。

私は左腕のカノン砲をアラガミの弱点であろう最上部の骸骨に狙いをつけトリガーを引いた。

ガシャン、

バシューーーー

ドガアアアアン!!

ギヤオオオオオ………

私の左腕から放たれた緋色のミサイルは最上部の骸骨に命中した。

骸骨の一度が欠けている所を見ると、かなりの高威力を持っているようだ。

（今だ！！）

今の一撃で怯んでいるアラガミに近寄りローラーチェーンの様な前脚を斬り付ける。

斬り付けられた前脚からはドス黒いオイルの様な液体が勢い良く噴き出す。

しかしアラガミは気にする様子もなく真上に跳んだ。

私は一度距離を取り、落下して来た瞬間に斬り付けようと右舷後方から接近する。

シュボボボボボボボボ……

（？）

遙か上空からぐもった爆発音が連続して聞こえた。

上を見ると有り得ない量の小型ミサイルの様がばらまかれていたのだ。

重戦車の様なアラガミがミサイルと共に落下して来る。

（まずい！！）

ドズウウウン！！

ボックスステップで避けようとするも距離が足りず、落下の衝撃とミサイル着弾時に発生した爆風で吹っ飛ばされた。何とか受け身をとって体制を取り直し剣に変わった左腕を構えアラガミを警戒しながら少しずつ距離を取る。

アラガミはこちらを向き、動きを止めた。

直後前面装甲が開き、何かがゆっくりと出てくる。

ズズズズ……………

（まさか！！）

ドバウツ……………！！

シュー……………

前面装甲から出て来たのは大型ミサイルであった。放たれた大型ミサイルは私に向かって来る。

ガシャン！！

ドガアアアアアアアアアア！！！！

すぐそこまでミサイルが着た瞬間、左腕は盾となりミサイルを受け止める。
しかしミサイルの威力は凄まじく盾で受け止めても吹き飛ばされてしまった。

ゴッ
.....

(あっ
.....)

私は壁に叩き付けられ気絶した。

蝕之十六、変化（後書き）

既存の荒神だけだと内容上ちょっと無理があるので…オリジナル荒神の案募集してみようかな（・ ・ ・
とゆうことで募集してみますゝ
なにか案があれば、メッセージ送ってください・ω・）ノ

蝕之十七、違キ者ノ意思

(…体ヲ貸セ、人間…!!)

気絶する寸前に頭の中から声が聞こえ私は気を失った。

「愚力ナル者・我ガ糧トナレ…!!」

(うっ、……助かったのか…?)

私が目を覚まし、焦点が定まらずぼやける視界の中によく解らない巨大な何かが転がっていることに気付き、左腕を杖にしてヨロヨロと立ち上がる。

ぼやけていた視界が元に戻ると同時に左腕に違和感を感じ私は左腕を見て驚愕した。

左腕の剣は以前より大きくなり脈打っていたのだ……

「…何だ!？」

タタタタツ、

ヒュツ…

ガキイン!!

「!!!」

私が左腕に気を取られていると左腕が勝手に動き、後方から切り付けて来た美鈴の斬撃を弾く。

「貴方は………荒神になった……だから……完全に荒神になる前に……貴方には………死んで貰うよ!!」

私は突然の出来事に驚き振り返ろうとしたが、目の前に先程戦って

いた巨大な荒神が原形が解らない程ぐちゃぐちゃに殺されていた為、振り返るのを止めて美鈴に背を向けながら話しかける。

「何が……あつたんですか？」

美鈴は後ろに跳び退き神機を剣から銃に変え警戒しながら口を開いた。

「……覚えてないのね……」

荒神と戦っている貴方を助けようとして駆け付けた時、貴方の左眼は緋色になっていたの。

それに気付いた私は物陰に隠れて見ていた。

貴方は剣を構えその場で振るった。

荒神の体中に細かい線が入ったと思った瞬間、体中から血が噴き出したんだ……その直後貴方の左腕は龍の様な形になって荒神の数十カ所を喰い干切った。

左腕が元に戻った瞬間貴方は倒れた……

私が貴方に駆け寄るとその腕が……」

急に話を止めて美鈴に私が振り返ると美鈴は銃を構え、私の左腕に標準を定めながら苦虫を噛み潰したような表情で私を見た。

「左眼が緋色に………。そ、その腕………。
こ、来ないでええええええ！！」

私の左腕を見て怯えたのに気付कि、私が左腕を見ると剣から龍の様

に変わり緋色の眼が私を見ていた。

「!?!」

私は恐怖で左腕から離れようとしたが、もしも今動けば美鈴に撃たれると思い右腕で左腕の眼を隠し美鈴を見た。

「…意識はあるんですね。

でも、今のうちに貴方を討たないと…貴方は仲間を殺すことになる…それだけはさせたくない。

だから殺らせてもらう……

怨まないで………ください………」

泣きながら話し終わると美鈴は神機のトリガーを引いた。

ドサッ!!

死を覚悟した瞬間、後ろから急に何かが飛び掛かり前のめりに倒れた。

「コイツはまだ必要だ。」

「ダム!?!」

私を助けたのは敵だと思っていたダムだったのだ。

ダムは立ち上がりながら巨大な剣を美鈴に向けて話す。

すると美鈴は神機を銃から剣に変えてダムに向かって飛び掛かった。

ギャイン！！

「何で貴方がここに！！」

ダムは美鈴が剣を振り下ろす直前に神機を蹴り飛ばし、美鈴の無防備な腹部に蹴りをくらわせた。

「さて、俺も同行する。

コイツがアラガミになれば俺がコイツを殺すからそれまで待て。」

何が起こっているのか分からず、ただ呆然と片膝を着けたまま見ていた私にダムが手を差し伸べる。

「何で急に……………」

ダムは立ち上がり話す私の眼を見ながら口を開く。

「スサノオじゃない他の者……………お前とあの女には監視が必要だからな。」

130分後、研究室

私と美鈴とダムは暫く休憩した。

ダムは突然立ち上がり私に話しかけてきた。

「レイジ、あの女はどうした!？」

「あつ、……探しに行つてきます!！」

私は急いで研究室を飛び出す。

蝕之十八、接触

弥彦と燕を連れて逃げたフィーは大学校舎付近の倉庫の中にいた。重戦車の様なアラガミから完全に逃げ切れたが、別の“モノ”に襲われていた。

傍から見れば人が喧嘩している様に見える。

フィーが今現在闘っている相手は人の姿をしたアラガミ。彼女は先程自分自身をアラガミと言っていた。

銀の長髪に血濡れたワンピースを着ている小柄な女性だ。

右眼に眼帯をつけていて左眼は紅色。

彼女からは言葉にしがたい凶々しさを感じられる上に常に微笑んでいて怖い。

先程から殴りあっているが武器の類は持っていない様だ。

しかし殴られた腕や腹に鋭利な刃で斬られたような傷ができていく。

突如女性は口を開いた。

「……………ジズ。…この女性の中にいるんでしょう？
さっさと出て来なさい……………」

「…っ！……貴方…さっきからジズって言うけどっ、……それ誰よ！？」

それに何でいきなり襲って来るの！？」

「……………宿主は少し黙りなさい……
後ろの子供達を殺しますよ？」

「それだけは止めて！」

ドガッ！！

ブシャアア……………

そう私が叫んだ直後、彼女は私の服部に強烈な蹴りを放った。
彼女の放った蹴りは、完全に無防備だった服部に蹴りは綺麗にはいり、真一文字の斬り傷をつけ夥しい量の血が溢れ出る。

私は蹴り飛ばされる瞬間に首を捕まれ持ち上げられた。

「ぐっ、……………何を……
する…つもり…なの…？」

「…引きずり出すだけよ。」

「……………何を……………？」

「貴女の中身。」

彼女は微笑見ながら私の腹の傷口に手を突っ込む。

ズバツ……………

グチュ、ブチュ……………

「う、うあゝあゝあ……………！！」

中身を弄られているのがわかる。

服部の痛みに意識が遠くなっていく。

出血も止まらず足元に血溜まりが出来る。

「いい声で泣くのねえ……………」

「や、…やめ…て……………」

首を掴む力が徐々に強くなつてゆく。

必死に抵抗しようとするも力が入らず何も出来なかった。

「……………か……………はっ……………」

意識が消えそうになったその直後、
頭の中に聞き覚えのある声が響く

「——フィーさん、体を貸して！——」

(!?)

その声が聞こえた後、私はヴァンを蹴り飛ばしていた。
腹部の傷も消えていた。

今度は意識もしっかりしている。

「やはりいたわね、ジズ。」

……金の眼に金の髪…変わらないわね。」

「貴方も変わっていないようね……
この娘にこんな事して……
一体何をするつもりなの？」

今の私は私の意識とは関係なく話している。
口調や声も私のモノではなかった。
それは私の頭の中で聞こえモノだった

「なに、簡単な事よ……
“ノヴァ”を呼び起こしこの世界をリセットするだけ……
その為に貴方達の持つてるコアが必要なのよ。
だからコアを私に渡しなさい……ジズ。」

「そんな事を聞いたら尚更渡せない。
このまま貴方を放っておく訳に行かないから……ここで殺させてもら
う。」

「貴方が私を殺す？
何を言うかと思えば……」

武器もない貴方が私を殺せる訳ないでしょう？
第一貴方の武器はアレと共に封じたもの。」

「どうやって!？」

「簡単よ……」

出雲の祠にいる凍付けの×××××の隣に力を奪う鎖で縛り付けて、貴方の刀をアレの心臓に突き刺したの……

あの時のアレの悲鳴は良かったわあ
ウフフフ……

そして最期に付近の村の人間どもに

『この祠の奥にはある“化け物”が封じられている。

化け物の封印が解けないようにしっかりと警備しろ。復活したら殺せ。

』
って命じたの。」

「貴方………よくも!！」

そう叫ぶとジズはヴァンに飛び掛かる。

ヴァンは紙一重で避けて再び喋りはじめる。

「ここで貴方を殺してコアを頂きます。」

「だれが貴方何かにコアを渡すもんですか!！」

私が叫んだ直後ヴァンは両手にナイフのような物を握り襲い掛かって来た。

何とか斬撃を避け続けるも壁際に追い詰められてしまった。

ドスツドスツ!!

二本のナイフは私の両肩に刺さり、壁と私を縫い合わせた。彼女は腕を巨大な槍に変え笑いながら突撃して来る。

「さようなら…ジズ。」

「く、くそお……!!」

バリーン!!

死を覚悟した瞬間に倉庫の窓硝子を砕き、一人の少女が彼女に強烈な跳び蹴りを喰らわせる。

「!!」

ドガァ!!

完全に無防備だった彼女は跳び蹴りをまともに喰らい壁に叩き付けられた。

「…貴方らしくない」

「！？貴方封印されていたはずじゃ！」

「……………」

まあいい。その話はヴァンを倒した後にする。」

そう言うと彼女は私に蒼白色の綺麗な刀と黒い木箱を渡し、背中の漆黒の刀を抜き迎撃体勢を取る。

蹴り飛ばされたヴァンは立ち上がりレヴィを見ると叫んだ。

「貴様なぜここにいる！？」

お前は完全に封印したはずだ！」

「…貴方の封印が雑過ぎたんですよ。」

「……………うるさい！」

彼女は叫ぶと腕を巨大な槍に変えてレヴィに突撃する。

レヴィは紙一重でそれを避けると同時に刀で左脇腹を斬り付ける。斬られた脇腹からは血が噴き出す。

「くそっ……！」

ヴァンは悪態を付き斬られた腹部を抑えながら邪鬼の様な形相でこちらを睨む。

「睨む暇があるのか。」

レヴィは接近し刀を振るう。

私は黒い木箱の中の異形の純白の拳銃を取り出し、彼女に銃口を向け引きがねを引く。

不思議な事に発射音・反動は全くなく、非常に撃ち易い。
加えて連射も効く。

「くっ……がっ……くそっ……
貴様ら……二人がかりなんて……
っ……！……ぐあっ……
狡りいだろ……！！」

「………狡い？
あんたはよくやってた……一对多で確実に殺していた。
それなのに何？
自分がやられる側になったらそう言うの？」

レヴィは彼女に対し、斬撃を浴びせながらキツイ口調で話す。

「………っ！」

斬撃と銃弾の嵐にさらせながら喋る。
既に動けなくなっても良いくらい血を流している……

レヴィはヴァンの攻撃を全て避けながら人体急所のみを的確に斬っていた。
攻撃をくらうにつれヴァンの動きは遅くなる。

ドサッ………

数十分の攻防の末、彼女は倒れた。

「……っはぁ……っはぁ、……く……そ………」

今の彼女は既に虫の息だ。
心臓に刀を刺せば死ぬだろう。

レヴィはヴァンの目の前に立ち、彼女の首筋に刃を当てた。

「……何か言い残すこと、ある？」

ヴァンはレヴィの顔を睨み

「……吠え面かきやがれ！」

「……残す言葉はそれだけか。」

ヴァンの首をはねるために刀を振りかざした瞬間

ヒュッ！

「レヴィ！！後ろ！！」

ドガアア！！

「！！！！」

レヴィがとどめを刺そうと近付いた瞬間、黒い狼が倉庫に侵入しレヴィを吹っ飛ばした。

黒い狼はヴァンの前にくると動きを止めこちらを威嚇した。

「……ぐっ」

ヴァンはいずりながら黒い狼の背に乗る。

「……………つくそ……………！！……………レヴィ！

今逃がしたらいつ殺せるかわからない！！

今殺ってしましましょう！！」

レヴィから返事は返って来ない。

「レヴィ！？どうしたの！！
返事をして！」

「…っ…無理ね。……げふっ…貴方達……覚えてなさい…！」

そう言い残しその場から逃げ出した。

「何をしたの！？答えなさい！」

私は逃げ出した彼女を無視してレヴィに駆け寄った。
仰向けに倒れたままピクリとも動かない。
いくら呼んでも返事は無く、傷口からは血が溢れ続け止まらなかった。

ゴアアアアアアアアアアアアアアアアア！

（！？）

レヴィを介抱しようとした直後、倉庫内に多量の黒いオウガテイルが侵入してきた。私は瀕死のレヴィと子供達を護るため、蒼白色の刀を振り続けた……………

――10分後――

「……うつ、ううう……げはっ……」

レヴィは目を覚ました。

彼女の体中に切り傷が付いており、出血が激しく立ち上がる事すら出来ないようだった。

私はレヴィに駆け寄った。

「レヴィ！大丈夫！？」

レヴィは虚ろな瞳でこちらを見ている。

そして何かを喋ろうとして胸を抑えて苦しみ始めた。

「…っあ…っはあ、……うがあっ……！」

私はレヴィの服を開き抑えている手をどかし傷口を見た。

ピリッ……

（……！）

私はそれを見て言葉が出なかった。

胸部の傷口は深くえぐれ肋骨の様なものが数本見えており、数本の棘が突き刺さっていた。

棘はまだ生きているかの様にうごめき、レヴィの傷をえぐる。

棘がレヴィの傷をえぐる度に血が溢れ、出血は止まらない。

「痛いかもしれないけど…我慢して」

私は傷口に刺さっている棘を抜き取った。棘が抜かれる度レヴィは痛みに悲鳴をあげ暴れた。

それでもどうにか棘を全て抜き取り終え、レヴィの出血は止まった。全ての棘が無くなり、ようやく彼女の傷は塞がり始めた。

抜き取られた棘は暫く動き続けやがて動きを止めた。

そうしてレヴィの傷が癒えるまで私はジズと話をしていた。

まずは自分達の簡単な説明。

今現在ジズさん以外は昔のままの容姿だと言うこと。

昔のヴァンはとても優しく明るい素直な子供だったらしいが、ある日を堺に豹変してしまったとの事だ。

そんなヴァンに対してレヴィは見た目も剣の腕も何一つ変わっていないそうだ。

私は何故彼女が体を失ったか聞いてみたが教えてくれなかった。

それから彼女達の時代のアラガミについて……

どのようなアラガミが存在し、何処が弱点なのかも教えてくれた。何故私の体の傷が瞬時に治ったのかも教えてくれた。

『私は戦闘自体苦手なので余り前衛には立たないで』
と言われた。

そうして話しているうちにレヴィの傷は塞がり、倉庫の一番奥に隠れていた今は亡き篠塚夫妻の子供達（弥彦と燕）もこちらに来て戯れていた。

蝕之十八、接触（後書き）

もしかしたら番外編行くかも……
（行かない可能性20%）

蝕之十九、太古ノ神達

ガラアアアア……………

突如倉庫の扉が開いた。

「フイー、ここに居たのか!」

「先輩!!」

私を見た先輩は目を丸くしていた。

「…………お前髪染めた?」

「染めてませんけど?」

「…………鏡見てみる。」

見事に金色に染まってるから……」

私は鏡を見て驚愕した。

栗毛色の髪は金色に染まっていて、よく見ると眼の黒い所も金色になっていた。

少しだが背も伸びて体型も変わった気がする。

「な……な…何で…!？」

開いた口が塞がらず金魚の様に口をパクパクさせていると、ジズが話しかけてきた。

（本当にすいません！

私が先程フィーさんの体の主導権を握ってしまったせいで、昔の私の容姿に近付いてしまったみたいなんです……ごめんなさい………）

「まあ、別にそれはいいとして………その銀髪娘は誰だ？」

「ああ、この娘は『レヴィア・リル』

私たちの命の恩人です。」

レイジは屈み、レヴィアに手を差し出した。

「フィーを救ってくれてありがとう。

僕は八雲 レイジ。よろしくね」

「…よろしく。」

そう言って二人は握手をした。

先輩はレヴィアの背負っているモノに気付き話しかける。

「レヴィアちゃん、その黒いモノはなんだい？」

「…刀。」

荒神だつて斬殺出来る。簡単に言えば君達の持っている『神機』だ。……それと先ほどから私の事『ちゃん』付けで呼んでるけど、貴方が思つてゐる程若くない。それに不快だ。」

「そうなのか、それは悪かった。で、一体いくつなの？」

「この姿になつて1850歳。本来の姿の頃も含めたら10億1850歳……」

と、レイジの質問に答えた。

「……………へ？嘘でしょ？」

「嘘じゃない。」

そう言つて彼女は私を見た。

それに続いて先輩もこちらを見る。

（あー、フィーさん……）

少し体をお借りても宜しいですか？

レイジさんに説明を致しますので……）

私はジズさんに体を貸す事にした。

第一、私には説明出来ない。

「えー、ここからはフィーさんに代わり私『ジズ』が説明致します。

私達は今から約45億年前に生まれました。

彼女は旧訳聖書では『レヴィアタン』と書かれている邪神です。

『レヴィアタン』はジズ、私の双子の妹となります。

彼女は旧訳聖書の記述どおり、彼女は海を支配する神です。

生命力・治癒能力と共に高く不死の象徴ともされていました。

戦闘に関しては無類の強さを誇り、表情一つ変えずに他の生命体を惨殺したり、己の欲望を満たす為に大量の生物を殺害した為に、『兇帝』『暴皇』『災龍皇』『無慈悲之皇帝』などと呼ばれていました。その頃の容姿は西洋の龍そのものと言った感じで、地球の半分程を占めるほど巨大でした。

そしてラグナロクが近付き私達は人へと姿を変えラグナロクをやり過ぎ、それから七世紀程まで私達二人は北欧で生活をしていました。

その頃、姿の変わらない私達は吸血鬼と呼ばれ周囲の人々からは怖れられ、何度か私達を殺そうと人間が来しました。

その度に殺し、食料として地下に保存していました。

そんな生活を続けて100年、私達は色々な所へ行き旧訳聖書などを調べました。

そしてレヴィアはx x xに封じられ1300年間出雲の祠に封じられていた。

その後彼女は封印を自力で解き、ここにいます。

そうして現在に至ります。

ご理解いただけましたでしょうか？」

「一応は理解できたが……
今日の前に居るのはフィーなのか？
それともジズさんなのか？」

「両方ですよ。」

今は私がフィーさんの体を借りて話しています。今の会話はフィーさんも聞いていますし……」

そこまで話してジズは急に話を止め、いきなり私の左腕を掴みまじまじと見てきた。

「あの、レイジさん……」

この腕って……スサノオの………一部ですよね？」

「そうだけど………何か？」

そう答えると彼女は興奮気味に話しかけてきた。

「その左腕、貴方の意思どうりに動かないことはありませんでしたか！？」

「けっこうありますけど………」

何でそんなことを聞くんですか？」

「この左腕にスサノオの意識があるかどうかの確認のため。」

この左腕にはスサノオのコアが組み込まれてる………話しかけられた事はありませんか？

なんか…こつ、不良みたいな口調っていうか荒々しい口調で……
」

「……………あります!!

さつき巨大な荒神に殺されそうになったときに

『人間!!体ヲ貸セ!!』

つて声が聞こえて……………気付いたら……………荒神は死んでた。
」

「やっぱり……………」

こら!起きろスサノオ!!」

と叫びながら私の左腕を叩くと私の意思とは関係なく、左腕は龍の様な姿となりジズに向かい吠えた。

「何スンダ!コノ、クソアマ!!」

「『なにすんだ!!』じゃないよ!この阿呆!!

あんた宿主の事考えずに動いて……………」

「アア!?

ウルセ……………ツテ、テメエ……………ジズジャネエカ!

テメエ、何デココニイヤガル!!」

「貴方の口の悪さはあい変わらずだね…少しは口の聞き方に気をつけな!」

「ウルセエ……………第一宿主ナントドウ……………」

スサノオの言葉を遮ってジズが叫んだ。

「どうしてもよくない！！」

宿主が死んだら貴方も死ぬんだよ！？

わかってんの？

あんたが無理にこの子の体を使っても駄目。

無理に使い続ければこの子の体が耐えられなくなって死んでしまうんだから…

それに本来の力も出ない。

貴方が宿主の了承を得てからじゃないと駄目なんだ。

わかった？」

「……………チツ、」

スサノオは小さく舌打ちをしてこちらを向き喋りかけてきた。

「オマエ……『レイジ』ツト言ッタナ？

度々オマエの体ヲ借りルカモシレヌ。

ソノ際ハ素直ニ体ヲ貸セ。

ソレト、俺ノ姿ヲ変エタクバソノ姿ヲ心の中デ念ジロ。

姿グライナラ変エテヤル。

宿主ヨ、オレヲ失望サセルナヨ？」

「ああ、わかった。」

そう言つとスサノオは元の左腕に戻る。

私の左腕は前よりもだいぶ人のソレっぽくなった。

「これで自由にスサノオを使えるはずですから、死なない様にスサノオと頑張ってくださいね。

それじゃあ、フィーさんに代わりますんで……っと言ひ忘れる所でした。

スサノオは甘い物が好きなんで、もしも彼の機嫌を損ねたら甘いものあげて下さいっ」

「あ、ああ……」

「ふう……話しはこれくらいにして…大学校舎へ戻りましょう、先輩っ」

「ああ、戻ろう…フィー。

君も来るかい？レヴィアさん。」

「…ついて行つても良いなら」

「じゃあいこっか？

弥彦君、燕ちゃん行くよー！！」

「うんー！！」

最後に倉庫内の物全てを調べ、使えそうな物は全てバックに積める事にした。

倉庫の中には缶詰を始めとする保存食が沢山残っていた。毛布やゲーム機もある。

何より一番嬉しかったのは大量の医療用具だ。

――30分後――

こうして何とか荷物を詰め終り私達は大学校舎へと戻った。
途中小型アラガミ達に遭遇したが皆遠巻きに見ているだけで襲っては来なかった。

私が疑問に思っていると、ジズが教えてくれた。

ジズは『兇皇』が居るからといった。

『兇皇』つまりレヴィアは、荒神に対して物凄いプレッシャーを放ち続けていた。レヴィアの放つプレッシャーに中小型アラガミ達は本能的に怯え襲って来ないのだそうだ。

蝕之十九、太古ノ神達（後書き）

暫らくは更新できないかも……（、つω・、）

仕事え…しかも出張とかFU Z A K E N N A ! ! （・・

（・・・（・・・*）

テメエが行けよ…って思ってるのは内緒。そんなのバレたらお首が
胴体から分離しゅ……

蝕之二十、オモイデ

― 大学校舎内地下研究室 ―

「……………いつから見ていた？」

二人になり、美鈴がダムに話しかけると美鈴が話し終える前に話し始めた。

「ずっと、だ……………」

あれは龍… か？だが龍のような荒神の情報など聞いたことが無い……………
龍人の様な荒神の情報はあるんだ……………」

「その話し、詳しく聞かせてくれないか！……………その龍人の様な荒神は、……………昔の仲間かもしれないんだ……………頼む！！」

美鈴はやや興奮気味に質問した。

「いいだろう……………」

まずその前にお前の見たと言う龍人の様な荒神の特徴を教えな……………
話しはそれから……………」

「わかった……」

まず、ソイツの体色は紅色。頭に一本の真つ赤な角があった。背中には二枚の岩のような黄金色の鱗。そして長い3本しなやかな尻尾。……あと、両腕に白銀色の甲手の様な物がついてた。」

私の話を聞いた後ダムは暫く黙り、口を開いた。

「……色が違うがソイツは恐らく『驪竜』と呼ばれるアラガミだろう。最近発見された新種のアラガミだ……荒神のくせに人間と同じ様な行動をしゃがる。こいつを試してみろ。」

そういつてダムは携帯端末の様な物を渡してきた。

―新種の荒神について―

鹿児島県境付近で発見された新型アラガミ『リリヨウ驪竜』についてレポートを送る。

この荒神は交戦例が一度しかなく非常に危険な相手である為、ゴッドイーター以外は目撃次第、即時撤退するように。

先日調査隊が交戦し背中逆鱗を破壊した結果、非常に狂暴になり特殊な攻撃手段を使用してくる。攻撃を回避するのは非常に困難であり逆鱗の破壊はしない方が賢明である。

このアラガミは焰を纏った攻撃手段が多いため極低温の武器が効くと思われる。

討伐後、コアを摘出したとの報告が届いた後、調査隊との連絡が途絶えた。

現場に急行した所、現場には調査隊の死体と思わしき腕が見付かった。

辺りに驪竜以外の荒神の反応は確認されなかった為、調査隊四名は驪竜に殺されたと言って間違いない。

はコアを摘出されても行動可能だ。
コアを摘出したからといって油断は禁物である。

追伸……現在黒色の個体の他に紅色の個体も確認されている。紅色個体は現時点で一匹しか確認されていない。

紅色のは自身の放熱によって起こる陽炎を利用した攻撃・回避行動をとる。また、陽炎によって虚体を複数発生させる事も可能な為、実体・虚体を見分けるのは非常に困難である。自身の周りに地面から焰柱を連続で出現させる事もあるようだ。

焰を変形させ、刃の様な物にして斬る付けてくる事もあり、避けるのは非常に困難。また、全身に焰を纏い突撃してくる事もある。回避より防御を勧めする。

両腕から焰の斬撃を連続で発射する事もある。

一番注意してほしいのが口から放たれるレーザーである。

このレーザーは防御してはいけない。

レーザーに触れるだけで装甲が蒸発してしまうからだ

また射程距離が非常に長い。

そして一番厄介なのはこのレーザーを放つ際に予備動作が全くないとゆうことだ。

このレーザーは紅色個体以外使用してこない。

両腕の小手は破壊出来るかもしれない。もしも紅色個体が黒色個体と同じ性質を持っているなら上記の焰剣攻撃を封じる事が可能と思われる。

紅色個体は黒色個体より遥かに強力であるため、遭遇した場合十分に注意されたし。

―以上のレポートがつい先日

『対荒神世界防衛機構』

―通称フェンリル―

から送られてきた。

「現在紅色は一匹しかない……………紅色個体は十中八九お前の元仲間だと思っていいる。それとお前にとって悲しい話したが……………そいつには発見次第討伐される。」

「……………そう、ありがとう

……………えっと、

……………あの…さ、

……………それって私たちが……………もし……………そいつに出会ったら……………殺さないといけないの……………？」

「……………ああ、そうだ。」

私の質問に対するダムの返事に私は声が出なかった……………
気がつくとき涙が私の頬を伝っていた。

その時、今や紅色驪竜となった彼との思い出が私の脳裏をよぎる。

―私が荒神細胞を投与され

『ゴッドイーター』

になって初めて出会ったのが彼だった。

名は「ワタベ渡部 マモル衛」

独りここを目指して歩いていた私が大量の荒神に襲われていた時、
彼は助けてくれた。

彼は、優しくて気さくでとてもいい人だった。

…彼も私と同じ様に無理矢理ゴッドイーターにされた人だ。

その頃、どんな事にも対してマイナス思考だった私と違い、衛はど

んな事にも前向きで、そんな彼に私はいつも彼に励まされていた。
そうして旅を続けている間に私は彼に特別な感情を抱くようになった……
どんなに絶望的な状況でも決してめげずに明るく振る舞い、みんなを励まし続ける衛を私は好きになっていた。

―衛と一生一緒に生きていたい―

そんな事を思えるくらい私は衛の事が好きだった。
私はそんな彼という時間が楽しくて愛おしくて、私は彼という間だけは……このイカれた世界の事をほんの少しだけ忘れられた。

―だがこの世界は甘くなかった―

ここへと向かう途中に九州で彼は……
…衛はアラガミと化した…
彼は突如苦しみだし、荒神となってゆく衛を私は助けられなかった。

衛は荒神『驪竜』へと姿を変え私の前から消えた。
今、荒神と化した衛は討伐対象となっている。
私達が彼に出会えば殺さなければならぬ。

――私が初めて愛した彼を、この手で殺す時が来るかも知れない――

そう思うと涙が止まらなかった。
いくら拭いても、溢れる悲しみと涙……
泣いても泣いても止まらなかった。

そんな私を見てダムが優しく話しかけてきた。

「…………泣くな」

「ひっく、……うう……何で……私達が
……何を言っているのよ！
勝手に……荒神細胞を……移植して……ひっく……荒神化したら殺
して……勝手……過ぎるよ……！！」

ダムは何も言わずに私の横に座り黙って私の話を聞いていた。

「……運が悪いだけって……ただそれだけだって……わかっているのに……」

……誰も、誰も悪く……ないのに！！

……誰かを……憎まないと……私っ……気が狂いそうでっ！！
……でも、……それでも私っ……誰も……誰も憎め
なくて……！！」

泣きながら喋り続ける私をダムはそっと抱きしめ、

「……俺がお前のその憎しみや悲しみを受け止めてやる。
……」

だから、好きなだけ泣け。俺が全部受け止めてやるから。」

「……う、うわあああああん」

私はダムの言葉に安堵し、子供の様に泣きつづけた……

.....
それでもダムは何も言わずに、泣きつづける私をそっと優しく抱き
しめてい
てくれた.....

蝕之二十、オモイデ（後書き）

——
——A・C 早くハンニバルだしてえ……
当分無理だけどwwww

蝕之三十一、ダムノ過去

「ねえ……ダムは……自分から望んでゴッドイーターになったの？」

暫く泣き続けた私はダムに質問をした。

「……いや、お前と同じだ。
俺もアイツに騙されたんだ……『予防接種だ』って言われてな。」

ダムから返ってきた返事は以外なものだった。呆氣にとられている私を余所にダムは話を続けた。

「お前らがクソ野郎と読んでいる奴は俺の………義理の兄だ。」

「なっ!？」

言葉に出来ない程驚いている私を無視して話しを続ける。

―3ヶ月前 日本、首都東京

フェンリル極東支部地下研究所―

「大変です!!」

研究室のドアが乱暴に開かれ研究員が飛び込んできた。

「どうした!？」

すぐに迷彩服を着た司令官が振り向き、何があったのかを聞き返す。

「荒神が中国や韓国や台湾、オーストラリアにも現れたようです！」

！
」

「何だと！？」

突如として世界各地に出現し、地球上の生物全てに牙を向いた生物『荒神』に人類は連合を組み、抵抗を試みた。

しかし恐るべき繁殖力と生命力、凄まじい速さの進化に人類は苦戦を強いられた。

世界中の生物学者が集まり、荒神に対抗する術を考えた。

結果、荒神細胞を直接人体に投与する事になった

荒神細胞を投与され見事に適応することが出来れば凄まじい力を手に入れられることがわかったのだ。

ただ、適合者が現れるでは地獄のような日々が続いた。

初の適合者『バスク・コマンチ大尉』（以後、小佐）が現れると強靱な力に耐えうる事の出来る、荒神と同じ様に進化する武器が必要とされた。

そうして学者達と技術者達が思考錯誤

した結果作り出されたのが対荒神用武器『神機』である。

初期のピストル型神機ではない、剣・盾・銃・喰形態を瞬時に切り替える事が可能で荒神を喰いし、進化する非常に高性能な神機である。

それ以降、不思議な事に神機の製造に失敗する事は全くなかった。
だが荒神細胞の人体適応の法則性が解明出来ず、今だに大勢の犠牲
を払い続けている。

話を黙って聞いていた美鈴だったが怒りに震えダムの胸ぐらを掴
んで怒鳴った。

「研究者達が世界中で同じ事をしてるって！？……だとしたら貴
方達全員狂ってる！！」

今にも手を出してきそうな美鈴だったがダムは掴まれていた手首を
握り、口を開いた。

「……俺は違う。
さっきも言った通り、俺はお前と同じ被害者だ。」

そう言つと美鈴は手を離し、

「……そうだったよね、…ゴメン。」

と謝ってきた。

「べつに謝らなくていいさ……」

暫しの沈黙の後、美鈴が口を開いた。

「…そういえばさ、日本で初めてのG Eってだれなの？」

「……俺だよ。」

「え!？」

蝕之三十一、ダムノ過去（後書き）

更新遅れてすいません（、つω・、）
仕事が増えてしまつてね………はあ（、・・・、）

あ、オリジナル荒神はまだ募集してまーす（・・・（・・・（・・・
*）
オリジナル荒神の案、お気軽にどうぞ

蝕之三十二、雨

ダムの中から衝撃的な話しを聞いた私はその場に呆然と立ち尽くし、ダムに弱々しく尋ねる。

「……なら、何で……仲間を殺されて……
……そんな体にされても……貴方は……
奴等の味方をしているの……？」

「……それしか奴等に対抗する手段が無いからだ……」

「でもっ……！……それでも……！！」

言い返そうとした私だったが言葉が見つからず下を向き拳を握りしめた。

バタンッ!!

「ただ今戻りました……」

研究室の扉を開けレイジと子供達と見馴れぬ二人の女性が入って来た。

「……………おい、ソイツ等は誰だ？」

ダムがキツイ口調でレイジに尋ねる。

「金髪の方はフィーです。」

もう一人は……………あー、そのですね……………」

「さっさと言え。」

「その、銀髪のちっちゃいのは……………
荒神……………です。人型の……………」

「荒神を連れて来るなんて正気か!？」

そう叫び美鈴は神機を銃に変え、銃口を銀髪の少女へと向けた。少女は銃口を向けられても全く怯えず、美鈴に話しかける。

「これが『神機』か……ずいぶん変わったな。」

そう言つて少女は美鈴に近寄つて行つた。

「く、来るな！」

美鈴は怯え、神機のトリガーを引いた。

カシャン……………

(!?)

カシヤ、カシヤカシャン、

何度も神機のトリガーを引いても光弾は出なかった。剣形態に変えようとしても変わらない。神機が動かず焦る美鈴に少女は近付く。

「来るなああ！」

取り乱す美鈴に少女は先程と変わらぬ口調で話しかける。

「…何をそんなに怯えてる？私は貴方に何もしないのに」

目の前のアラガミの少女が発したそんな言葉に対し美鈴は叫んだ。

「嘘だ!!」

「何を根拠にそんな事を言う?」

美鈴の言葉に少女は顔をしかめた。

「他のアラガミがそうだからだ!!」

「あんな単細胞生物の集まりと一緒にするな。

それに考えてもみな。もしも私が他のアラガミと一緒にだったら、レイジやフィーも喰ってる。

その阿呆が私の事を

『アラガミ』

などと言ったからかも知れないが、そこら辺のアラガミと一緒にしないしてほしい……」

「……そんなに疑わなくてもいいんじゃないか？美鈴。第一ソイツの言う通り、他のアラガミと同じならここにレイジ達が来ることも無い。」

「確かにそうだけど……………」

困惑していた私にダムが話しかける。

「信じてくれてありがとう」

ダムはレイジに質問した。

「そつえばこいつに名前あるのか？」

「ありますよ。」

名前は『レヴィア・リル』

フルネームで呼ぶと長いんで、『レヴィ』って呼んでいます。」

私が質問に答えるとダムはレヴィを持ち上げた。

「そつか、ありがとう。」

宜しくな、レヴィ。」

「宜しく………と言いたいが名前を聞くのを忘れた。」

「ダムだ。」

「宜しく、ダム」

そうやって自己紹介をすませたレヴィは美鈴の方を向いて笑った。呆氣にとられている美鈴を見たフィーが美鈴の肩を叩きながら話しかけた。

「これでもまだ、レヴィちゃんを信じませんか？美鈴さん？」

「う………」

言葉に詰まる美鈴にフィーは話しを続ける。

「それに、アラガミとゆう点では私達も同じです。
望まぬ形ではありますが、私達の体の中にも荒神細胞があります。」

「……………言い方が悪いかも知れませんが普通の人から見れば私達もアラガミです。
彼女が荒神だからと言って疑うのはやめて下さい。彼女が可哀相です……………」

「そう……………だね、…私が間違ってた。」

そう言うと美鈴はレヴィの方へと近付き彼女に話しかけた。

「その……………さっきは疑ってごめんね…
私の事…許してくれる……………かな？」

「いいよ、許す」

レヴィは美鈴にそう言った。

「ありがとう……あ、私は美鈴。『紅 美鈴』って言うんだ。
よろしくね、レヴィさん。」

「よろしく……美鈴」

ダムは入口付近に三つ置いてあるパンパンに膨れたリュックサックに気付き、フィーに話しかける。

「おい、この袋は何だ？」

「食料や衣服、医療用具や娯楽品その他諸々を詰めたものですよ。近くの倉庫で見付けたんで持ってきました。」

「そうか……ん？」

ダムはリュックから飛び出ている血まみれの布に巻かれた何かに気付き、ソレが何かを確認する為にリュックに近づく。

「これ、開けてもいいか？」

「……………いいですけど

……………ソレ、…取り扱いには注意して下さいね？

一応『神機』ですので……………」

ダムはフィーの言葉に疑問を抱きながら布をとっていく……………

……………

すると綺麗な蒼白色の刀が出てきた。

刀は氷の様に冷たかった。

刀身は氷結晶の様な外見の綺麗な鞘に納められており、とても神機とは思えなかった。

「……………本当に『神機』なのか？」

「ええ……」

この刀の中を見ようとして、鞘から抜こうとした瞬間フィーが叫び、
ダムの腕を掴む。

「抜くな!!」

凄まじい気迫に威圧されダムは抜くのを止めた。

「……何故だ？」

「私以外の者がこの刀を抜けば、抜いた者が斬り刻まれてしまうから……」

だからこの刀を抜くのは諦めて。

……お願いします。」

「……わかった」

この時ダムの中にはある疑問が生まれていた。

今私と話しているのはフィーのはずだ……しかし、私がこの刀を抜こうとした瞬間に眼の色が変わった。口調も違う気がする……

……一体彼女は何者だ？

蝕之二十三メール

ピピ・・・

みんなが雑談をしている中、
短い着信音にダムは気づき携帯に目を
やると

【新着メール有】

と書かれていた。

f r o m 葛西 春也

題名

やあ♪

元気になっているかい？

今回君にちょっとした仕事をしてもらおうとおもってね。

内容は以下の通りだ

県庁内部B - 2フロアS区画に保管してある

禁忌指定荒神討伐用強化型GEについては不明な点だらけだ。
特にく被検体 No.3 (ヒケンタイ ナンバードライ) >
は性能はおるか人型であるかどうかさえ不明なんだって

まあ、検体が起動する可能性は限りなく0に近い。

だから安心しなよ(・・・*)

また何かあったら連絡するよ(・・ω・・)(b

それでは、健闘をいのる

(この野郎……俺をなめてんのか？
顔文字なんか使いやがって……Jkかってーの)

彼はそんなことを思いながら携帯をポケットにしまった

蝕之8'5

親子（前書き）

えーっと……この話は蝕之八と蝕之九の間の話となります（・ω・、
蝕之八で復活した娘と蝕之一八でバトった娘は別人。
わかりにくくてすいません（・・・、）

蝕之8'5

親子

——樹海付近 廃村——

（父上の言っていた場所はここであつての……？
……誰もないじゃない）

白銀髪の少女は羊皮紙のメモを片手に廃村内を歩いていた。

そしてメモに書かれている場所、所々朽ち果てた教会の中に入った

「綺麗……」

教会に入ると綺麗なステンドグラスが目についた。

デザインは今まで見たことのない様なもので、神が人を喰らっているシーンだった。

悪魔が人を虐げたり、喰らったりする様なものは見たことがあるがこんなのは見たことがない。

ステンドグラスの下、長椅子に一人の少女が座っていた。

片手に本を持ち、脇には真っ黒な刀が一振り立てかけてある。

容姿は髪の色以外、白銀髪の少女と一緒であった。

だが少女が身に纏う服は血で赤く染まっただけで、教会という場に居るにはそぐわない。

警戒しながら近づくと少女は口を開いた

「やっと来たね。遅かったじゃない……………か」

「レヴィア・リル・ヒューリィ……………？」

その問いに銀髪の左眼に眼帯をした少女は

「実の母をそんな名前で呼ぶなんてひどい娘だね。『アラストル・サラ・ヒューリィ』」

と軽く笑いながらこたえた

「あ……御免なさい。母上」

「まあ、いいよ。

それよりさ……父さんに聞いたよ。
貴方、神機『×××』に触ったんだってね。」

「はい。……触りました」

「……で、拒絶反応はなかったかい？」

「……ありませんでした」

「そうか。ならいい
……といたいたけどさ、

『許しが出るまで×××には触らない』

あの掟を破った罰は受けてもらっ。」

「……う」

「まあ、お父さんから罰は受けたんだろ？」

「…はい。受けました」

わたしはとてもキツイ罰を受けさせられるんだろうと思っていたけど、母の口から発せられた言葉は私の想定外だった。

「じゃあ私からの罰は免除しよう。

……… 変わりにちよつと用事をたのまれてくれないか？」

「……え？」

私の返事を聞いた母は吹き出す様に笑った。

「なに？お仕置きされたいの？」

…… まさかあんたMっ娘？」

「Mじゃないですし、お仕置きされたくなんかありません!!
それと……用事ってなんですか?
なければ父上の所に帰らせていただきます!」

「あ、ちよつと待ってよ!!」

「用事はこの荷物をジズのところへ届けてやってほしいんだ。
そして、必要とあれば彼女を守ってやってほしい。
もちろん彼女だけじゃなく、周りの者たちもね?
頼むよ?」

「……………うぐっ!?!」

いきなりレヴィアは胸を抑え倒れ込んだ

「母上っ!?!」

「げふっ、ごふっ……………
大丈夫…夫、だから……………用事…頼んだよ?
げほっ、」

そういつてレヴィアはヨロヨロと力なく立ちあがった。
そして2、3歩あるいて倒れた。

「全然大丈夫じゃないじゃない!!」

「大…丈夫……だ…から」

母は無理に笑い、口から血を流しながら少し苦しそうに言う。

よく見るとレヴィアの体はボロボロで、先程まで倒れこんでいたところには小さな血だまりができていた。母の服を染めていた血は母自身の血だったのだ。

「と、とりあえず…貴方はこの荷物と刀を…
ゲホッ…

…もってジズの所へ行つてちょうだい。

あのこは復活して間もないからさ…

…私は父さんの所に…行つて、傷を治して…くるから。」

「そんな体で父上のいるところまで行くなんて無謀すぎます!!」

「…その心配はしなくて…いい、いいよ。

こんな身体、で…も十分戦えるから…

用事は、任せたよ、サラ」

そういつて母は立ち上がり教会を出ると、怪我をしている者とは思えぬスピードでどこかへ行ってしまった。

蝕之8'5

親子（後書き）

あゝ一八話以降レイジたちと旅をしている娘は「アラストル・サラ・ヒューリイ」です。まわりのやつらはサラを母親の「レヴィア・リル・ヒューリイ」と間違えています（´・`・´・`・´）
一応見た目は殆ど一緒ってゆう事になってますので……

蝕之二十四、出発

「ここを出発する。」

「何で？ここなら荒神に襲われてないし、食料もあるのに……」

フィーの問いに対してダムはすぐに答えた。

「確かにそうだ。だがな、何時までもここにいられるわけじゃない

んだ。」

「え!？」

「ここはハル教授が独自に開発した荒神の侵入を完全にシャットダウンする

『対荒神装甲壁』
で囲まれている。

しかし、ずっとシャットダウンできるわけじゃない。定期的にメンテナンス・装甲壁へのデータ入力、荒神素材等による強化が必要になる。それは教授以外出来ない……………それと、ライフラインの問題がある。もしも、地殻変動や荒神によって地上からのライフラインが切断されれば、電気や水道、ガスが使えなくなる。それに医者だっていない……………

だからここを出て一度県庁に向かう。」

「何故県庁に？」

「通信機器等を手に入れるのと、フェンリル極東支部に連絡をとる為だ。」

「フェンリル極東支部ってなんですか？」

レイジや美鈴がすぐに質問してきた。
ダムはめんどくさそうに説明を始めた。

「フェンリルは『対荒神世界防衛機構』と呼ばれる政府公認の機関だ。

ここでは荒神や神機の研究、ゴツドイーターに関する研究をしている。本部や支部の周辺区域は対荒神装甲壁で覆われていて生き残った民間人が住んでいる。

フェンリルはそれ単体で生産消費をする、一種のアーコロジだ。だから電気やガス・水道は自由に使える。フェンリルの地下では野菜や家畜の生産・育成もされているから肉だって食える。それに医者もいるからここよりずっと安全だ。

ただ、フェンリル内部で生活出来るのはゴツドイーターやメンテナンススクール、フェンリル関係者だけだ。無論、ゴツドイーターは強制的にフェンリルに住まう事になる。フェンリル周辺の外部居住区で荒神化されたら困るからな……………」

説明を聞き終えた四人は理解できた様で、すぐに荷支度を始める。30分後私達は準備をすませ、外に出ると雨が降っていた。

「あの……雨降ってますけど、行くんですか？」

「……ああ、この方が好都合だ。」

レイジの質問に即答したダムは神機を握りながら先頭を歩き始める。

―県庁前 交差点―

ザー……………

ぴちゃ、ぱちゃ……………

「何者だ!!」

降りしきる雨の中、県庁前にいる警備員らしき男性が女性に向かって叫ぶ。

「……………」

女性は男性を睨みながら県庁へ近付く。

「止まらんか!!」

女性に男性が近付いた瞬間

「……………」

バキッ!!

ドサッ……………

女性は近付いて来た男性を殴った。

「がつ……………」

(!?)

ガチャ……………

女性は腰のポーチから拳銃を取出し…

「よ、よs」

狙いを定め心臓を打ち抜いた

「B - 2フロアS区画」

「いた！」

女性はフラフラと幽霊の様な足取りで 被検体 N O 3 (ヒケ
ンタイ ナンバードライ) に近づく。
そして

被検体 N O 3 (ヒケンタイ ナンバードライ)

[illegible]

ヒケンタイ ナンバードライ コントロールメニュー

起動用コード入力

[illegible]

凍結用コード入力

[illegible]

機能調整メニュー

《
o
l
l

r
o
c
k
》

[illegible]

カタカタカタ……カタンツ……

ピー……………

コード確認。指令実行イタシマス

「……………これで私の役目は……………おわりね」

女性はそう言い残すと地面に倒れ、動かなくなった。

ザー……………

雨は降り続け、県庁前の血溜まりをながしていく……………

……………

大学校舎を出発したレイジ達七人は荒神に襲われる事なく県庁まで残り5kmの所に来ていた。

特に異常は無いのだが先程からレヴィアの様子がおかしい。ぐつたりとした様子でフラフラと幽霊の様に歩いている。

もしかしたらこの雨が関係しているのかも知れないが、よく解らない。

「む……………」

「……………さっきからその調子だが大丈夫なのか？」

先程からうだっているレヴィアにダムが話しかける。彼女は重そうに頭をあげて怠そうにダムに返事をする。

「……大丈夫……じゃない。」

……さっきから怠くて……ダム……おぶって……」

「リュックおぶってる俺におぶれと？」

「……………駄目か？」

「駄・目・だ！！自分の足で歩け！」

「むぐ……………」

怒られたレヴィアは美鈴の方を向いた。

「……………」

「ゴメン、無理だ……………」

と、即答された。美鈴もリュックと自分の神機で手一杯だった。その後フィーとレイジにも同じ様に聞いたが、同じ様に断らた。

「……………薄情者」

などとぼやきフラフラと歩いていった。
うだっているレヴィアと違い、弥彦と燕はレインコートを着て雨の中はしゃいでいた。

「レイジ兄ちゃん、疲れたあ……………」

「じゃあ休もつか？」

「うん……………」

「ダムさん、少し休憩しませんか？
子供達も疲れているようですし……………」

暫く歩き続け県庁まで残り4kmまで来た頃、レイジがダムに話しかけた。

「……………そうだな。
一度休憩しよう。」

そうして近くにあった鍵の掛かっていない民家で休む事にした。
持ってきた食料（主に携帯食料）を食べ30分程休んだ後、再び歩き始めた。
雨は相変わらず降っていた…

満腹になり眠ってしまった子供達をダムがおぶっていた。
少し辛そうにしているダムに美鈴が心配そうに話しかける。

「ダム、大丈夫？」

「大丈夫だ。俺の事は心配するな……………ちつ、全員そこから離れる！！」

公園にある湖を見てダムが叫ぶと、全員一斉に湖から離れる。

ドバァーン！！

（！？）

離れると先程までいた場所に向かって、湖の中から勢いよく巨大な

何かが飛び出て来た。

レイジとフィーがレヴィアと燕を連れて湖から離れた。美鈴はすぐに斬りかかかり、ダムは背中では寝ている弥彦をレイジに預けてすぐ、巨大な何かに斬りかかる。

ザシュ、ザシュ、

ギャワーーー！！

美鈴とダムが左右にある鰭の様なモノを斬ると血の様なドス黒い液体が流れ出るが斬り飛ばす事は出来ず、反撃の危険を感じ二人はバツクステップで距離をとりダムはコチラに走って来る。

私達が改めて見ると、巨大な何かは鰐とピラニアを足して2で割った様な荒神だった。正直言つと、キモい。

私達の横に来てダムは巨大な何かを警戒しながら話しかける。

「レイジ、フィー、よく聞け。

荒神は雨が苦手だから外に出たんだが…まさかコイツがいるとは…

……

魚龍『グボログボロ』

額から生えている角の様なものから高圧縮の水塊を打ち出してくる。だが幸いにも水塊を撃つまで時間がかかる。その隙に切り込め。

それとあの巨体を支え、水中を高速で移動する為に発達した鰭に気をつける。

殴られれば即死するかもしれん……十分気をつけて攻撃しろよ。

後は、気付かれない様に気をつけながら隠れてろ。俺達が奴を倒す！行くぞ、レイジー！！」

「はい！」

私はレヴィアと燕、弥彦を連れて近くにあつた廃車の陰に隠れた。レイジはグボログボロの右舷後方から、ダムは左舷後方から神機を叩きつける様に斬りつけた。

美鈴に気をとられていたグボログボロの背中に斬り傷が付き、グボログボロはのけ反った

「私から行きます！！」

私達が戦線復帰した事に気付いた美鈴は大声をあげながらグボログボロに正面から突撃し、すれ違い様に左鰭を一閃した。

ギャワーーーー！！

（！？）

斬られた直後グボログボロは怒号の叫びをあげた。ソレは耳をつんざく様な雄叫びで、耳の痛みに耐え切れず三人は耳を両手で塞ぐ。

ブオン、

ガン！！

ブオン、

ドゴツ！！

ブオン、

ドガッ！！

怒号の雄叫びをあげた直後グボログボロは両鰭を拳の様に丸め、周囲を無差別に殴り始めた。殴られた地面や物体は凹み砕け、原型を留めてはいなかった。
当たれば命の保障は無い。

ドガッ！！

「美鈴！！」

動きが読めないのとさっきの雄叫びのせいで動けなかった美鈴は、運悪く殴打され車に跳ねられた様に鮮血を撒き散らしながら空中に飛ばされた。

ダダダダダダダッ、

ズザー、ガシッ！！

殴打された美鈴をみたダムは自身の神機を放り、美鈴に向かって走り出し間一髪の所でキャッチした。美鈴の右腕は折れていて、骨のような物が飛び出していた。至る所から出血し激しく咳込みながら何度も吐血している。呼吸も浅く、ピクリとも動かない。

グボログボロは美鈴に追撃を加えようと額の大砲を美鈴達に向けて水塊を打ち出そうとしたとき、レイジがグボログボロの脳天に強烈な斬撃を撃ち込む。

ブオン、

ブオン

斬られたグボログボロは驚き、鰭を丸めて周囲を殴り始めた。レイジは殴打されないよう着地と同時に盾を展開した。

ブオン、

ギャイン！！

「っ！？」

ドボン！！

鰭が当たった瞬間、レイジは空を舞っていた。ガードをしたのだが、弾き飛ばされてしまったのだ。恐らく、鰭による殴打の威力の高さとガードした時の体制の悪さが原因だ。

空中に飛ばされたレイジはどうする事も出来ず近くの湖に落ちた。

グボログボロは美鈴達に向き直り狙いをつけた。

ガチャ、

「ダムさん、後ろ！！」

ソレに気付いたフィーがダムに向かって叫んだ。
ダムはグボログボロに向き直る。

ドウッ、

直後グボログボロは美鈴達に向けて水塊を撃ち出した。

蝕之二十五、強襲者・グボログボロ（後書き）

そろそろキャラ紹介やんべ（´・ω・｀）
作者自身こんがらがりがけてるので……

蝕之二十六、災龍皇ト旧式神機

ドパアアン！！

水塊は美鈴達に当たること無く砕け散りただの水に戻った。

「……………」
「？」

「……………大丈夫？」

水塊に当たらなかった事に驚き、何があったのか確認しようとダムが前を向くとレヴィアが立っていた。

「……………お前、何をした？」

「……………殴っただけ。」

ダム…あれは私が殺る。

貴方は早く美鈴をジズの所にもってけ」

「すまない！」

ダムは美鈴を抱え上げてフィー達の所へ走り出す。

レヴィアはグボログボロの方を向き臨戦態勢をとった。

「逃げないのか。いい度胸だ……………」

そう言った直後、レヴィアはグボログボロに正面から接近した。ソレに気付いたグボログボロは額から水塊を連続でレヴィアに向かい撃ち出す。

タタタタタタタッ、

ガチャ…ドゥッ！ドゥッ！ドゥッ！

「遅い」

レヴィアは水塊を髪一重で全て避けながらグボログボロとの距離を詰めてゆく。

グボログボロとの距離およそ50m。

タタタッ、タンッ、ザシユ！！

ギャワーーー！！

グボログボロとの距離が40mになった瞬間レヴィアは地面を蹴ってグボログボロの額の角を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた角は空高く飛ばされ地面に突き刺さる。切断面は非常に綺麗だった。

角を蹴り飛ばされたグボログボロは悲痛の叫びをあげ鰭を振り回して暴れはじめる。

ブオン、

ブオン、

ブオン！

「危ない!!」

鰭がレヴィアに当たりそうになりダムが叫ぶ。

ドゴオン!!

「……黙って死んどけ」

グボログボロの鰭による殴打を殴って止めたレヴィアはぼそりとつぶやく。
直後レヴィアはグボログボロを殴り飛ばし、なおも追撃を加え続けた。

――3分後――

レヴィアはよくわからない肉塊になったモノを見て

「……………もう壊れたか…弱いな」

と言って殴るのを止め、暫くしてからニヤリと笑い元グボログボロを喰らい始めた。

グチャ、ブチュ……………ミチチチツ……………ブチャツ……………ブチュ…バリ
リ……………
ボキンッ……………バリ、ボリン……………バチュ……………

「何……………喰ってんですか…？」
……………レヴィアさん？」

湖から上がり濡鼠になったレイジが真つ赤に染まったレヴィアに恐る恐るに尋ねる。

レヴィアは喰べる事を中断し、レイジの質問に答える。

「魚……………食べるか？」

「魚って……………ソレ、さっきの荒神じゃないのか？何で荒神を食っている？」

それに、あの荒神を倒したのは…誰だ？」

「倒したのは私。喰ってる理由はさっき食べた昼飯の携帯食料だけじゃ足りなかったから」

レヴィアは喰らうのを止め鰭やら牙やら角を集め始めた。

「それ……………どうするんですか？」

「……弥彦達の神機造るのに使う。

コイツの素材は加工しやすく硬くて軽いからちょうどいいんだ。」

「……………造るだって!？」

私はレヴィアの「神機を造る」という言葉に驚いた。

驚く私を余所にレヴィは素材を集めながら話を続ける。

「うん。

子供達も丸腰だとこれから大変だろう。

今の時代の神機より性能が若干低いけど、体の中に荒神細胞をいれなくてもいいから誰でも使えるんだ。」

最後の素材を拾い袋に詰め終えたレヴィアはフィー達の下へ向かった。

フィー達の所へ行くと治療をされ包帯まみれの美鈴が横たわっていた。

ただ美鈴の意識は今に戻っておらず、喋りかけても返事はない。

ダムは美鈴の横で心配そうに美鈴を看ていた。

私達は美鈴を安全な場所へ運ぶ事にし公園を出る。

近くに鍵の掛かっていない民家があったのでそこで彼女を看病する事にした。

蝕之二十七・夢中

— 暗闇 —

ザー——

降りしきる雨の中、一人の女性が倒れていた
右腕には血まみれの包帯を巻いた体中ボロボロの女性が。

(… っ… は… ?)

女性は立ち上がり辺りを見回す。

辺りは降りしきる雨のせいで何も見えなかった……

(誰か……… いないの… ?)

女性そう呟きながら歩きはじめた時

(…タリ…ナ…イ…)

(!?)

と、途切れ途切れに声が聞こえた…

その声はおおよそ人のモノではなく、恐ろしかった。

女性は雨のなかその声の主から逃げる様に走った……

はあっ、はあっ……

雨の中走る足音は

—二人分—

一つは解らぬ声の主から逃げる女性。

もう一つは謎の声の主。

一体、どれほど走っただろう……

この世界には走っても走っても出口らしき物は無かった。
降りしきる雨は……

次第に紅くなり痛いと思う程激しく、強く降る

それでも彼女は走った。

解らぬ声の主から逃げるために

……ドンッ

（ッ！？）

暫く走りつづけた彼女は何かにぶつかった。

（マダ…）

ぶつかった何かから”アノ”声が聞こえた。
先程まで彼女を追いついていたモノの…

……ガッ！！

（マダ………タリヌッ！！）

くあっ！？

一瞬で彼女は紅い腕には捕まった…

ギリ…ギリ…………ギリギリギリ…………

う、っがあああ……………

彼女は何とか逃げようと暴れたが……
それは無駄であつた

彼女を掴む腕の力は強く…

…ギリギリ…………ベキッ！

かはっ…………

何かが折れる音がして握られていた女性が吐血し抵抗を止めた。
否、抵抗を止められたのだ。

ブウン……………ドサッ！

直後彼女は真つ黒な地面に叩きつけられた。そして謎の声の主が彼女の右腕を掴み……

ゴキンッ!!

つきゃあああああ………げふっ!?

声の主は彼女の腕を折り痛みへのたうちまわる彼女の腹を思いっきり踏み付けて悲鳴を止めた……

その後、声の主は痛みで悶絶する彼女に跨がり殴り続けた……
殴られる度に彼女は叫び……叫ぶ度に殴られた……暫くすると……
悲鳴もあげずに……殴られる度にびくつく様になった……

彼女にはもう……

抵抗する力も……叫ぶ声すらもなかった

ザシュ………

そして最後に胸部を思い切り刺されて
彼女は動かなくなった――

彼女の意識は無くなりかけていた……
薄れる意識の中、彼女は声の主の顔を見た

――彼女が見た顔は

”XXXXX”であった――

”XXXXX”は去り際に何か言っていた

蝕之二十八、不安

―民家・深夜三時―

――つ――！――

はあっ、はあっ………

（どうして今頃になってアノ時の記憶が……？）

皆が眠る中、レヴィアは飛び起きた。

暫くして彼女は自分の体を確かめるように触り…
胸の辺り、夢の中で刺された場所に濡れた感触を感じた。

（まさか…ね）

シュッ……ボウ

私は蠟燭に火を付け、自分の胸の辺りを照らした……………
胸に巻いてあるサラシは少し赤く染まっている

(…ど、どうせさっきの魚の血だ)

そう自分に言い聞かせ私は自分を落ち着かせた。
私は蠟燭を傍に置き、サラシを変える為解いていく…

(…おかしい。)

いつもならすぐに取りれるはずのサラシが中々取れない。
ちよつとした引っ掛かりがある部分を無理に取りうとすると、瘡蓋
を取るときに似た痛みがある。

シュル……

(……………！！)

最後の1巻きを取った時私は自分の目を疑った。
私の胸の中央——鳩尾の少し上の辺り、
夢の中で刺された所に十字傷があった…

(なんでよ…どうしてこの傷が……………完全に塞がった筈なのに)

ツ……………

傷からは今だ血が滲み、少しずつ私の体を染めていく

ガチャ…………

(っ!?)

胸の傷に唾然としていると、ドアが開いた。
私は胸の傷を隠すように布団に抱き、ドアの方を見る
入ってきたのは見張り番のレイジだった。

「女性の寝室にノーノックで入るなんて…! どういう神経しているんですか」

私が露骨に嫌な顔を見せながら言うと、彼はかなりあわてふためいた。

なかなか虐め甲斐……もとい弄り甲斐がありそうだな…彼は。

「い、いきなり入ってすいません!!」

レヴィアさん…その、そこにある赤い布は!？」

(……………迂闊だった。)

私は血に染まったサラシを急いで隠した。

「な、何でもない。

それより何か用件があって私を訪ねたのでは?」

「何でもないわけではないでしょう?レヴィアさん!」

「何でもない!!」

「嘘です!

何もなかったら血なんて出ない!!

……布団にだって血がついてるじゃありませんか!!」

「……………え!?!」

私は視線を下し布団を見た。

私が傷を隠すために抱いている所だけ血で染まっていた。

(なんで……………?どうして!?!)

「レヴィアさん、そこになにを隠してるんですか!?!」

「…え?きやつ!?!」

レイジは突然私の布団を引っぺがしたのだ。

「……………」

布団をひっぺがし、私を見たレイジは固まった。

・サラシを取った後。

←

・胸を隠すために布団を抱く

←

・布団を取られる

←

・胸、ノーガード。

つまり……丸見え。

「っ——~~~~~!!」

パン!!!!

「あぶあっ!？」

レイジの頬に綺麗にビンタが決まった。
私は片手で胸を隠し、半分泣きながら睨みんだ。

「バカッ、もぐっ!？」

私は叫んでる途中でレイジに口を押えられてしまった。

「そのことは謝りますから!!
それよりも…」

その胸の十字傷はどうしたんですか!?!」

「ももむまら、ままむめ!!」(話すから、放して!!!)(「

「あ、はいっ…」

「けほっ、けほっ!!」

もう……死ぬかと思った………」

「すみません!!」

「……この傷はね、ただの古傷。
…すぐ塞がる。

だからもう……放つといて!

着替えたらずく見張り番するから……

出て行ってよ!!」

「えっえっ?…あっ?」

ボタンッ!!

私はレイジを部屋から強引に追い出し気絶させて、彼に記憶を消す薬を飲ませ、サラシをまき直して着替えて見張り番を交代した。

蝕之二十八、 不安（後書き）

仕事が忙しくて更新遅れました（ ・ ・ ・ ）
すいません……

まだオリジナル荒神募集中ですので、遠慮せずおくってください（
・ ・ ・ ・ ）

蝕之二十九、 不安解消？ 其ノ壺

- 夜明け 午前5時 -

(十字傷…結局塞がらなかったな……)

見張り番をしながら私は自分の胸の傷を触りながらそんなことを考えていた。

不思議な事にこの傷には触っても痛みがないのだ。
だからと言って塞がっているわけではない

傷はしっかりと開いていて、今でも血は滲みサラシを赤く染めていく

（これ…誰かに見られたらまたなんか言われるんだろうな……）

その時、私は先程のレイジとのやり取りを思い出した
見張り交代の連絡の際、血染めのサラシを見て私の布団を引っぺが
したアノやり取り。

（あの薬…ちゃんと効いたかな？
初めて作ったやつだから自信ないんだよね……
…効いてなかったらやだなあ。）

そんな事を思いながら私は1階のベランダで朝日を眺めていた。

ガチャ…

「ふあ……レヴィアさん、見張り……交代しに来ましたよー」

「ノックくらいしてくださいよ……尾崎さん。」

「ん……ごめん」

ドアを開け入ってきたのは今だ眠そうに目をこするフィーだった。
フィーは私の方に近寄って来て、横に座り話しかけてきた

「よいしょ……と。」

ふあゝあ……ねえレヴィアさん。」

「なんですか？」

「廊下で……先輩が寝てたんですけど……
にやんでかしてまふか？」

彼女は後半あくびをしながらしゃべったので少し聞き取りづらかった。

今も眠そうに目をこすったりしている

(…あのまんまにしとくんじゃなかったかな?)

「さあ…おおかた、眠気に負けて自室に帰る途中で眠ってしまったんでしよう。」

尾崎さん、眠いのでしたら寝ていてもよろしいですよ?」

「大丈夫だよ…へつくちゅ!!
…ううう」

「寒いんですか?尾崎さん。」

「うん…ちよつとね。」

こんな薄い寝間着じゃさむがるのも当然だろう…
私は身体をさすって身体を温めてるいる彼女の為に毛布を取りに行こうとして立とうとした瞬間…

「きゃっ!?!」

「うーん……………あつたかい」

フィーが私に抱き着いてきたのだ。

「ちょっ！？尾崎さん！やめてください！！」

「いーじゃないですかあ」

はふうゝあつたかいですう」

そういつて彼女は私をさらに強く抱きしめ、頬擦りしてきた男だったら嬉しいだろうな…この状況は。

「いい加減、離してく・だ・さ・い・よゝ！」

「嫌でゝす」

はあふう…暖かくて柔らかくて気持ちいい」

まるで少女がぬこを抱きしめて、幸福感に満ちた様な表情を見せ、彼女はさらに強く抱きしめてきた。

（ぬぐぐ…なんで振りほどけない！？）

なかなか振りほどけず私は困惑した。

私にとって普通の人間を振りほどくのは容易いはずなのに…

何故だああああああああ！！（注 心の叫び）

むにゅ

（……むにゅ？）

むにゅ、むにゅ……

（この感じ……間違いない…私胸もまれてる！！）

視線を下げると案の上私は乳を揉まれてた。

「っー!!」

「やわらかいねえ」
「サイズはこれから期待かな？」

「尾崎さん！？なななななな何やって!？」

*****視点切り替え・side 尾崎 (？) *****

(ふふふふ……やっぱ弄りがいがあるわあ
…お姉ちゃん♪
つるぺたなのはちょっとかわいそうだけどねーww)

「…ちよ、や…やめ……ひゃん!!」

(可愛い声出しちゃって………うふふ♪
…お姉ちゃんってこんなに胸弱かったっけ?
まあいいや!もっと弄っちゃえ!!)
(

むにゅむにゅむにゅ………

５分後

胸やいろんなところを弄り続けた結果……

「ふぁ……お……おざきしゃん……も、もうやめへえ……」

顔は火照ったように少し赤くなり、はぁはぁとちよつと喘ぎ気味ーw
目なんかとろんとしてるしー（笑）

そんなこんなでえー……………いい感じにエロくなりました（笑）

（やつべwwちよつwそんな表情でそんなこと言われたらもつとやりたくなっちゃうよwwww
でもまあ…弄るのはこの辺にして、本題にはいりますかな
みんな起きちゃうだろーし）

蝕之二十九、 不安解消？ 其ノ壺（後書き）

慣れないなあ……こーゆー展開の話は。

下ネタ系は初めてだし……

…ん！？石投げるのだけは止めt……

アッ――――――――――

――――

レヴィア「作者がご存命なら続きますので…それではまた次回でお会いしましょう」

蝕之三十一 不安解消(?) 其ノ式

*****視点切り替え ・side レヴィア(?)*****

(何でこんな事になった……………)

尾崎さんに抱き絞められてそれから…
どーしてこんな事になってきたんだっけ？

なんか頭が真っ白になってきた……

…何でだろ……………なんかコレ…気持ちいい…
なんか…体中から……………力抜けてって…どんだん……………
…抵抗出来なくなってる……………来ちゃ…う

「……ねえレヴィア♪」

「…うえ？」

尾崎さんは手を止めて話かけてきた。

（やばい…さっきが残ってて間抜けな返事しかできない…）

「この胸の十字傷…どうしたのかな？」

尾崎さんはにやにやしながら私の胸の傷を撫でている
私は尾崎さんの手を離そうと彼女の腕を掴む。
ただど力が入らず、彼女の腕を掴むのが精いっぱいだった

「私の腕掴んでどうしたの？」

「しよれ…さわらないでえ」

（なんでしつかり喋れないんだあああああああ！！

体に力入らないし…どうなってんのよおおおおおおお………）

そんな事を思っていると

「ふふふふ……」

ねえレヴィア。なんで力が出ないか知りたい？」

「ふえ？」

と彼女は訪ねてきた。

（なんでただの人間が……

そうだった、彼女の中にはジズさんがいたんだっけかな。

…もしかして今日の前にいるのは……）

「…気づいちゃったかな？ サラちゃん」

………
あ？

（え？なんで私がサラだってばれた！？）

私が混乱していると……

「サラちゃん…」

私の事覚えてるー？

うりうり〜♪黙ってないでさあ…何か言いなさいよ〜♪」

そんな事を言いながらまた私の体を弄り始めた

「ひあ！ ジズさん…ちょ…」

も、もうらめっ！！

おねがいっ…やめへえ！！」

「う〜ん…覚えててくれてんだあ♪

嬉しいなあww

もっと弄りたいけど時間もあんまりないし……

やーめ…」

（ほっ…よかったあ）

そう思い、少し安心した直後

「…るわけないじゃん♪」

「ふあつ！？」

も、もうやめっ……ひうん！」

彼女は私に純真無垢な清々しい笑顔を見せた直後、さつきより激しく弄り始めた……

(二つの鬼畜めえええええええええええええええええ!!)

[illegible][illegible][illegible]

「あうう……
も、もうやめてよ……」

5分後

散々敏感な所を弄れられ……死にそうです。
精神的にね…

こんな辱め受けたの初めてだし．．うん。
初めてだ！！

こんな（ピー）事経験したのわ！！

まだ当分先だと思ってたのに！！

ド畜生おおおおおおおおおおお．．．．．
．．．．．！！

（↑心の叫び）

「ごめんごめんww

あんまりにも反応が面白くてwww

「ついやりすぎちゃったよw」

私がなんだかよくわからなくて泣いていると彼女は笑いながら謝ってきた

（今ならこの人、斬ってもいいよね？
謝り方ふざけてるしさ…）

「あ、サラちゃんw
今さ私の事斬ろうって思ったでしょ？w」

..... 彘？

..... 思考読まれた？
読まれ... た... よね。

まあそれはほっといてさ.....

「あの…」

「ああw

何で力が出ないか聞きたいんでしょう？w」

まだ笑ってるよ……畜生！

いつか仕返ししてやる……………！！

「うん…

あと……………もう離してください……………
また弄られそうで怖いから……」

「えーww

まあいつか。十分楽しんだしねーwwww」

「あ、あれ？」

私は彼女に離してもらい、立とうとしたのだが…

さつき弄られたせいで四肢にうまく力が入らない……

それを見た彼女はより一層激しく笑っていた。
すげーむかつく…

「立てないんだw

可愛いね、君もw w w w

暫く横になってな。少しは楽になるから」

私は彼女に抱えられ風通しのいい所に寝かされた

「うう…」

蝕之三十一、不安解消(?) 其ノ式(後書き)

次で下ネタ系は一旦切ります

(・・・)(・・・)(・・・)*(!?)

まあたまにこの系統の話も混ぜながらやってくつもりです。
グロ系の話多いから・・・

そうゆう話の時にイジられるのは多分レヴィア。もといサラ。

サラ「!?!」

アナケラ

極東支部に行ったら下ネタの回に君でイジることは無くなる(小声

ではず) だからさゝ

ちよつとだけ我慢してくれ(・・・*)

蝕之三十一、 不安解消？ 其ノ参

風通しの良いところで休み、それなりには呂律が回る様になった私は彼女に話しかけた

「ジズさん。なんで力が出せないか教えてください」

「はいはいw」

何で力が出ないかっていうと、それは君が何回も私に絶頂^{イカ}された

からさww

「それで力が出ないのw」

・・・は？

私の中ではある純粹な疑問が生まれた。

絶頂^{イク}ってなに？

マジでわかりません。

「……ねえジズさん。

絶頂^{イク}ってどうゆうこと？

とゆうかなんですか？」

のちに私はこの事を聞いたことを後悔することになる。

「ぶっ！？あははははwwwwww」

彼女はいきなり腹を抱えて笑い出した。
そして彼女はどうか笑いをこらえながら話始める。

「なに？ほんとに知らないのww？」

「わかんないから聞いてるんです」

「あはははははw

その様子じゃあホントに知らないんだねw
君さ途中何度か頭が真っ白になったでしょw？」

「なりましたよ。それがどうしたんですか？」

「それが絶頂^{イク}ってことなのwww
まさか知らないとはww
びっくりだよwwwwwwww」

……聞かなきゃよかったかなあ……うん。
たぶんこの話は聞かなかった方がよかった話だ。
てか絶対聞かなくていい話だった気がする。

私がそんな事を思っていると、

トントントン…

と戸を叩く音がした。

「あさごはんできたよー」

戸を開けたのは燕ちゃんだった。
朝早くなのに元気だな……

「おねえちゃん、ねてないでやくいこー」

と言って燕は私の服を引っ張る

「あ、うん。
ちょっと待ってね」

私は立とうとしたけど

(……やばい、立てない。)

それを見た燕は首を傾げ

「どうしたのおねえちゃん？
たてないのー？」

「うん…なんでだろうね」

私は笑いながら燕と話す。

「燕ちゃん。

レヴィアお姉ちゃんは私がおんぶしてくから先にいってて。」

「わかったー。」

そう言って彼女はさっさか行ってしまった

「さて、行きましょうか…レヴィア」

そういつてジズは私をおんぶしてリビングまで連れていく

～i n リビング～

「遅くなってごめんね」

リビングには美鈴以外全員いた。

ジズはレヴィアをおろし、空いてる席に座る。

テーブルにはトースト、目玉焼き、サラダがあった。

私たちはそれらを食べ、各自片づけを済ませたら自由行動となった

蝕之三十一、 不安解消？ 其ノ参（後書き）

短くなってしまったよ……

胸の傷と力が出ない理由は関係ないってゆうねw

蝕之三十二、 夢下記憶

ー同日・午前九時ー

(やる事ないし…昼寝でもしよう)

私は3階へ向かった。

……なぜ昼寝するのに3階に行くかって？

3階の部屋にあるベッドは他の部屋のベッドと違って一番ふかふかだから。

それに天窓から適度な日光が入ってくるからもう最高!!

•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
	•	•	•	•	•	•	•	•	•
	•	•	•	•	•	•	•	•	•
		•	•	•	•	•	•	•	•
		•	•	•	•	•	•	•	•
			•	•	•	•	•	•	•
			•	•	•	•	•	•	•
				•	•	•	•	•	•
				•	•	•	•	•	•

*****??.sideレヴィア(?)*****

(ここは……何処？

私…寝てたはずなんだけどな…)

気づくと私は牢の前にいた。

周囲は薄暗く…不気味で、牢獄の様な感じ。

ただ、普通の牢獄とは違い…牢が一つしかなかった。

この牢、なんだか見覚えがあるような気がする。

牢の中に何か居るのか私は気になり、格子の隙間から中の様子を窺う…

しかし牢の中は薄暗く、何があるのかよくわからない。

私は何か明かりが無いか周囲を見渡すと…

看守室の様な部屋があつた。

(…………汚いな。)

部屋の中は書類や銃弾、無線機や何かのリストの様なものが散乱していた。

長年使用してないのか所々埃が被っている。

(…ファイル?)

私はリストファイルの様なものを拾いあげ、ページをめくる。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

？ ■ ■ ル ベ ■ ■ 八 ■

「を・ら・もの」シ……。

その名はで「け・明・の……す。

ま・の名は……。

つ・は「暁……る子」で

総・の……の中で……気高く……い存……で……った。

十・の……を……ち、サ・ネ・「……王」……は、キリ……

於……る七……の大……「傲……」を……る存……も……る。

由……は言う……も……く……自身の墮……起……す……と……られ……。

自……を……と同……あ……いは……り……れて……ると……識し……シ……
アー……全……の三……の一……て……に反……す。神……し明……
・乱を實……した墮……は……アーの他に……無。

また、……は樂園よ・墮……せら……た初の……である。

墮……が地表に……所は、エ……
対の……半球とされている。

ここから……を恐怖……地が嫌悪の……表し……表
を縮めた……と……南・球は……め……積が多……た。

地……は、自……罪の重さに……球の……

心まで引・・り込・れ、地の・・・を創り上げた。
そして、ル・・・・はそ・・・ま地・の・・・た。

墮・・の・・名詞、・・使・・シ・・・の力は、地・底・・じ込
め・れようとも・・・ゆる人間・・へと誘・地・・引き・り・・・
む。

地・——重・・・戸・底——の・・る所・・

- P 1 -

文字はかすれ、ほとんど読めない上に意味が分からない。
次のページも１ページ目と同じ様なもので私はリストファイル
を元に戻し、部屋の中を見回す。

するとブレーカーのような物があった。

所々錆びついているが問題はない………だろう。

スイッチはオフになっている様だ…

私はスイッチをオンにするため、レバーを下げるため、力を入れる。
錆びているせいだろうか…なかなか動かない。

ギギギギギギ………ガコン!!

ブ…ブブ………ブウン………

異音がした後、周囲は明るくなった。
私は看守室を出て、先程の牢に向かう。

牢の中は——真っ赤だった。

簡易ベッドのシーツも、床も、壁も……
部屋の一番奥に少女が居た。

牢の中の少女——

白銀髪は所々血で染まり、片腕は欠け、胸には十字傷。
見れば見るほど自分に似ていた。

私が言葉に詰まって見ていると、
牢の中の少女は——

ふと何かに気付いた様にユラリと立ち上がり、こちらに向かってヨ
ロヨロと歩いてくる。

そして、私の目の前で歩みを止め口を開いた……

「……ようやくきたか。遅いんだよ、阿呆が。」

蝕之三十二、 夢ト記憶（後書き）

PVアクセスが5800代이었습니다!!

読んでくださりありがとうございます）．．．（．．．*（

これからもがんばりますので、なにとぞよろしくお願いしますm

）
——m

オリジナル荒神はまだまだ募集中!!

「……ようやくきたか。遅いんだよ、阿呆が。」

片腕を欠いた少女はいかにも面倒くさそうに言う。

「……………貴方誰？」

それにどうしてそんなにボロボロなの？

後、此処が何処か知ってるなら教えて。」

私の問いに格子の中の少女は驚いたような表情をし、数秒間固まっていた。

そして深いため息を吐いた後、地面に座り込んでしまった

「・・・私は貴女。」

「ここは君の精神世界だ。」

「……………精神世界？」

「そうだ。何度も言わせるな、この阿呆」

少女はダルそうに話す。

「つーかよ…」

「お前なんか聞きたいことあるから来たんだろ？」

「聞きたい事なんかないけど。」

この一言を聞いた彼女は呆れた表情を見せ話し始める。

「……………本^{マジ}気でいつてんの？」

「マジ。」

「はあー……呆れた。」

お前さあ……胸の十字傷がなんで開いたか気になったりしねえの?」

「あ……それは確かに気になる。」

貴方さ、どうして開いたか知ってるの?」

「知ってるよ。」

俺はお前だからな……

あ、そうだ。

お前さ、電源装置のあった部屋いってタバコ持ってきてくれねえか?」

「タバコ?」

「そーだよ。もってこねえなら話さねえ。」

そう言うつと、彼女は仰向けになっでごろごろし始めた。

こいつ、中身おっさんじゃん……見た目は少女だけどさー。とりあえずタバコとってこよう……

十字傷の事聞きたいし。

―看守室(？)―

「んー・・・ないなあ」

部屋の中をいくら探してもタバコは見つからなかった。
あったのは葉巻っぱいのと灰皿。

他は埃を被り、何が何だかよくわからない段ボールやら本。

とりあえずは葉巻っぱい何かと灰皿持つてこよう。

タバコの代わりにはなるだろう……たぶん。

―独房前―

「おー……………い？」

私は驚いた。

さっきまで血の海状態だった牢の中は真っ白になっていて、さっきまでは無かった

ソファ―やテレビとかが置いてあったのだから。

そしてソファ―には見知らぬ女性が座って、テレビを見て爆笑していた。

私が啞然として牢の前で突っ立っていると、中の女性がこちらを向き話しかけてきた。

「おっ！遅っせーじゃねーか！！
まあいい、こっち来いよ！鍵は開いてっからさ！」

とりあえず私は中に入り、女性の所へ行く。

近くまで行ってわかったが彼女、相当酒臭い。

私は葉巻つばいのと灰皿をソファ―脇にあつたテーブルに置き、女性の脇に座つた。
もとい座らされた。

「おっ！！葉巻じゃん。これ好きなんだよなーw
サンキュー！！！」

女性は葉巻を見ると少々大げさにはしゃいだ。

「あの・・・」

「あん？どした」

「貴方…誰？」

「私か？」

私はさっきの血まみれ片腕つるぺた少女だよ。」

「……………!？」

彼女の返答に驚き、固まっている私をよそに彼女は話続ける。

「わかんねーってツラだな。

まあいい。

十字傷の開いたワケ、教えてやるよ!」

そう言うと彼女は片手に持っていた缶チューハイを飲みほし、空き缶を放ると話を始めた。

「十字傷はな、体の再構成の時にひらくんだ。
んで再構成中。

つまり傷が開いてる時は、そこらのカス人間以下の力しか出せねーのさ。

そんでな、再構成が終わると胸の傷から赤い結晶みたいなのが出てくる。

そいつを自分の神機で叩き斬れ。

そうすりゃオメエの神機も強化されっからよ。」

それだけ言うと、彼女はまた缶チューハイを開けて飲み始めた。

「っあー美味い!!」

んで、再構成中の注意!

まず傷が開いてる時は戦わない…

神機を触らない。

あとは殺されない事！！

傷が塞がってる時は殺されないけど、開いてるときゃ……………

ん……………つウマー！！

銃弾1発で殺されちまうから気い付けろ。」

空になった缶チューハイをまた放り、彼女はゴロンと横になってしまった。

そして何かを思い出したように私に話しかけてきた。

「あ、なんか質問とかある？」

「殺されるとどうなるの？」

「あ……………裏人格に体乗っ取られて、ただの戦闘狂になるよ。」

「え？」

「だーからあ……………

裏人格に体乗っ取られて、ただの戦闘狂になるって言うてんの。

おめーの中にや俺ともー1人いんの。

もう1人のやつはお前の裏人格。

かなり凶悪でな、話なんか通用しねー。

殺しには愉悦・快楽しか感じねーんだと。

んで名前は……なんつつたっけな……」

そこまで言っただけで彼女は頭を抱え悩みこんでしまった。
数分するといきなり飛び上がり、叫んだ。

「……思い出した！！『アラストル』だ！！
確か憤怒なんかを司る悪魔の中でも特に凶悪な力持った奴だ！
！」

「は！？」

「『は！？』じゃねーよ。
今はおとなしいけどよ、表人格のお前が殺されつと体に乗っ取っ
て好き勝手しやがる！！
だから殺されんなよ？
暴れだしたらジズとかレヴィアの奴等じゃねーと止めらんないか
らな。」

それだけ言っただけで彼女はまた横になってしまった。

「ねえ。貴方は名前、ないの？」

「んなもんねーよ。」

私の問いに答えた彼女の声は少し悲しそうだった。
暫らくたってから彼女は、ぼそつと聞こえるか聞こえないか位の声
でつぶやいた。

「あのさ…名前付けてくんねえか」

「なに？聞こえないよ」

「…名前つけてくれて言ってんだよ！！」

ちよつとキレ気味な声だったが顔は恥ずかしいのかなんなのか、少
し赤くなっていた。

「良いよ。」

「どんなのがいい？」

「へんなのじゃなきゃ…なんでも良い。」

「んー…『アルヴィト』はどうか？」

「いいね。それにしよう!」

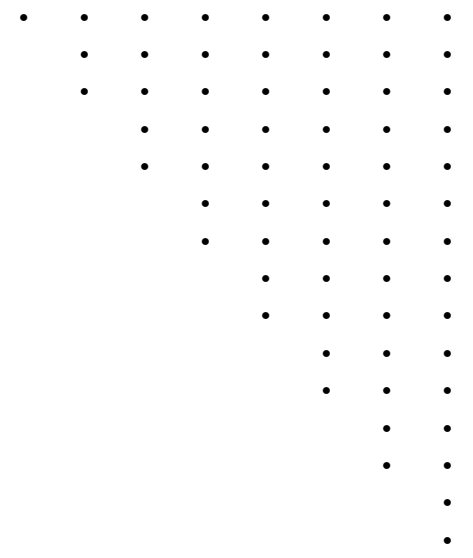
彼女は喜び飛び上がった。

「改めてよろしくな！！サラ」

「…よろしく、アルヴィト。」

A 20x20 grid of dots forming a triangular shape. The first row contains 20 dots, the second row contains 19 dots, and so on, down to the 20th row which contains 1 dot. The dots are arranged in a right-angled triangle with the right angle at the top-left corner.

$\left[\begin{array}{c} h \\ \vdots \end{array} \right]$



蝕之三十三・傷と秘密（後書き）

今更だが……

最近荒神出してない！！

なんか別物になり始めてる（？_Δ？、。？）

さつさと極東支部アナグラいかないと……

蝕之三十四

「ん……………」

私が目にしたのは所々塗装が剥がれ、コンクリートが向きだしになっ
っている天井。

ベッド脇の時計は16時を指していた。

どうやら私は7時間もアチラにいたようだ……………

「ん、んああああ……………」

体の節々がちよつと痛い。

・・・まあ、成長痛みたいな微妙な痛みだからあんまり気にはならないけどね。

トサッ・・・・・・・・・・

体を起こすと、何か硬いものが膝の上に落ちた。

（何だろ・・・？）

大きさにして子供の頭代のソレは外見とは裏腹に、とても軽かった。膝の上に落ちたソレは仄かに紅い光を放っている。形は薔薇に似ていた。

わかりづらいなら薔薇の形をしたルビーを想像すればいいと思う。かなりきれいだね、うん。

ずっと昔に母さんと一緒に集めてたアレ……
えー………っとなんだっけな…華晶って言ったっけ？

………うん、多分『華晶』だ！
そーゆーことにしよう。

(だけど……ちょっと嫌な臭いがするな…)

私は華晶を持ち上げ、匂いを嗅いでみる。

……血の匂いが私の鼻を突いた。
そんなに強く匂うわけじゃないけど……そこまで弱い匂いではない。
い。

言うなれば

——麝香。——

そんな感じである……

んー………なんだろう？

ガタッ、ガタタタタ……

「!？」

疑問に思っていると神機がいきなり振え始めた。
とりあえず私は華晶をベッドの上に置き、振える神機を握る。

バギッ……

「きゃっ!？」

神機を握ると何かが砕けた様な異音がした後、いきなり鞘が床に落ち刀身が露わになった。

刀身はいつもの黒色とは違い、真紅に染まっている。

「あっ!？」

私が神機の変化に見とれていると、神機は私の意志とは関係なく華

晶を真つ二つに叩き斬ってしまった。
華晶を斬った神機は一度大きく脈打つと、大きな焰を吹き私をも包む。

（熱っ……くない？）

私を包み込んだ焰は不思議と熱くなかった。
ソレは温かいとうゆうより、むしろ冷たくも感じられる、不思議な焰であった。

「っ……………」

焰が消えると神機の刀身は黒から真紅へと変わり、刃は巨大な犬歯の様に変貌した。
そして……………

私自身の姿も変わった。

「……………」

短かった白銀髪は長く伸び、身長は10？ほど伸びた。
サラシを巻いていた、とある部分がやけにきつく感じたのでサラシを取ってみると……………

「・・・おお!!?」

つるぺただった胸は少しふくらんでいた。
これは嬉しい変化だ!!

サラのむねが A から B にせいちょうした!!

・・・まあこのふざけたテロップもどきはほつといて

(ほつとくな!!)

あれ・・・?

頭に声が聞こえる・・・

アレですか?これが属に言う電(r y

(俺だ俺!! アルヴィトだよ!!

お前の体の再構築と強化が完全に終わったから何ができるようになったかとか色々教えてやるーって思ってきたのに……)

（ふーん。で、何が変わったの？）

（身体能力が上がったのと神機の解放が可能になったってこと。つっても式段階目までだがな。

後は大気中のオラクル微粒子を集結させ、自動起立兵器やら何やらが生成可能になった位か。）

（えーと・・・・・・・・）

全然理解できないんだけど。）

（・・・説明するより慣れろ、だな。）

（あ？）

直後私はまた精神世界に引きずり込まれた。

蝕之三十五・講習（前書き）

ダム of 意外な一面が……………今明かされる!!（、・ω・）

蝕之三十五・講習

「……レイジ。
ちよつといいか」

「はい？」

私がリビングで茶を飲んでいるとダムが話しかけてきた。
彼から話かけてくるなんて珍しい……

「弥彦と燕についてなんだが……
今後の事はお前と尾崎に任せたいと思ってる。

色々と手続きが面倒だからお前ら二人の年齢を偽装して20代前半の夫婦とし、弥彦
達をお前たちの子供としてフェンリルの方に届け出をしようと考えてる。

この件については燕や弥彦、尾崎も承諾しているから心配するな。

「

「ぶふおっ!？」
「

それを聞いた時、飲みかけのお茶を吐き出してしまった。

「うおっ!？汚ねえな!」

「す、すいません……………」

この野郎…とんでもない事さうつと言いやがって……………
しかもなんで尾崎はOKしてんだよ……………
別に嫌じゃないんだけどさ、つか嬉しいよ?
うん。割とマジで嬉しい。

私がお茶を拭きながら謝ると彼はため息交じりに話を再開した。

「はあ……………でどうなんだ?
この件は承諾してくれるか?」

「……彼女らがOKなら私は構いませんよ。」

「そうか、後は……」

ペペペペペペ……

話しの途中、携帯端末が鳴り響く。

「……つとすまん。」

そついうと彼は携帯端末を見る。

直後彼は露骨に嫌そうな顔を見せ、携帯端末をしまう。

「……どうかしましたか？」

「……県庁付近に荒神が巣くっているらしい。

数はおおよそ60。」

第一・第二禁忌指定種や大型は確認されてないらしいが……」

「禁忌指定種？」

「…禁忌指定種つてのは二種類居る。

まず第二禁忌指定種は、かつて人間が崇めていた神に似た容姿をしたアラガミ。凄腕の神機 使いでなければ、遭遇する事すら禁忌とされる強力な個体の事。

第一禁忌指定種は、

通常の接触禁忌種とは違い、神そのものに等しい存在とされている強力なアラガミのため、かつて崇拜されていた神の名前がそのまま使われている。オラクル細胞や偏食因子を不安 定にさせる「捕喰場」^{ハルス}を持っているため、接触禁忌とされている種の事だ。

『スサノオ』や『ツクヨミ』がこれにあたる。」

「詳しいんですね…」

「…これくらいは一般常識だ、覚えとけ。

……この際全部説明するか。

レイジ、美鈴以外全員集めてこい。」

「はい。」

~~~~~

数分後、美鈴とレヴィア以外の全員がリビングに集まった。  
するとダムはどこから用意したのかホワイトボードとマジックを用  
意して待っていた。

何処の講師ですか？あなたは…

「……レイジ、レヴィアはどうした？」

「呼びにいったんですが、

『夜通し見張り番をしたゆえ疲れているので少し寝かせてほしい』  
と張り紙がしてありまして…」

「…そうか。なら仕方ないな。」

彼はマジックの蓋を開け、ホワイトボードに書きながら説明を始めた。

「さて、それでは荒神について説明させてもらう。

荒神は現在

・基本種

・堕天種

・接触禁忌種（第二種接触禁忌種）

・指定接触禁忌種（第一種接触禁忌種）

・特異種

の5つに分類されている。

まず基本種だが・・・

墮天種や接触禁忌種と比較する場合に呼称される普通のアラガミの事を指す。

たとえば・・・『オウガテイル』

鬼の頭のような巨大な尾を持つ、白色で二足歩行の小型アラガミ。主に他のアラガミの死骸などを捕喰し、様々な地域でその数を増やし続けている。

発生地はアメリカ大陸だが、現在では世界で最も個体数の多いアラガミとされている。

2050年当初から存在が確認されており、アラガミの原型であるにもかかわらず、近距離、遠距離、全方位への攻撃手段を持ち合わせている為、ペイラーからは「原型にして完成体」と評されている。

ゴッドイーターに成り立ての者は初陣でまず必ずこのアラガミの討伐任務を与えられ、見事討伐することができて初めて正式なゴッドイーターとして認められるが、油断したことで命を絶たれてしまう新人神機使いが後を絶たない。

また極少数ではあるが驚異的に能力が向上した固体も確認されている。

次に墮天種。

これは姿形を変えず、超高温や極寒など、局地に適応した個体。

基本種とは違った攻撃を繰り出す。

一般の種より高い能力を持つ固体が多いが、局地に適応したが故に弱点を強めてしまったケースも多い。

先程のオウガテイルを例にすると

・オウガテイル墮天

寒冷地に適応したと考えられている黒色のオウガテイルの墮天種。そのため通常のオウガテイルと比較して皮膚が厚く、全体的に身体能力の向上が見られる。

寒冷地に適応したためか熱には弱い。

発生地はアメリカ大陸北部。

そして接触禁忌種。

第二種接触禁忌種とも呼ばれる。

かつて人間が崇めていた神に似た容姿をしたアラガミ。

凄腕の神機使いでなければ、遭遇する事すら禁忌とされる強力な個体。

強力な個体故、個体数は極少数である。

たとえば『ヘラ』『ポセイドン』などがこれにあたる。

ヘラやポセイドンは情報が無いため詳細は説明できない。

出会うことはまず無いだろうが

指定接触禁忌種。

又の名を第一種接触禁忌種と呼ばれるモノについても説明しておこう。

通常の接触禁忌種とは違い、神そのものに等しい存在とされている強力なアラガミのため、かつて崇拜されていた神の名前がそのまま使われている。

オラクル細胞や偏食因子を不安定にさせる「捕喰場」<sup>バルス</sup>を持っているため、接触禁忌とされている

たとえば『スサノオ』だ。

現在はスサノオ以外発見されておらず、またスサノオ自体の個体数も極々少数だからどうだっていい。

最後に特異種。

これは上記のカテゴリに分類されないアラガミの事を指す。

大体が新種や突然変異種だな。

ほとんどはすぐに上記4つのカテゴリに分類される。

たぶんレヴィアはここに分類されるだろうな。

人型で人格、意思等がしっかりしている荒神なんて俺は知らんし…  
こんな荒神が居るとペイラーが知ったら歓喜しそうだ…

……そうだ、墜ちた者<sup>フオールマン</sup>についても説明しておこう。

墜ちた者<sup>フオールマン</sup>。

これは人体に「偏食因子」をなんらかの形で過剰投与した結果、体細胞が「オラクル細胞へと変異し、細胞侵食を引き起こしアラガミと化する現象」。

もしくは、「偏食因子」を長期間投与されなかったゴツドイターが神機のオラクル細胞に侵食されてアラガミとなる現象。

または、適合していない神機を用いる事で拒絶反応を起こしそれにより使用者が神機のオラクル細胞に捕喰されアラガミと化する現象のいずれかを指す。

特にアラガミに変異したゴツドイターは「墜ちたもの（フオールマン）」と呼ばれ、人為的に改造されたオラクル細胞が様々な特性を持つて変質する為に、通常のアラガミ以上の脅威となる。

アラガミ化した神機使いの処理方法として最も効果が高いのは、アラガミ化するという大きなリスクを伴うが、アラガミ化した神機使いが使用していた神機を使って殺すこと。

現在のところ決定的な治療法は見つかっておらず、発見次第、直ちに処分するのが通例となっている他、万が一隊員がアラガミ化した場合その部隊の隊長には守秘義務が課せられる。

以上が荒神についての説明となる。  
わかったか？」

彼が後ろを向くと…

Z Z Z . . . . .

リビングに居る全員が寝ていた。

「弥彦や燕は仕方ない無いと思っというたが……  
大学生が寝るなよ。」

その惨状をみた彼はため息交じりにつぶやき、  
マジックのキャップを閉め……

ゴンッ、ゴンッ

「「痛つ!?!」」

レイジと尾崎を拳骨で撲った。

撲られた二人は頭を押さえ悶絶している。

「…………お前ら補習決定な。」

このホワイトボードに書いてある事全部覚えるまで逃がさんから・

・  
・  
・

覚悟しとけよ?」

この後夕方5時までの5時間、彼らがリビングにずっと拘束されていたのは言つまでもない。

蝕之三十五・講習（後書き）

ダムさん講師のほうが適職じゃないかな？って思った。

蝕之三十六・習うより慣れる的な

「起きろ寝坊助。

時間ねーんだからっ…よ!」

「いつだあ!」

精神世界に来て早々に私は強烈なデコピンを喰らった。

突然コツチに引きずり込んだ拳句、いきなりデコピンをするとはひどい奴だ。

…痛さのあまりデコを抑えて転がり回ったのは此処だけの話。

〈数分後〉

「で、神機の解放とオラクル微粒子なんチャラって何？」

「現実世界でお前に言った通りだよ。

□で言うより図とかで説明した方がいいのか？」

「お願いします。」

とりあえず土下座しました。

なんかアルヴィトさん、不機嫌そーなんだもん。

何処からともなく散弾銃みたいな黒い物体出して狙いつけずにブッパしてたりしてたし・・・

怖いよ。

現在私は怯えながらアルヴィトの目の前に正座で座って返事待ち

「ちッ・・・何度同じこと言わせるつもりだ？  
1回で理解しやがれ！！この絶壁が。」

あんたも十分絶壁でs…………

「ぐふお！？」

ドズンツとアルヴィト（以後アル）の正拳突きが綺麗に鳩尾に入り・  
・・・  
私はまたもや悶絶した。

「うつ！？」

ぐりぐりと素足で胸を踏まれるとアルの顔が今までにないくらいヤ  
バイ感じに笑っている。

……あれ？

アルの片手に拳銃擬きが見えるのは……………気のせいかな？  
銃口っぱいのがこっち向いてるのも気のせい…だよね？

気のせいであってほしいぞ、ば・・・

ズダンッ！！

「はひゃっ！？」

撃ちやがった！！超至近距離で拳銃ブツパしたぞ！？この干物女！！  
上下黒ジャージの酒浸り銀髪干物女が！！

「あのなあ…俺はお前だからお前の考えなんてわかんだよ……  
それこそ手に取るようになあ………ナニガイイテエカワカルヨナ  
ア？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
い……………」

カチリと拳銃のハンマーノーズを持ち上げる音がしたので私は泣き  
ながら謝った。

「じゃあテーマの追加された能力について説明すんぞ……  
一回しかいわねーからちゃんと聞けよな？」

\* . \* . \* . \* . \* . \* . \* . \* . \* . \*

…干物女説明中…

\*・\*・\*・\*・\*・\*・\*・\*・\*・\*・\*・\*

「つーことだ……  
わかったか？絶壁娘。」

「わかります」「歯あ食いしばれ」嘘です。わかりました。」

「じゃあやってみろ」

……出来るわけねーよ。

口じゃああは言っただけさあ……

お手本くらい見せてくれたっていいじゃん!!

こんな時は素直に聞くのが一番!

って事で……

「せんせー、お手本見してください。」

小学校低学年の様にビシッと手を天に挙げて先生に聞く!!

……はい? 恥……ですか?

そんなもの捨てた方がいいよ。

じゃないと散弾銃でピチュンされるから……ね?

「……一回だけな。」

そついうと彼女は何処からともなく私の神機を出現させ……

蝕之三十六・習うより慣れる的な（後書き）

アルちゃん干物女決定w

なんで機嫌が悪いんでしょかねえ・・・

カルシュームでもあげようかなあ（´・ω・´）

蝕之三十七・力の引き出し方

ズブツ・・・

「…え？」

彼女は出現させた神機で私を突いていた。  
神機の根元まで、深く。

ドサッ…

突然の攻撃、しかも敵と認識しているわけでない者からのモノに対処できるわけもなく、まともに突かれた私は神機（刀）を握りながら膝を付き崩れ落ちた。

「ア、アル…ど、どう…して？」

訳がわからなかった。

力の使い方を教えてもらう為にここへ来た（強制的にだが）のに。

なぜ…私は彼女に刺されなければいけない？  
どうしてだ？

「……………」

私の質問には答えず、突き刺したアルは平然と私を見下ろして居る。  
アルの表情に変化はなく、私を冷たく見下ろし続け……

「ぐあっ！？」

突然私を蹴り倒し、胸から神機を乱雑に引き抜く。

引き抜かれた神機は紅に染まり、形状のせいもあるのだろうが禍々しさを増していた。

胸の傷を抑えうずくまる私を心配する様子もなく、彼女は紅に染まった神機を眺め不適な笑みをうかべ……

「バーストモード 神機解放Lv2!!」

そう叫び神機を握り直す。

直後、私の血を吸って赤く染まった黒い細身の刀の様な私の神機は姿を変えた。

神機の姿は黒から真紅へと変わり、刃は巨大な犬歯の様に変貌し、刀身の幅は3倍程となり刃渡りは解放前の1.5倍程となっていた。

…神機はもう普通の刀ではなく、斬馬刀に近い形状になっていた。

（んー……こんなもんか）

それを確認したアルは神機を地面に突き刺し、胸を抑え地に伏すサ

ラの所へ走り寄り、彼女はサラを抱き起し優しい口調で話しかける。

「さっきは悪かったな、サラ。いきなり神機を刺したりしてでもさ、仕方なかったんだよ…」

「……何が仕方なかったのさ？  
なんとも言わずにいきなり私を突き刺しといて…」

私はジト目でアルを睨み、きつい口調で話しかける。

「じ、神機解放の為に仕方なくやったんだよ。  
……それにな、お前を刺すの辛かったんだぞ。」

答える彼女はちょっと慌てているようにも見えた。  
頬がちよつと紅くなっているように見えるのは気のせい……かな？

直後、アルは何かを思い出したように私の傷口に手を当てる。

「そ、それより傷治すからよ、ちよつとじつとしてろ。」

彼女は私を優しく地面に置くと、私の胸のあたりにそつ…と手を置いた。

すると身体が徐々に軽くなっていくのを感じる。

傷のあった辺りを見るともう傷は塞がっていた。  
触っても痛くない。

「すごい……ってどうしたのアル？」

アルの方を見ると彼女はしんどそうに息をしていた。

「あいや、ちよいとな…気にすんな。」

気にするなっていうほうが無理だよ…

今までにないほど辛そうにしてるし、すっげえ汗かいてるよ…  
それこそフルマラソンやった後みたいだねー

あぐらをかいていたアルは突然話しかけてきた。

「おーい…つるぺっ娘<sup>こ</sup>お。」

神機の解放方法は解ったよなあ？」

「荒神を斬って一定量のオラクルが溜まったら解放できるんでしょ？  
でさ、『つるぺっ娘<sup>こ</sup>』ってなに？」

「そーだよ。現時点で解放はLv2までしかできねえけどな。

さつさとバーストモードLvMaxまでしたいなら自分の血を神機に吸わせる。

そーすりゃサクツとLvMaxまで上がるからよw

斬った荒神が強けりゃ強いほど神機の解放時に大きな力が出せるんだ。

これは頭に入れとけ。損はねえはずだ。

『つるぺっ娘』はお前のあだ名。」

「!？」

「話続けんぞ？

解放Lvが上がるにつれて神機解放時間が伸びたり、威力が上がったり、攻撃範囲が広くなる。

当然見た目も変わるから楽しみにしとけ。

あーあ…疲れたからちよつと休むわ。」

「あ、ちよつと…」

私の話を聞かずに彼女は寝てしまった。

〈30分後〉

「うぁーあ……………」

アルはダルソーにあくびを一つかくと、あぐらをかいて座る。

「ねえアル、ちょっといいかな？」

「あぁん？」

「さっき…さ、私に何したの？」

あんな深い傷を一瞬で治しちゃうし……………」

「ああ…『リンクエイド』のこつたる？」

ありやな、簡単に言えば自分の体力を仲間に送って復活させる行為だよ…

その変わりにな、自分の体力がこつそり持って行かれるから気を付ける。

ちなみにこの行為はな、身体の中にオラクル細胞がある者同士でしかできねえ。

バンビ―  
一般人にやったら荒神化するから気を…付けな。

ああーダリイ……………

「まったくジズの野郎が羨ましいぜ。」

蝕ノ三十八・偏食因子製兵器（前書き）

今回は会話がおおいかな？

近々アンケート取りたいと思っているのでお願いします。

蝕ノ三十八・偏食因子製兵器

「ああーダリイ……………」  
「たくジズの野郎が羨ましいぜ。」

「なんで？」

「知つての通りあいつはな他の生命体を殺すのは得意じゃない。  
だからと言ってまったく殺せないわけじゃないからな？」

バトルセンス  
戦闘能力は高くない  
……ぶっちゃけ低い。

その代り、他者の傷を治す力は凄まじいぞ？

全盛期の時の奴は手で触れるだけで誰もが助からないと思うような  
瀕死の重傷のヤツを全快させることだってできた。

いまはできねえらしいがなあ。

さて、さっきも言った通りあんまり時間がねえ。  
大気中のオラクル細胞等を使って作り出す武器、

『偏食因子製兵器』

について教える。

さっきみたいにお前に危害は加えないから安心しろ。」

よかった。

毎回危害加えられたりしたら嫌だ。

てかたまったもんじゃないぜ…

いくら精神世界だからっていつでも痛いもんは痛い。

「まずはサラッと説明させてもらつ。

これは完全に体で覚えるモンだからな―

とりあえず説明始めるぜ？

まず頭ん中で形成したい武器、自立起動兵器をイメージする。

次に性能、動き、思考パターン e x t… をイメージ。

それでここが一番重要だ。

自立起動兵器に絶対『捕食行動』をやらせるな！

理由はまたあとで話す。

ここまではいいか？」

「おk」

「じゃあやってみよう。

まずは俺が自立起動兵器タイプの手本を見せる。」

ぐじゅ、ぐちゅり……

妙な異音と共に真っ白い部屋の中央に、真っ黒い騎士の様なモノが出来た。

全長は3Mほど。

頭部からは黒い羽のような長い飾り。

左腕には大盾

右腕には先端に斧が付いた槍

…イメージし難いならジ。リの『風の。のナウ。カ』に出てくる重騎士をイメージしてくれ。  
全体的にはそんな感じだ。

出来上がった騎士は直立不動のまま動かない。  
それを見たアルは少し納得がいかないのか後頭部を少し掻いていた。

「…こんなもんか？  
ホレ、やってみろ。」

「あ、うん。」

まずは全体的なイメージを浮かべる。  
次に性能、動き、思考パターンex

ぐじゅ、ぐじゅり…

「ソレ？　は異音と共に出てきた。」

「ア  
“ア  
“ア  
“ア  
“ア  
“ア  
……  
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

完全に出来上がった瞬間、そいつは呻き声のような産声サケヒをあげた

形成された瞬間、主を襲<sup>サウ</sup>う

全長3 m程。

主によってイメージされ、形成された漆黒の龍人の様な兵は

鋭く凶々しい爪の生えた両腕をダランた下げ、

呻き声にも似た様な荒々しく暴力的な咆哮をあげながら、

凄まじいスピードで低姿勢のまま突っ込んできた。

絶対の殺意の光を瞳に宿し、主を殺す為に。

暴走した自立起動兵と主の距離は残り数メートル。

「サラ！！」

主は突然の出来事と恐怖で足が竦んで動けなかった。

絶対の殺意を孕んだ瞳で睨まれた獲物は死を覚悟すると云う。  
そして逃げもせず、置物のようにその場にとどまり死を迎える。

暴兵の獲物、には全てがゆっくりと動いて見えていた。

黒い自らが生んだ兵器の動きさえも、

暴兵の後ろで叫ぶアルも

まるでスローモーションの様にゆっくりと

そして彼女は目を閉じた。

(私…此処で死んだら……どうなるんだろう?)

ガギン！！

「・・・？」

私が目を開けると目の前にはアルの生み出した自立<sup>きし</sup>起動兵が大盾で、



ガン！！

大盾を襲う衝撃をものともせず自立<sup>きし</sup>起動兵は槍を突き出す。  
しかし槍は空を貫いただけだった。

「？」

ぐしゃ

直後、騎士は黒い霧となり消える。  
先程まで騎士が居た場所には主<sup>サラ</sup>の生み出した暴龍兵が拳を地面に突き立て立っていた。

何が起きた？

アルはそんな顔でこちらを見ていた。

説明するところだ。

暴龍兵は大盾を構えた自立起動兵の盾を蹴り、そのまま上に跳んだ。蹴られた瞬間に暴龍兵が上に跳んだ事を知らぬ騎士は槍を突出す。騎士の上に跳んだ暴龍兵は天井を蹴り上から拳で叩き潰したのである。

暴龍兵はゆっくりとサラのほうを向く。

それを見たアルは叫ぶ。

「サラ、伏せろ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

暴龍兵は主でありながら獲物でもあるサラを斬り裂かんとして凶々しい爪の生えた腕を振り上げた。



蝕ノ三十九・暴龍兵

「サラ、伏せろ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「きゃあ!!!」

アルの叫び声が聞こえた後、暴龍兵は私の目の前から消え、少し遅れて凄まじい轟音と衝撃波が私の上を通過していった。

衝撃波に耐え切れなかった私は白い床を蹴られた小石の様に転がっていき数メートル程転がってようやく止まる。

床に倒れたまま私がアルの方を向くと、アルの右腕は真っ黒な大口径のスナイパーライフルの様なものになっていた。

「サラ、こっちだ!!!」

私は立ち上がり、暴龍兵から逃げようと立ち上がり走り始めた。

「ウォルルル………!!」

離れた場所から悔しそうな低い呻き声を聞いた私は、急いで身を翻ひるがえし臨戦態勢をとった。暴龍兵は頭を左右に軽く振り、ゆっくりとこちらへ向き直る。

そして暴龍兵は四つん這いになると口を開けた。

フォン!!

直後、硬直して動けない私の脇を雷を纏った黒いレーザーが亜音速

で飛んで行く。

その際に発生した衝撃波と言う名の暴風は私を殴り飛ばす。

「……………あああああああ！！！！」

そして、前方からは声にならない絶叫が白い空間に響き渡る。  
「タシノセイシンセカイ」

高電圧を纏ったレーザーはアルを貫き、吹っ飛ばすと壁に衝突し消滅した。

レーザーの纏っていた電圧はアルの全身を駆けめぐり、彼女の体の至る所から鮮血が噴き出す。

そして——アルはピクリとも動かなくなった

「…………アル！！！」

ズン！！

呆然としていたサラが走り出した瞬間、暴龍兵が空を駆けサラの少し先に降り立った。

「っ！」

直後サラは構え、戦闘態勢に入る。

暴龍兵はこちらへ向き直り――

「カゝアゝアゝアゝアゝアゝ……！！！！！」

全てを威圧し破壊する様な叫び声で咆える。  
その咆哮はサラを吹き飛ばした。

サラは数メートル程転がってようやく止まる。  
そして立ち上がり――

崩れ落ちた。

――オモイダサセルナ――

全身に力が入らなかった。

目の前の暴龍兵は変貌していた。

まだ人らしさの残っていたソレは完全に龍へと変貌した。

全身は闇すら飲み込んでしまいそうな程に黒い鱗に覆われ――

両腕には鮮血で染まった様な三爪サンソウの朱爪――

すらりと長く伸びた鞭の様な尾――

四対の揺らめく黒焰翼――

鼻先には漆黒の刃の様な細く長い角――

口から微かに覗くは欠けた犬歯――

尋常ではない殺意を孕んだ双眸そつぼうで睨まれたサラの足は震えていた。  
歯の根が合わずカチカチ音を立て、手のひらも腕も小刻みに震えだす。

暴龍兵はサラに向かってゆっくりと近づく。  
一歩、また一歩と。

ズン……

「あ……」

——ワタシハコイツヲシッテイル。——

ズン……！

「ああ……」

——『なぜダッテ？——』

ズン……！！

「ああああああああああ……！！……！！……！！」

——コイツハオオムカシノジブンナンドカラ。——

蝕ノ四十・ムカシノジブン

「あああああああああ……!!!!!!」

——コイツハオオムカシノジブンナンドカラ。——

(っぐ……)

サラが黒龍の目の前で崩れ落ち叫んでいる中、アルは意識を取り戻していた。

ただし、レーザーで貫かれ、吹っ飛ばされた時の恰好のまま倒れ動かないので、彼女<sup>アル</sup>が意識を取り戻しているとは誰も思はないだろう。

(ぐっ!?)

意識を取り戻した彼女<sup>アル</sup>を襲ったのはレーザーで貫かれた傷跡から伝わる痛みと肉の焦げるイヤな匂い。

傷跡からの出血は然程<sup>サボト</sup>ではないが、ソコから伝わる痛みは凄まじかった。

何とか痛みをこらえながら首だけ動かしてサラの方を向く。

（サラの目の前に居るのは何だ……  
さつき……の、暴龍兵は……  
どこ……行きやがった？）

「……………」。

サラは叫ぶのを止めた。  
そして崩れ落ちた時の姿勢のまま、眼球が飛び出してしまいそうな  
程に目を見開いていた。

一瞬、恐怖で固まっているのかと思った。

けれど、ソレは違った。  
サラの表情には、怒り・恐怖・畏怖・恐れ・憤怒・狂怒・悲嘆……  
いかなる感情も浮かんではいなかった。

ただ、目の前の黒龍オオムカシノジフンを凝視しているだけだ。

まるで、

——イマコノセカイニイルノハ『私』イマノジフンと『黒龍』オオムカシノジフンダケ——

とでもいったように。

今の彼女を見たヒトの十人中、十人がおかしいと感じる

——いや、おかしいと断定出来るほどに、明らかにサラの様子はおかしかった。

アルは悲鳴をあげる身体に鞭打って何度も呼びかけるのだが、  
サラの顔にも体にも全くと言える程に何の反応も示されなかった。

「サラ！！聞こえないのかっ！？サラッ！！！！」

『サラ！！聞こえないのかっ！？サラッ！！！！』

アルの声は確かに聞こえていた。  
だけど、ソレは別の世界の言葉のようで、何故かサラには理解が出来なかった。

そんな事よりもだ。  
オオムカシノジブン  
今日の前になんで私が居るんだ？

ザ  
—

心に空いた修復不可能な程に大きな穴。

私を貫き、直接手を突っ込んで。

中の柔らかい内臓を掴んで引きずり出す様に、  
血まみれの、思い出  
したくない記憶を掴みとる。

ザザ  
—

真っ暗な地下室の中のワタシ。

オカアサン、オトウサン、  
× × × × ×、  
× × × × ×……

皆どうして遊んでくれないの？一緒にいてくれないの？

一人は寂しいよ。悲しいよ。

お外で遊びたい。皆と一緒に居たいよ。

みんな私の事……嫌いななの？

ザザザ――

外は真つ赤な世界。

ボロボロになった皆。

どうしてこんな事になったちやったの？

教えて「――」

どうして？

ねえ「――」 答えてよ。

ザザザザ

壊れかけてしまったモノ。

チガウノ。

コンナノ、ノゾンデナカッタんだヨ。

シンジテヨ。

ザザザザザザ

「なんか大っ嫌い。」

友達だと思ってたのに。

どうして私<sup>サラ</sup>の大事な皆を傷つけたの？

ザザザザザザザ

---

消える。

消える？





ケシトンデシマエバイイ。

「……」





蝕乃？ 幕間 前編

銀髪の左眼に眼帯をした少女、『レヴィア・リル・ヒューリィー』  
は廃村の教会で自分の娘『アラストル・サラ・ヒューリィー』と別  
れたあと自身の傷を癒す為（傷を癒すのは本来の目的ではないのだ  
が）にある場所へ向かっていた。

「やっと着いた……  
ここに帰ってきたの何世紀ぶりかな？」

深い森の更に奥深く。

GPSも機能しないようなところに彼女の目指す場所があった。

人間じゃまず見つけれないだろう。

パツと見は古いかなり大きめの洋館。

鉄格子の門がありその両端から洋館を囲うようにぐるりと一周する高さ4〜5Mはあろうかという黒煉瓦の壁。

そこには彼女と彼女の夫をはじめとしたこの世界ではイレギュラーとされる者たちが住んでいる。

その中でも別格とされる者たちが7人存在する。

7人は各々特別な力を持つらしいのだが……まあその話は今度しましょうか。

「えーと……いたいた!」

正門付近で壁に腕を組んで寄りかかっている門番らしき女性をみつけ、リルは手を振りながら少し小走りで近づく。そして残り数mまで近づきリルは門番であろう女性に話しかけた。

「バル・ペオルー!!」

「……」

「おい？バル？」

返事がないのでさらに近づき、顔を下から覗きあげる様に話しかけると、

「zzz……」

と寝息が聞こえた。

しかもヨダレ、半目、寝言付き。

『こんなに食べられまふえんよ……』

こんな事いいながら幸せそーな笑顔を浮かべ寝ていた。

「整った顔が台無し……  
つか職務怠慢!。」

リルはちょっと頬を膨らませながら寝ている門番のすねを思いつき  
り蹴ってやった。

ゴッ……

「いったあああ————！！」

蹴られた門番は森中に響いたんじゃないかと思う程大きな声をあげ  
ながら脛を抑えてのたうち回った。  
しかも超涙目で。

——2分後——

「お嬢様……いくらなんでも脛蹴りはひどいですよ。」

彼女は座って蹴られた方の片膝をたててまだ脛を抑えている。  
抑えてる手の隙間から見えた脛はまだちよつと赤い。

「あはは……ごめんごめん。」

あとさ、パンツ見えてるよw」

「ちよつ！？お嬢様！！見ないで下さいよっ！／＼  
そ、それよりその御姿はどうなされたんですか？  
真っ赤ですよ……？」

バルはあわてて座り直し、顔を真っ赤にしてスカートを抑えながら  
叫んでいた。

（バルはあんまり変わってないなあww）  
私は内心そんなことを思いつつ笑っていた。

「あーそうだ、バル。  
リュツィが何処に居るか知らないな？」

「旦那様ですか？旦那様ならお食事中ですけど……  
って旦那様を呼び捨てにしてはいけませんよ？  
あと私の質問に答えて下せいませんか？  
どうしてそんなに血の匂いがするんです？」

「あいやあ……ちょっと荒神に襲われてさ／＼」

私の返答に彼女は呆れた様な顔を見せると服をはたきながら立ち上がった。

「御冗談はよして下さい。  
とりあえず医療室に行きましょう」

「えー……あそこ嫌いなんだけどなあ。  
薬臭いし、雰囲気がいや」

「そんなこと言わないで行きましょう。  
第一こんな姿のまま会いに行こうものなら、ラストさんに怒られますよ？」

「うつ……わかったよ。」

しょうがなく私はバルと共に医療室へ向かうことにした。

医療室とラストの説教とどっちが嫌かって言ったら、絶対ラストの説教。

話は長いし、正座しなきゃいけないし、弄れないし……

……なんか思い出したら嫌な気分になってきた。

——医療室——

ガラララララ……

「おーいラファ、いるかい？」

医療室に行くと今一番会いたくないヤツが居た。  
そつ、ラストである。

「あら……どうしたのバル？  
ラファなら食事中だけど……どうして血の匂いをするのかしら」

「「！！」」

私たちが予想外のエンカウントに驚き固まっていると、ラストは少し怪訝そうな顔を見せ再度質問してきた。

「……？  
それで、もう一度聞きますが……どうして血の匂いをするのかしら？バル」

少しフリルが多目なメイド服に身を包んだラストが包帯等の簡易医療具を棚にしまいながら少々冷たい声で問いかけると、バルはあわて気味に返事を返す。

「えっと……そのー、何と言いましようか……」

バルはキョロキョロと落ち着きのない様子だった。  
突然、何かに気づいたように話始めた。

「そつ、それよりどうしてラストさんは此処いりまうこに居るんですか？  
い、いつもはいないのに……め、珍しいですね」

「はあ……」

バル、焦らずしっかり話してください」

慌てて喋る彼女バルに呆れた様な表情をしつつ淡々作業を続けながら答えしていく。

「わたくしが此处に居るのはラファさんに医療品や不要書類などの整理を頼まれたからです。」

で……どうして血の匂いがするんです？」

「そ、それはですね……仕事中に怪我をしてしまつて／＼」

「嘘はいいですから、本当の事答えて下さい」

と、バルの返答に冷たく答えた。

そしてメスを片手に向き直り絶対零度の笑顔で微笑みながら問いかけなす。

「いい加減に本当の事いいなさい？バル。

……さもなくば『ピー』して『ブツブ』しますよ？」

（もうだめだ……完全に嘘がバレてる！！）

ピリピリと張りつめた空気の中、そんなことを思いながらバルが小刻みにガタガタ震えていると……

「……あらら？  
何か御用ですか？バル？  
それにお嬢様までえ……どうしたんですかー？」

後方からかなり呑気な声が聞こえた。

「ラファ！もっとゆっくり食べても良かったのに」

この声に反応したのはさっきまで軽い殺気を発していたラストだった。

ラファと呼ばれた女性は唇に人差し指を軽くつけちよつと困った様な仕草をしながら答える。

「んー……そういつてくれるのはありがたいんだけどお。  
ラスちゃんに仕事頼んだまま自分だけゆっくり食べるのも悪いなあって思ってたさあー」

そこまでいうとラファはバルの後ろに隠れているリルの方へ向き直り話しかける。

「でえ……どうしてお嬢様はそんなに血まみれなお？」

「ええと……」

「答えたくないならあ……別に良いんだけどねえ」

リルが言葉に詰まっているとラファは彼女をヒョイと持ち上げ医療室のベットに寝かせた。

そしてリルの寝かされているベットを仕切りのカーテンで囲うとラファは彼女の服を脱がせ、一糸纏わぬ姿にした。

「ん……特に致命傷はないみたいだね。

……細かな外傷は結構あるけど

はいコレ着てくださいねえ」

ラファはそう言ってリルに真っ白な患者服を渡す。

リルは患者服を受け取りすぐに着る。

「んー……？」

ラファはリルから脱がせた服を手には不思議そうな顔をしていた。

そして暫くしてから（といっても1分程度だが）リルに向き直り、まるで独り言を言うかの様に彼女に問いかける。

「この服ってさあ、君のお母様の服だよねえ……しかも相当昔の奴だあ。」

頭に布なんかまいて、昔の奥様にそっくりw

頭にまいてあるこの布も真っ赤だから取るよお」

「？」

額の布の下には模様にも似た傷があった。

「あれねえ……この傷があるってことは」

布を取られ呆気にとられているリルは

「そうだよ。」

大体想像はついてると思うけど私はレヴィア・リル・ヒューリィー。  
……サラじゃなくてがっかりした？」

そういつて苦笑した。

この返答にラファは先程の様などこか気の抜けた口調ではなく、しっかりとした口調で話し始めた。

「いえいえ、そんなことはございませんよ。

ご無事で何よりですリル様。

長期間消息不明でしたので……とても心配したのですよ？

その……リル様、此度はお嬢様と間違えて大変申し訳ございません。今後はこのようなことが無きよう気を付けます。

あの、つかぬことをお聞きいたしますが今までどちらにいらしたのですか？

それと、なぜそのような御姿に……？」

「別にそれは構わないよ。

こんな姿で来た私が悪いんだからさ。

今までどこにいたか、なんでこんな姿なのかは後で教えるよ。

話すと長いし、恥ずかしいからね／＼／＼」

そういつてリルは頭を軽くかきながら答え、まるでくすぐったそうに笑った。



蝕乃？ 幕間 後編

「そうですか。」

では只今お召し物をお持ちいたしますので少々お待ちください」

彼女はクスリと笑いぺこりと一礼し医療室<sup>ラファ</sup>から出て行った。

「ねえバル。」

さっきはどうしてスグにホントの事言わなかったの？」

「そ、それはだな……」

カーテンの外側では、バルがキョロキョロと落ち着きのない様子で目を泳がせながら適当な言い訳を考えていた。

「説教が面倒だからだよね？  
バルｗｗｗ」

「そうそう、そうなんだよー……って何言わせるんですか！？リル様！ー」

「（爆）ｗｗｗｗｗｗｗｗ」

彼女<sup>バル</sup>の返答にラストは完全にキレた。  
額に青筋、怒りの感情しか感じない完全に引きつった笑顔。

「バル……ちょっとお話ししようね……」

「え、あ……嫌だあああああああ！ー」

ラストの笑顔に恐怖を感じ逃げ出そうとした瞬間、

ガッ！！

一瞬でバルはラストに捕まった。

振り返りラストの方を向いたバルは今にも泣きそうな表情だった。

「ひいつ！！」

「誰が逃げていいといいました……？」

「嫌だ！！まだ死にたくないいいいい……」

そしてそのままバルはズルズルと連れて行かれてしまった。

彼女が何処へ連行されたのか、そして何をされたのかはあえてここには記しません。

皆様のご想像にお任せするよ（笑）

彼女らのそんなやり取りみて笑っているといつの間にか洋服を持っていたラファが居た。

何時入ってきたんだか……

「ラファ？早いね」

「そうですかあ？」

ラファはにこやかにそんなことを言いながら持ってきた服を綺麗に並べていく。

服を並べながら彼女はバル達の去って行った方向をみる。

「それにしてもあの二人、仲が良いですね。

なんか羨ましいなあ……」

そんな事を言う彼女の顔は、ほんの少し悲しそうだった。

「ラファ……」

実を言う<sup>ラファ</sup>と彼女は此処に来て長くない。

ラストやバル、ほかのみんなに比べて日が浅いのだ。

それ故か彼女等<sup>ラストやバル</sup>の様に親密な関係をいまだ持っていない。きつとそれが羨ましいのだろう。

「さて、リル様。

どのお召し物になりますか？」

私がそんなことを思っていると、それを察したのか先程までの悲しげな表情を止め、いつもの愛らしい笑顔でこちらに向き直っていた。

「んー……ラファはどれがいいと思う？」

「これなんてどうでしょう？」

「いいねー！」

着替えるからちょっとあっち向いてて」

「はい」

ラファが選んだのはライトブルーの短めのドレスだった。

ソレには余計なフリルなどは一切なく、動きやすいタイプのものでデザインも好みのタイプだったので私は迷わず着た。

「ねえラファ、これは誰が作ったの？」

「こちらのドレスをデザインしたのはサラお嬢様ですよ。」

まだ裁縫はできなかったので代わりに私が縫いましたが……」

ちなみにここに住んでいるメンバー達が着ている普段着は各々がデザイン・作成したものである。

故にその人のファッションセンス・好み等がよくわかる。

例えば先程ラストに連行されたバル。

彼女はミリタリー系とゴシック系が合わさった様なデザインを好むので男っぽい服がおおい。

また、見た目より機能性を重要視する傾向があるので露出箇所が多い物はあまり持っていない。

「へえ……あの子なかなかいい物作るじゃない！  
気に入ったよ！！」

「その言葉を聞いたら、お嬢様はきっとお喜びになられるでしょうね」

彼女は片手で口元を隠しながらクスクスと笑う。

なんで彼女の取る仕草はこんなにもかわいいのだろうか……  
抱きしめて頬擦りしたいくらいだ。

「さて……そろそろ旦那様もお食事を終えたはずですし……  
行きましょうか？」

「そうだね。色々報告しなきゃいけないこともあるし」

私たちはこの館の主に会うため医療室を後にした。

リュツィの部屋に行く途中、私たちは色々な話をした。  
料理の話やら、館内の人間関係とか……とにかくいろんな話を話した。

そうこう話しているうちに私たちはリュツィの部屋の前へと到着。

トン、トン、トン、トン

「旦那様、お邪魔してもよろしいでしょうか？」

ラファは部屋の戸を4回ノックしてから訊ねた。

ちなみにだが戸のノック回数には意味がある。  
現実で意外と役に立つので書いておこう。

ノック2回はトイレ。

3回は友人知人恋人等の親愛ある間柄。

4回が仕事先、目上の人を訪ねる時などの礼儀が必要な場所に。  
ノック5回は絶対の殺意を表すそうなので気を付けましょう。

「ラファか。入れ」

戸の奥からは威厳に満ちた凛々しい青年の声が返ってきた。

「失礼いたします」

中に入ると立派な椅子に一人の青年が腰かけ、窓から外を眺めていた。

その後ろ姿は堂々としていて威厳に満ち触れている。

「どうしたラファ？  
医療用具でも足りなかったのか」

「いえ。此度旦那様を訊ねた理由は違います。  
旦那様の最愛の方がお尋ねになられているので……」

「最愛の者？」

リュツィは椅子に腰かけたまま全く動かずラファに問う。

「ええ」

「……久しぶり、リュツィ」

「その声……」

青年は首を動かしてこちらに向き直る。  
そしてラファとは別の声の主の顔を見ると立ち上がり、ゆっくりと  
歩み寄っていく。

「リル……無事で何よりだ」

そういつて彼はリルをギュッと優しく包んだ。

「急に消えたりして……ごめんね」

リルはすまなそうに苦笑しながら夫に言った。

二人は暫く抱き合ったのち、部屋にあるソファに三人で座り込む。

「ねえリュツィ。」

「ちょっと話があるんだ」

「話？」

「うん。」

ラファにはもう話したんだけど、今この世界には 荒神 がはびこってる。

私もここに来る途中何度も襲われたよ」

その話を聞いた彼は少し呆れた様な口調で答えた。

「そんな訳がある筈なかるう。

????? 年前我々が処分したではないか」

「リュツィ、これを見てもそんなことが言えるかい？」

コトリ……

「これって……」

私はハガンコンゴウのコアを机の上に静かに置いた。

コレを見たラファとリュツィは暫く興味深そうにコアを眺め、手に取って観察していた。

ちなみに、このコアはリルが封じられていた祠周辺の森で彼女に喧嘩を売った馬鹿猿のモノである。  
サイズは林檎とほぼ同じ大きさで色は金色。

……誰だ？

キ。タマとかいった奴。

出てこいよ。

お前のキ。タマも同じようにしてやっからよ。

「これは……確かに破顔金剛の御霊だな。  
どこで手に入れた？」

「そこらへんだよ。」

あとさ、今の時代は『御霊』じゃなくて『コア』っていつらしいよ。

「

「そうか……これは後で調べに行く必要がありそうだな。  
二人とも、その時はついてきてくれるか？」

「ええ」

「私は……ちょっと遠慮させてもらいたいな。  
暫く真面まこもに休んでなかったから、正直言つと辛いんだ」

「そうか……ならば暫くは好きな場所でゆっくりと休め」

彼はリルを心配そうに見つめ深く長いため息をついた。

このため息はリルが調査に同行してくれないからついた訳ではない。  
妻リルの体の不調に気づけ無かった自身に呆れ、ため息をついたのである。

よく見ればリルの顔には疲れが色濃く出ていた。  
顔色が悪く、目の下にはクマがあり、彼女の華奢な腕や足には傷跡が生々しく残っている。

「ごめん。そうさせてもらうね……」

「ああ。ゆっくり休んでこい」

リルは申し訳なそうな表情を見せリュツィの部屋を後にした。

「ラファよ」

「何でしょう?」

「今回の調査は私一人で行く。  
ラファはリルの傍にいてくれないか?」

「別に構いませんが……  
なぜ御一人で行かれるのですか?」

「別に理由はないが……  
それよりもリルの事、頼んだぞ」

リュツィはそういつて一方的に話を切ると、足早に部屋の奥のクロ  
ーゼットへと行ってしまった。  
ラファの眼はリュツィの表情の変化を見逃さなかった。  
常に冷静沈着で落ち着いている彼の表情には焦りが見えたのだが、  
ラファはそれを口にはしなかった。  
そしてすぐに彼女は一言も発さずに部屋を後にした。

部屋の奥のクローゼット。

その空間の奥にある隠し扉を開け、中に入るとそこには無限に広がっているようにも思えるような暗闇が広がっている。

その暗闇の中に、青年はたゆたっていた。

青年は暗闇の中、身じろぎ一つしない。

青年の名は『リュツィ・フェール・ヒューリー』

この世界ではイレギュラーとされる者たちが住む館の主である。

彼の瞳が右から左へ、そして上から下へと移動していき――

あてもなく彷徨っていた瞳は、ここではないどこかを補足し動きを止めた。

「そこか」

凜とした声が暗闇に響き渡った。

それと同時に彼の足もとで燦っていた碧の炎が<sup>ほのお</sup>鳶の如く青年に絡みついてゆく。

やがてその炎は彼を包み込むと、突如業火となって墳き上がった。

青年は碧炎を引き連れて暗闇の中を進んでゆく。

やがて彼は暗闇と同化を果たし、その姿を消した。

彼はとある民家の三階にある部屋へと吐き出された。

その部屋は所々塗装が剥がれ、コンクリートが向きだしになっている。

そんな部屋の下――

一番よく日が当たる場所に青年とリルの子、サラは眠っていた。

ただその寝顔は苦痛に歪み、苦しそうに呻き声のようなモノをあげている。

娘は呻きのような辛そうな声を微かに発しつつ、心臓の辺りを強く握り身を締め丸まった。

抑えられた胸からは血が流れ出し、真っ白なベッドを濡らしていた。

リュツィは悪夢にうなされ苦痛に顔を歪める娘の前に立ち、そっと額に手を触れ――



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7412u/>

---

G O D   E A T E R

2011年11月18日05時41分発行